

---

# バカと武術と召喚獣

直井刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと武術と召喚獣

### 【NZコード】

N6030V

### 【作者名】

直井刹那

### 【あらすじ】

この物語は『バカとテストと召喚獣』の一次創作です。

また『真剣で私に恋しなさい』とのクロスものです

オリ主が幼馴染の明久とそして秀吉、雄二、ムツリーー等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと

そして真剣恋の川神姉妹たちと

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じやなきやダメだという人はバックしてください。

一応原作に沿つよつにはしたいと思います  
気が向いたら読んでいただけると嬉しいです

## バカテス

この物語は『バカとテストと召喚獣』の一次創作です。

また『真剣で私に恋しなさい』とのクロスものです

オリ主が幼馴染の明久とそして秀吉、雄一、ムツリー二等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと

そして真剣恋の川神姉妹たちと楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じやなきやダメだという人はバックしてください。

一応原作に沿うようにはしたいと思います  
気が向いたら読んでいただけないと嬉しいです

## 設定

この物語はバカとテストと召喚獣と  
真剣で私に恋しなさいのクロスものです

### 設定

- ・オリ主が明久たちバカテスマンバーと川神姉妹と学園生活を面白おかしく過ごしていきます
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- また、オリ主と川神百代も観察処分者にしています
- ・オリ主は川神百代と同じ位の武力を持つ

### 変更点

- ・明久は姫路に恋心を抱いていない
- ・川神百代が2年生ということにしています
- ・明久は健康的な食生活をしている

また書いているうちに変更する場合があります。  
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

## プロローグ（前書き）

プロローグです。

今回は明久とオリ主の登場です

## プロローグ

『試験召喚システム』——  
科学とオカルトの偶然により完成されたそれは  
テストの点数に応じた『召喚獣』を呼び出し戦うことのできる最先  
端システムである。

その召喚獣を用いたクラス単位の戦争——

それが『試召戦争』——試験召喚戦争である。

試験によりクラスがAクラス～Fクラスにまで振り分けられる。  
振り分け基準は勿論テストの点数である。

頭が良ければAクラス、そこからB、C、D、Eと下がっていく、  
最も頭が悪ければFクラスとなる。

更にこのシステムが運営されている、

この『文用学園』では、テストの上限がなく、クラス毎に設備が変  
わる。

Aクラスでは、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライ  
ニングシートなどの

設備が整っており、全て学園側から支給される。

一方Fクラスはといふと、机は卓袱台、椅子は座布団、チョークす  
ら用意されていなく、  
蜘蛛の巣がはつていて、カビ臭い。

しかしそんな設備も『試験召喚戦争』により変えることができる。

下位のクラスは上位のクラスに勝てば施設を交換できる。  
逆に負けた場合は施設が一段階悪くなる。

今日はそんな学園のクラス分けテストの日……  
俺は試験を受けていた

「それではクラス振り分け試験始め！！」

教師の合図で全員がテストをめくる。

明久「（難しいと噂の試験だけどこの程度なら十問に一問は解ける  
！！）」

ここに、試験に取り組む少年がいた。彼は吉井明久という。  
明久は俺と中学からの親友である。

『ガタンッ！』

突然明久の近くで誰かが倒れた。

明久「ひ、姫路さん！？」

明久は席を立ち、二人に駆け寄る。

教師A「吉井！！試験中だぞ、席につけッ！！」

明久「でも、姫路さんが……」

教師A「姫路、…体調が悪いなら保健室に行くか？」

ただし試験中の退室は『無得点』扱いとなるがそれでいいかね？」

明久「ちょっと…！具合が悪くて退席するだけでそれは酷いじゃないですかっ！」

姫路「……た、退席します…」

教師A「では姫路、お前は無得点だ」

姫路「……はい…」

明久の必死の抗議も聞き入れてもらえず、結局姫路さんは無得点扱いに。

ちょっと理不尽すぎやしないか？こんな事で無得点なんて。

姫路「失礼…………しま…………あ…………」

明久「つー姫路さんつー」

フラフラしながら教室を出ようとする姫路さんがバランスを崩し、咄嗟に明久が支える。

明久「姫路さん掴まつて。僕が保健室まで付き添うから」

姫路「よ…吉井くん…、でも…」

教師A「吉井、何をしているー早く席に戻れー！」

明久「こんな状態の姫路さんを放つておく事なんて出来ません!」

教師A「貴様も無得点扱いにするぞ!…?」

明久「…」自由に。姫路さん、行こ!」

教師A「待て、吉井!…」

『ピシヤツ!』

先生の言葉を氣にも止めずに、明久は姫路さんを連れて教室から出ていった。

…… そうだよな、明久はそんなヤツだからな。  
自分が大事だけどそれ以上に周りの人を大事にするヤツだからな……。  
そんな明久だから、俺はアイツの親友でいられるんだ……。  
(さあて、そしたら俺はどうするかなあ……)

皆には悪いけど明久と同じクラスになりたいしな、いつそ名前無記入で出すかなかなあ……。

と、そんな事を考えていたり……。

教師A「チツ、クズが……」

あ?

氣のせいだらうか…。この教師、今小声で許しがたい言葉をほざいた様な…。

教師A「まったく、バカの考える事はよくわからん」

.....。

『ガタツ！』

教師A「ん? 何だ真田、お前も無得点にされたいのか!?!?」

何か言つてるみたいだけど全然聞こえない。

今、俺にはテストよりも大事な事しなくちゃいけないことがある。  
何かつて? それは 。

『ツカツカ』

教師A「な…、何だ!?!?」

八雲「(ニコツ)」

『バキツ!?!』

教師A「ぐぼおつ!?!?」

俺は教師の腹を殴りつけた

八雲「すいません。真田八雲、気分悪いんで早退します」

悶絶してる教師と睡然としてる他の生徒に一瞥もくれず、俺は拳を振りながら教室から出ていった。

## プロローグ（後書き）

さて今話から物語のスタートです。

今後マジ恋キャラは誰が出るのかお楽しみに

このキャラをだして欲しいとこいつ要望があれば教えてください。

なるべく希望に添えるようにしたいと思つてます

## 男達の朝

俺はいつも明久たちと登校する。今日もいつもとかわらない

明久「おはようハ雲！」

ハ雲「おう、おはよう明久！」

麗子「ほらーっガクオ！早くしなさいよ！！ハ雲ちゃん達行つちやうよー！」

俺の家の隣にある島津家が騒がしかった。隣にいる島津家とは昔から知り合いだ。

ガクトの母麗子さんには小さい頃から世話になっているし、俺の家が武道の家なのでその門下生に食事なども出してくれている

岳人「うるせーな！あんまり恥かせんな母ちゃん！」

ハ雲「やあ、名前負け」

岳人「いきなり喧嘩売つてんのかてめー！」

ハ雲「冗談だ。今日も超かっこいいぞ」

岳人「おいおい、よせやいいきなり本当の事を。髪型とか、ビシツと決まってるだろ」

明久「やけに自信満々だね」

岳人「秘訣はこの本にあるんだぜ。髪型のキメ方から何から、この本の通りに行動すれば女は落ちるって、このモテ×2本に書いてあるんだぜえ」

八雲「なんだその見るからに自費出版の安物本は」

岳人「ネットで見つけたんだ」

明久「…………しようもないね…………」

岳人「はん、俺様はお前のほうが心配だぜ明久くんよお」

明久「何その不快な上から目線」

岳人「男の八雲でさえ俺様にモテオーラ感じるってのに」

八雲「あれ俺何か言つたっけ？」

岳人「今日も超絶かっこいいと言つただろ」

八雲「そんなの嘘に決まってるだろ。馬鹿かよ」

明久「ガクトの頭が心配だね。将来大丈夫かな」

岳人「なんだこの幼馴染たち容赦ね——————ってか明久には言われたくねー！」

八雲「でも明久はガクトよりは成績は良いぞ」

明久「でもガクトは余計な事はしないで己の体を信じればいいと思うよ」

岳人「そうだな。本に惑わさせず肉体美で売つていこう」  
そういうとガクトはクルミをコリコリ握り始めた。

俺と明久とガクトは川沿いを歩いていく。

春の日差しの暖かさが心地よい

八雲「ぽかぽかの天氣だ。この川原で昼寝したいなあ」

明久「・・・1人で？」

そうだよ。俺、彼女いないもん

岳人「女がいないからって俺様に走るなよ？」

八雲「ゴリラはバナナでも食べてう」

誰がお前なんかと寝るか！

岳人「人間扱いしろよ」

バキッ（ クルミを碎いた）

八雲「靈長類であるだけ感謝」

岳人「おいレイチョールイって何だ？」

明久「良く学校に入れたよねガクト」

八雲「土地を持つてるから裏口に違いないさ」

岳人「俺様が死ぬ氣で勉強したの知ってるだろうが！」

ガクトの家は昔からここら辺の土地を持つていてその一部を学校に提供してくれている。

## 男達の朝（後書き）

今日2話目の投稿です。

マジ恋からガクト参加です。

ガクトはネタでかなり使えるので出してしゃべりました（笑）

次回は「よしよ姉さん登場です。

まだキャラの要望受付中です。

一応Bクラス戦までの募集にしようと思っています。  
もしかしたらまだ伸びるかもしませんが、

キャラの要望があれば教えてください。

これからも応援よろしくお願ひします

## 川神百代 登場！

明久「なんであそこに人が集まっているんだろう？」

集団の視線の先、川岸を見るとそこには

ハ雲「げえ、なんてこつた」

見るからに不良な男達が集団（12・3人）で1人の女の子をグル  
りと取り囮んでいた。

しかも男達はバットとか武器持っているし。

周りで見ている文月学園の生徒の連中は助けもしない  
むしろ連中はこの見世物をワクワクした目で見てているのだ。

ハ雲「これは朝から大ピンチだな」

明久「早く止めないと大変な事になっちゃうよ」「！」

ハ雲「じゃあ行つて来い明久」

明久「やつぱり僕が行くの」

岳人「つかお前弟だろ」

明久「弟つていうか弟分なんだけど……まあいいや」

明久が向こうへ駆けていく

明久「君達待て待て待て————！」

取り囲みの現場へと飛び込んでいった

明久「ここは僕が食い止める！」  
大声で叫んだ

明久「だから今のうちに早く逃げるんだつ！」

必死に語りかけている

不良A「……はあ！？俺たちに言つてんの？」

不良たちに。

明久「そつだよ！早く逃げて！つていつか相手見て喧嘩売つたほうがいいよ。

おの女人人が誰だかわかっているの？」

不良A「分かつてんよ。川神百代だべ？」

不良B「クス…女だからって手を出せないとと思うなよ」

不良C「くつくつく、お、お前は通学路で多くの生徒が見ている中、敗北していくのだ」

百代「テトリス、か。懐かしいな」

不良D「あ、何言つてるんだお前」

不良E「だから何だつ！関係ねーだろつがあー？」

不良F「つうか何落ち着いてだお前！－“ムカツク”ぜー！」

百代「久々にやつてみたくなつた。協力してくれ」

不良E「ああ！－？」

百代「こんな風にしてお前達をブロツクに見たてよう」

ボキッ

不良E「ザカツ！－？」

男の腕間接がありえない方向に曲がつていた

不良E「い、いてえええ！俺の腕があああ！－！」

不良A「て、てめえ！よくもやりやがつたな！」

不良C「皆で“ヤ”つちまえええ！－！」

百代「遅い！－お前ら赤子か！？」

一瞬で男達は全員フツッとばされていた。

周囲の観客から、待つてました、とばかりにドツと歓声がわきあがる。

観客の多くはつづりの学生だ。男子も女子もキャーキャー騒いでいた

明久「相変わらずモモ姉は動きすら見えないよ」

八雲「1人1発ずつ蹴りを入れていったな」

岳人「そ、そうだな。うん。すげー蹴りだった」

八雲「嘘。実はパンチ」

岳人「八雲てめえ」

明久「……ガクトでさえ見えなかつたのね。八雲は良く見えるね」

八雲「鍛えられているからな」

俺たちが話している間に不良達をテトリスのように積まれていった

百代「ふふっ、美しく積みあがつたな」

明久「モモ姉、これはもはやホラーだからね」

人間が塔になってしまっている。

百代「おつとテトリスは並んだら消さないとな」

百代が回し蹴りで積み上がつた男達を吹つ飛ばす。

百代「駆けつけてくるのが遅いぞア・キ・ヒ・サ。私の弟分なんだ  
からキリキリな」

すい、と明久との距離を縮めるとグリグリと頭を撫でる。

明久「早く行かないと遅刻しちゃうよ

百代「……んつ！？待て待て群衆に見慣れぬ顔を発見！」

百代がギャラリーの中へ突撃。

八雲「まーたはじまつた。娘あさりが……」

おそらく今年新しく入ってきた新入生をお姫様抱っこしている。

しばらくしてその女の子をおろして満足そうにこちらに戻ってきた

百代「見たかお前ら。あの娘完全に脈ありだ」

岳人「見たか、じゃねえよモモ姉」

百代「なん？」

岳人「いつも可愛い女の子を一人で持つていきすぎー俺にも回してくれよ！」

百代「いやだね。欲しけりや自分で調達すればいいだろう。  
まあ可愛ければ私が略奪するが。ふふふ」

明久「過激だ」

岳人「美人の女好きって超もつたいねえよ……」

百代「おいおい私は別に根っからの女好きじゃないんだぞガクト。  
ただ周囲の男が魅力なくちゃな。女の子にちょっとかいも出す

る」

ハ雲「いや、百代のハードルが高すぎるんだよ。

皆“俺には無理”って言ってアピールすらしないし

岳人「俺様はそんな軟弱コンビどもとは一味違うぜー・タフガイな俺様と付き合つてくれ！」

明久「いきなり告白とか頭大丈夫？」

百代「だめだ、魂がこもっていない。それより以前にムサすぎてアウトだ」

一刀の元に切り捨てられた。

岳人「なんのまだまだ。知ってるか？人生にはモテ期つてのがあるらしい」

明久「それ都市伝説な気がするよ。だって僕ないもん」

百代「じゃ、ま。時間も時間だ。ガッコに行くか」

周囲のギャラリー達もそろそろ遅刻と分かつてか移動を開始していった。

橋に到着。この橋を渡つていけば文月学園だ。

川神百代 登場！（後書き）

今回は川神百代登場です。

次回は妹が出てきます。

次回の更新も頑張りたいと思います。

応援よろしくお願ひします

ワン子登場！

一子「みんな――、おはよ――――――！」

百代「お、妹が来たぞ」

ハ雲「よつ（拳手）」

明久「おはよ」

走ってきた川神一子に挨拶。

岳人「おうワン子」

一子「なんか川辺で大勢のびていたけど、お姉様？」

百代「ああ。つまらない相手だったな」

一子「あはっ、やっぱり凄いや！」

岳人「ワン子。今日はひきずつてるタイヤつか」

一子「うん、その分川沿いに隣の県まで行つてきたよ

明久「昨日は静岡まで走りに行つたのに元気だね」

一子「いっぱい鍛えないといけないもん！アタシはお姉さまに比べるとまだまだだから」

百代「健氣だな。じうだ自慢の妹だぞ」

一子「いやー照れるなー」

百代「百兆円で売つてやる」

一子「え?アタシ売られちゃうの?そ、そんな

百代「冗談だよ。本当にそなつても金だけ奪つてお前は売らない  
や」

一子「さすがお姉様 強くて素敵 いずれお姉様と肩を並べられる強さを手に入れるわ」

明久「この人が2人とか勘弁してほしいよ」

百代「んー?今のは聞き捨てならないな舍弟」

明久の頭を手で圧迫された

明久「痛い痛い!!景色がかすむ!!」

百代「鞄を持たせないだけ優しい姉貴分だらう」

俺たちに合流した事で、一子も普通に歩く事になつた。  
……イヤをひきずりながら。

岳人「歩く時ぐらにはトレーニングはよそづぜ」

一子「アタシはいついかなる時も鍛える事を忘れないのサ。

それにこうして鍛えておけば、強くなるだけではなく、  
体もお姉様みたいにバienneとなるわけよ」

八雲「スタイルでも並ぼうと？」

一子「うんー何をおいても、お姉様はアタシの目標」

百代「頑張れー妹。私のバストは90あるぞ！」

明・岳「ー?」「

一子「とりあえず牛乳を飲むんだ」

八雲「それでも無理だろ」

一子「なに喧嘩売つてるのハ雲？勝負する?」

俺はモモ姉とワン子の体を見る。

八雲「やつぱりワン子には無理だろ」

一子「何イ馬鹿にしないでよねー！」

いつか巨乳になつて。“おいおいお前の体は果物屋か?  
メロンが2つもあるぜ”とか言われてやるわー！」

明久「あはははは

八雲「ナイスギヤグ。合格！」

岳人「おお、ハ雲にも受けたぞ。はははは

一子「バカども笑うなーっ！真剣なのがーっ！」

八雲「いや、今のは笑うな。ははははは

一子「な、なによ。笑うなよお……」

泣きが入ってきた。

百代「よじよし、なでなで

一子「えへへへ」

復活した。

一子「お前ら調子乗つてんからブチのめすわーもちろん物理的にね  
！」

八雲「黙れタイヤ

一子「た、タイヤ？」

明久「確かにタイヤ引きずつてんからね

一子「あはは、そのネーミングセンス小学生？  
そんなんアタシを挑発しようかバカ？」

八雲「やーいタイヤ

一子「うるさいなっ！！！」

明久「タイヤー」

一子「た、タイヤじゃないわよ……」

岳人「タイヤー。タイヤー」

一子「……タイヤって言つたなよ……やめろよー」

泣きが入ってきた。

百代「お前ら妹あまりいじめると私が相手するぞ」

八雲「いいだろ?」

明久「受けて立つ。ガクトが」

岳人「なんで俺様に回つてくる?」

八雲「ごめんなー、ワン子。機嫌直せ」

一子「頭の中はアンタを殴る事でいつぱいよー」

八雲「じゃあまずはガクトを殴れ」

岳人「八雲てめつ」

一子「妹キック!」ベシツ

百代「姉パンチ!」ドカッ

岳人「いてええええ！！！」

明久「モテるじゃんガクト」

騒がしいがいつもの風景なので皆気にしない。

そして俺たちは学園に向かっていった

## ワン子登場！（後書き）

ワン子登場です。

そしてやつと次回クラス分けです。

さて皆どのクラスに配属されるのかお楽しみに。

そして今、募集中のマジ恋メンバーで出ているキャラは

マジ恋からは

マルギッテ、梅子先生、あずみ、

小雪、辰子、伊予、卓也<sup>モロ</sup> の7人

マジ恋Sからは

燕、弁慶、ステイシーと李 静初のメイド2人、

天神館の石田 三郎、大友 煙、尼子 晴

の7人

計14人が案として出ています。

それで今、現在で出そうと思っているキャラが  
風間ファミリーではすみませんが風間とモロの2人は出ません。

なのでファミリー名も変わります。

キヤップとモロ好きの方はすみません。

また、マコっちも考え中です。

風間ファミリー以外では

九鬼英雄とあずみ、ハゲ（準）、冬馬、小雪、マルさんは出さうと

思っています。

以上のキャラ以外に出して欲しいといつキャラがいたら教えてください。

全てのキャラを出せるわけではありませんが出来るだけ出そうと考えています。

俺達のクラスは！？

西村「お前ら、遅刻ギリギリだぞ」

明久「あ、鉄じ　　じゃなくて、西村先生。おはようございます」

八雲「鉄人　違つた、鉄村先生。おはようございます」

百代「鉄人おはようござります」

岳人「鉄人才オツス！」

一子「西村先生おはようござります」

西村「川神妹おはよう。吉井は今、鉄人つて言わなかつたか？」

明久「ははっ。氣のせいですよ」

西村「ん、そうか？あと真田、俺の名前は鉄村じゃない、西村だ」

八雲「すみません噛みました」

西村「わざとだな。それに川神姉、島津お前らは完全に鉄人つて言つたよな。

そして島津！教師に向かつてなんだその挨拶は！」

ゴン！　　鉄村先生がガクトの頭を殴りつける

岳人「いてええええ！！！」

西村「以後気をつけよう。まあバカな話はそのくらいまでにして受け取れ」

明久「あ、クラス分けの紙ですか。ビーもです」

一子「アタシ思つたんですけど、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を

発表しているんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえぱいいと思つんですけど」

明久「あ、それは僕も思った」

西村「普通はそうするだけだ。まあ、ウチは世界的にも注目されている

最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環つてワケだ」

明久「ふーん。そういうもんですかね」

西村「今回の事は他の先生方から聞かせてもらつた。吉井」

明久「はい」

西村「俺個人の考え方としては、お前の行動を褒めてやりたい。出来ればもう一度チャンスを与えてやりたい。だがルールはルールだ」

明久「はい。大丈夫です、後悔してませんから」

西村「そうか…、ならいい」

明久は微塵も後悔していない。真っ直ぐな視線で鉄村先生にそう云えた。さすが明久だな。

西村「だが、問題はお前だ真田！」

ハ雲「ええつ！？」

突然、鉄村先生に呼ばれて我に帰る。俺が何をしたと？

西村「いくら大事な幼馴染みがバカにされたからといって、教師を殴り飛ばすとは何事か！！」

明久・一子「ええつ！？ハ雲そんな事したの！？」

ハ雲「何言つてるんですか！寧ろ1発で済ませた事を褒めてもらいたい位です！」

本当だつたら病院送りにしてやりたい位ですよ！？」

西村「その1発で殴られた先生は病院送りになつたのだが？」

ハ雲「あれえ？」

あの時、頭に血が上つてたから手加減できなかつたかな……スッキリした事は黙つておこう

明久「ハ雲だめだよ。怪我なんかさせちや…」

西村「吉井の言つ通りだ。解つたら少しば反省して」

百代「そうだぞ。そういう時は間接を外す位にしどけ」

八雲「そうだな。今度からはそういうの」

明久「そういう意味じゃないとと思うけど」

西村「とにかく、眞田には今後、厳重な監視が必要だと先日の職員会議で決定した！」

そう言いながら鉄先生は懐からさつきとは別の封筒を取り出し、俺に差し出してきた。

西村「受け取れ、これがお前に対する罰だ」

八雲「何ですかコレ？」

西村「見れば分かる」

封筒を上から破つて、中の紙を開いた。

明久「ちょ…、八雲…！？」

一子「こ、これって…」

後ろから覗き込んでる明久達が動搖してるみたいだが、俺は意外とすんなり受け入れる事が出来た。まあ予想はしてたし、当然といえば当然だしな。

上記の者を文月学園指定《観察処分者》として認定する

西村「そして川神姉妹に島津、今だから言うがな」

一子「はい、なんですか」

百代・岳人「なんだ」

3人は封筒を開けようとしている

西村「俺はお前らを去年一年見て、  
『もしかすると、お前らはバカなんじやないか?』なんて疑  
いを抱いていたんだ」

岳人「それは大いなる間違いだな。ワン子ならともかく俺様までそ  
んな誤解をしているようじゃ、

更に『節穴』なんて渾名をつけ　　られちまうぞ?」

一子「そうですよ。アタシはガクトほどバカじやないよ

西村「ツツコミたといところは山ほどあるが」

激しく同意する

西村「振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

一子「そう言つてもうえると嬉しいわ」

百代「私もだ」

岳人「当たり前だぜ」

そこで3人がビッと軽い音を立てて封を切る。中を覗くと、そこには一枚の紙が入っていた。

西村「喜べ3人とも。お前らへの疑いはなくなつた」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『Fクラス』

百・一・岳「え…………」

西村「お前らはバカだ」

じつして俺たちは最低クラス生活の幕を開けた。

**俺達のクラスはー！？（後書き）**

予想できていたと思いますがやはり皆Fクラスです。

次回はバカテスメンバー登場です

これがFクラス！！

明久「…………何だろう、このバカでかい教室は。」

八雲「教室をこんなに大きくする必要ないよな…………。」

一子「格差社会が目の前にあるわ…………。」

俺たち5人が去年ほとんど行つたことのない3階に行きました。目には普通の5倍はあるうかというAクラスの教室だつた。

5人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性学年主任の高橋洋子が立つっていた。

一子「あ、高橋先生だ。」

八雲「やっぱりあの人気が担任なんなんだな」

一方、明久とはAクラスの設備に目を向けていた。

明久「ねえ、あれ！冷蔵庫とエアコンが個人であるよ！」

岳人「ていうか何だあの大型ディスプレイは！？それに天井ガラス張りだぜ！」

そのあまりの設備に俺たちは度肝を抜いていた。

高橋「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に

来てきてください。」

霧島「…………はい。」

名前を呼ばれ立つたのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女ー 霧島翔子だつた。

ハ雲「さすが霧島さんだな」

霧島さんは1年の頃から成績だ学年トップなのである

百代「それじゃあ私達も行くか」

百代の声に俺たちは頷き、Fクラスの教室に歩き出した。

岳人「なあ、俺様たちはいつのまに山奥にきたんだ?。」

ハ雲「ガクト。現実逃避したくなる気持ちは分かるが現実をみる」

今彼等が田にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山奥の山小屋のような教室だつた。

一子「これは…………Aクラスとは真逆の意味です」といわね

百代「これが勉強する環境か」

そのあまりのひどさに5人は絶句していた。

明久「と、とりあえず中に入る。きっと外よりはマシだよ

いつまでも突つ立つはまざいと思つたのか明久が切り出した。

一子「そ、そういうね。外見だけだよね。中は少なくともちやんと  
してゐよな。」

八雲「そうだな。さう願おひ」

一子「それじゃあ私が先陣をひかせてもらひや。さひひひひ

やつひつひと一子は教室の戸を開け、

一子「すこません。ちよつと遅れました」

雄二「遅いぞウジ虫野郎!」

入つて初めてかけられた言葉は凄まじい罵声だった。

一子「私ウジ虫なの……」

雄二「『えー? 一子か! ? いや、すまん! 。明久だと思つて勘違い  
して』

その壇にシンシンと立つた短髪の少年で先ほどの罵声を浴び

せた少年

坂本雄二はその方に目を向けた。

百代「ふーん。私の可愛い妹をウジ虫呼ばわりするとは、覚悟は出  
来てゐんだらうな」

百代はにこりと笑みを浮かべている。田は一切笑っていないが。  
ちなみに一子は突如の罵声にうなだれ、俺がよしよしとなぐさめている。

雄二「ち、ちょっと待ってくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!  
だから・・・・・・・あ、明久!。助けてくれ!。」

百代の尋常ではない殺氣にたまらず雄二は明久に助けを求める。

明久「…………雄二。君の事は忘れないよ」

雄二「な!?後生だ明久助けてくれ」

明久「しうがないな。モモ姉、そこでストップだよ

百代「なに?」

百代はいぐらか殺氣を収め振り返る。

明久「後で雄二がモモ姉とワン子に飯おじるから許して欲しつて

一子「飯!?アタシ肉がいいわ!」

一子が『飯』といつ単語に反応しそうに応答する

明久「だつて雄二

雄二「わ、わかつた。肉おじるからその振り上げた手を下ろしてくれ!」

百代「ちつ、ショウがない。約束は守れよ」

雄二「ああ、わかつた」

八雲「とんだ災難だつたな」

雄二「本当だ」

岳人「まあドンマイだな。ワン子の食べる量は尋常じやねえぞ」

雄二「ま、マジか?」

八雲「マジ」

福原「すいません、ちょっと通してもらえますか?。」

背後から声をかけられた。

そこには寝癖付きの髪にワレワレのシャツを着たおじさんが立っていた。

福原「席についてもらえますか?。HR始めますので。」

明久「はい分かりました。」

俺たちは人はそれ好きな席に向かう。

福原「えへ、担任の福村慎です、よろしくお願ひします。」

教壇に立つた福村先生は自己紹介をし、

黒板に名前を書こうしたがその手を止めた。理由はチヨークがない

からである。

福原「皆さんに卓袱台と座布団は支給されますか？不備があつたら申し出て下さい。」

明久「これで不備がないって言つ人に会つてみたいよ

ハ雲「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、

自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします。」

スクツ

秀吉「木下秀吉じや。演劇部に所属しております。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。だけど秀吉は男なんだがな……次はその前の少年が立つた。

康太「…………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年ー土屋康太だ。  
彼はムツソリーーというあだ名を持っているが本名よりも

そっちの方が知名度が高い。秀吉とマッシュリーとは去年からの付き合いだ

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。

あ、でも、英語も苦手です。趣味は」

ポニー・テールで勝ち気な印象を伝える少女—島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です。」

島田が明久に向かつて手を振っている。おい島田、明久が震えているぞ

岳人「島津岳人だ。力なら誰にも負けねえ。これからよろしくな」

百代「川神百代だ。よろしく」

一子「川神一子よ。お姉様共々よろしく頼むわ」

と淡々と階が自己紹介をしていく。次は俺の番だと

八雲「真田八雲だ。これから一年間よろしく頼む」

忠勝「源忠勝だ」

おつげんさんだ。相変わらずゲンさんはカッコいいな。ゲンさんは俺の後ろの席に座っている。

今度は明久に回ってきた。

明久「——コホン。えーと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んで  
くださいね」

次の瞬間、

F「——ダアア——リイ——ン——。」「

野太い男の大合唱。

明久「…………失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお願いします。」

明久は吐きそうな顔で座る。

八雲「お前バカだろ」

明久「ごめん。まさかあんな反応するとは思わなかつたんだよ」

そこへ

?「あの、遅れて、すいま、せん。」

F「——え?。」「

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

福原「ちょうど好かつたです。今自己紹介をしているところなので、  
姫路さんもお願いします」

姫路「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F「はいっ、質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員（俺と明久を除く）がそう思っていた事だった。

彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、

最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういうえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F 「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

瑞希の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。

それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F 「俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて」

F 「黙れ1人っ子」

F 「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F 「今年一番の大嘘をありがと」

その様子を見て、俺は一言。

八雲「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、では、今年一年よろしくお願ひしますー。」

姫路は逃げるよつこに、雄二の近くの空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突つ伏してしま

う。

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か？」

姫路「えーっと…、あなたは…」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しくお願ひします。」

深々頭を下げる姫路さん。「」——ホールからでも彼女の育ちの良さが伺えるというものだ。

ウチのヤツラに学ばせたいな

雄二「ところで姫路。体調の方はもう良いのか?」

明久「あ、それはぼくも気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君!？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

明久「え?」

姫路「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

「俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄一のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言つた様な表情に。

明久「え？ それって？」

姫路「そっ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

雄一「確か、久保……利光だったか？」

八雲「やつぱりか」

久保利光 性別（／オス） 現在Aクラス所属

雄一「おい明久、さめざめと泣くな」

八雲「よりもよつて男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通にいふると思つぞ？」

雄一「……まあ、確かにな」

パンパン！

福原「はいはい。その人たち、静かに」

バキイツ！ パラパラパラ……

福原「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。

だが、壊してしまった事は事実の為、少々氣まずそうな態度に。

福原「え～。代えを持てきますので、畠さんは自習をしていく  
ださいね」

ハ雲「どんだけ酷い設備なんだよ！？」

福原「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何度もかの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

雄二「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

ハ雲「何だ、明久が気になるのか？」

姫路「え？ いつ、いえ、そういうわけでは……」

ハ雲「ふーん、じゃあそつこいつ」と口くわく

俺は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。

秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじゃ、またお主ら三人で悪だくみかの？」

八雲「さあな、どうだうつた。でも面白い事になりそうだ」

秀吉「やれやれ……まあお主らしきの」

たがいに笑いあつて、俺は一人氣取られない様廊下へ。  
そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

雄二「つまり、姫路の為だろ？」

明久「そつそつこいつ訳じやないけど……でも、姫路さんは酷い環境だから、

改善してあげたいって気持ちはある」

雄二「素直じやねえな。まあどうせ、試合戦争はやるつもりだった。  
世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

それを聞いて、俺は口を閉じて、思つき戸を開けた。

八雲「何だ？俺を差し置いて、随分と面白やつな話をしているじゃないか」

明久「八雲！」

八雲「俺にも一枚がませろよ。そんな面白やつな話、俺が乗らない

訳ないだろ?」

明久はそれを聞いて感激し、雄一も不敵な笑みを浮かべた。

雄一「全く、お前も物好きだな……つと、先生が来た。入るぞ」

八雲「それじゃ Fクラス代表のお手並み、拝見と行こうか?」

雄一「ああ、任せておけ」

俺と明久は、雄一に向けてグッと親指を立てた。

雄一もそれに倣い、同様に親指を立てる。

八雲「それより明久、試合戦争を提案したからにはお前も頑張れよ?  
?」

明久「うつ……」

八雲「ちゃんと勉強位教えてやるよ」

雄一「改めて言うが、お前も物好きだな。明久に勉強を教えるなんて」

八雲「まあ俺の周りは馬鹿が多いからな。コレくらいなんともない」

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

再び再開された自己紹介。あいつは確か FFF 団のリーダーか?

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。

福原「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下せー」

雄一「了解」

答えて雄一は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。その雰囲気に、Fクラス中の視線が集まる。

雄一「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

そこで、あいつは少し……間を空けた。どうやら始まるか…

雄一「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

雄一「カビ臭く、すき間風が通る教室。古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。」

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。」

そして再びみんなを見てから口を開いた。

雄一「そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

雄一「不満はないか?」

F『『『『大アリじゃあつ……』』』

不満大爆発だ。

雄一「どう? 僕だって不満だ。このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている」

雄一は領きながら同意する。すると、あがりながら不満の声があがり始めた。

F『いくつも学費が安いからって、この設備はあまりだ! 改善を要求するー。』

F『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ! あまりにも差が大きすぎるー。』

F『そうだそうだ!』

引き継ぐように坂本は口を開いた。

雄一「みんなの意見はもつともだ。それで、これは俺の代表としての提案なんだが」

雄一は一呼吸おくと

雄一「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」

雄一は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふつと笑い

八雲「面白くなりそうだ」

と呟いた

## これがFクラス！！（後書き）

今回は少し長くなりましたがFクラスのメンバーと戦争の引き金を引きました。

今、出ているマジ恋メンバーは  
百代、一子、ガクト、ゲンさんの4人です。

ちなみに皆さんにお聞きしたいのですが  
明久のCPから外れる姫路と島田ですが  
この2人にCPの相手が必要と思いますか？  
一応、皆さんにきいておこうと思いましてこいつ書いてみました。

## 戦争の引き金を引くもの！

『勝てるわけ無いだろ？』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんかいれば何もいらない』

『川神さんと結婚したい』

『俺も！』

戦力の差から既に諦め悲鳴を上げる人や関係ないことを話す人が出始めた

百代「さつを告白したヤツはちょっと来い！」

『すいませんでしたあああ』

全く困った奴等だ。すると雄一がみんなの言葉を制した

雄一「確かにみんなの言つことはよくわかる。

だから、俺たちがAクラスに勝てるといつ根拠となる要素を示そつと思つ」

F『要素？』

雄一「まずは……おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

康太「…………（ブンブン）！…」

姫路「へつ？ひやあああ」

雄一に呼ばれたムツヅリーは必死に顔と手を横に振つて否定して

いる

雄一「土屋康太。」<sup>ムツツリー</sup>「いつがかの有名な、寡黙なる性識者だ」

康太「…………（ブンブン）」

ムツツリーは全力で首を振る

F『ムツツリー……だ……と?』

F『ヤツがそつだといふのか?バカな……』

F『だが見る。未だに隠そつとしているぞ……』

F『ああ……まったくだ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

さすがムツツリー……本当にお前は本当に凄いな

雄一「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

姫路「ふえつ！ わ、私がですか？」

そうだな、姫路はAクラスに匹敵するしな！

雄一「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

F『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

F『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

F『『まつたくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらないな』

さつきから誰だらう。姫路さんに積極的にラブコールを送る人は

雄一「木下秀吉だつている」

秀吉「む？ ワシか？」

F『『おお……！』』

F『『確かアイツ、木下優子の……』』

F『『秀吉大好きだあああ』』

秀吉「ワシは男じやーー！」

ドンマイ秀吉

雄一「そして川神姉妹もいる」

一子「え？」

百代「ん？」

雄一「川神百代は皆も聞いたことがあるだらう。うちの学園の『文月四天王』の1人だ」

F「なに！？『文月四天王』だと！？」

F「確かにそれってうちの学園で武力で最強の4人に称される名だろ  
う」

F「そんな人がFクラスに」

雄一「そうだ。それが今は俺たちの味方だ。

そしてその妹の一子も姉ほどじゃないが強い」

一子「照れるなあ」

百代「まあ面白いつねうだな」

雄一「そして真田八雲もいる」

八雲「ん?俺か?」

雄一「そうだお前だ。こいつもAクラス並の実力がある

F「すげえAクラス並も成績が2人もいるのかよ」

雄一「当然、この俺も全力をつくす」

F『確かに何かやつてくれそうな雰囲気があるよな』

F『そりゃあ坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてた  
らしいな』

F『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

そういうえば雄一も頭良かつたんだよな。今は知らないが

雄二「そして吉井明久だつている!」

シーンとクラスが静まり返つた…つて

明久「ちよつ? ! 雄二つ…どうして僕の名前がそこまでてくるのさ…

せんせんそんな必要なかつたよね? !

F『……誰だ? 吉井明久つて』

F『いや、知らん』

明久「ほらせつかく、もり上がつていたの」、「なんでテンショントげるようなことするのさ…」

すると雄二は任せとおけと並んで机を見た後

雄二「なんだ、みんな知らないのか? 知らないなら教えてやる」、「つは《観察処分者》だ」

あつ雄二。余計なことを

F『まじかよ! 初めて見たぞ』

F『それって、学園最低のバカの称号じゃなかつたっけ?』

明久「ちがうよつーちよつとおちやめな十六歳につけられる愛称だよ…

あとそれ以上言つと色々危ないよ

雄一「確かに問題を起こした奴に『えられる称号』だが  
そのかわり物に触れたりすることはできる」

え? 珍しく雄一がフォローを入れた。何だあの雄一なんか怖いな

F『おおそれは確かに凄い!』

雄一「だが、教師立ち会いやしか召喚できないし、  
フィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が受けてしまつのか」

するとみんなは再び話し始めて

F『で、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しい  
つてことか』

F『おいおい、それじゃあ、あまり召喚できないヤツがいるつてこ  
とじゃないか』

F『《観察処分者》なんて使えないじゃないか!』

お前らそんな事言つてると後でどうなるかしらないぞ

雄一「そうだ。結局はFクラスの観察処分者は使えない役立たずだ。  
居ても居なくてもあまりかわらないヤツだ」

明久「……雄一」

雄一「なんだ明久」

明久「僕は雄一や眞田のことを見れないよ」

雄一「は？お前は何を言つて？」

百代「お前ら覚悟はできるんだろうな？」

そこで武神が腕組して立つていた

ハ雲「言つてなかつたが俺と百代は観察処分者だからな。  
だから明久に言つていた言葉がそのまま百代に当てはまる事  
になるからな」

俺は教師を殴つてなつたが、

百代は授業態度が悪かつたりしたので理事長の鉄心のじいさんが観  
察処分者にさせたのだ。

雄一「な、なんだと！？」

明久「だから言つたのに」

雄一「明久助けてくれ！」

F『吉井、眞田助けてくれえ！』

明久「姉さん」

百代「なんだ？」

明久「死なない程度にしてあげてね」

百代「もちろんだ」

止『那也是一個一個的在那裏——』

百代の成敗からじばらくたつて

八雲「観察処分者は物に触れる」ことがでかると話つい」とは  
雑用を多くする」とになるがその分コントロールが上手くな  
るんだ」

ここで一応フォローを入れておく

「『おおー、召喚獣対決ではほほ最強じやん！』」

F 「確かに俺たちの戦力になってくれるな！」

再びクラスはテンションが上がつていった

雄一「まずは小手調べにEクラスを攻め落とす」

雄一はそう言つと少し間をおいてから話し始めた

雄一「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろ?」

F『当たり前だ！！』

雄一「なにがパンを孰れ！ 出陣の支度を始めるだー。」

F『おおーーーーーー』

姫路「お、おー……」

姫路が雰囲氣におされて少しひく腕を上げてこる。  
みんなやる氣で満ち溢れてこむ

## 戦争の元気金を引くものー（後書き）

ここからは少しオリジナルを加えながらの話になります。

まずはEクラス戦ですが、

次話はオリキャラや学園についての紹介をしたいと思います

これからも応援よろしくお願いします。

また、まだマジ恋キャラ募集中なので出して欲しいキャラがいたら  
どんどん教えてくださいね

## 文月学園 設定1

### 文月学園

私立校だが、それぞれの個性を重んじるための自由な校則とユニークな行事・授業が特徴的で市内を代表する学校。2年生からは成績に応じてクラスをA～Fの6つに分けられる。また、この学園には生徒の自主性、競争意識を尊重するため、そして高めるために決闘や試召戦争というユニークなシステムがあり、

お互いの合意があれば、白黒つけて戦う事を許可している。

#### 【 校訓 】

切磋琢磨

#### 【 教育目的 】

頭だけでなく体も鍛え強い心を鍛える

これから社会で生き抜き、勝ち抜くための術を教える

### 召喚戦争のルールと各科目について

#### → 召喚戦争のルール ←

- 原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。

なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

2年学年主任：高橋洋子

西村 宗一に関しては全教科、総合科目での勝負の立会いを可能とする

- 2、召喚獣は各人1体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。
- 3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。
- 4、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度も回復可能である。
- 5、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は
- 戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。
- 6、召喚可能範囲は、担当教師の半径10m程度（個人差あり）。
- 7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。
- 召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。ただし決闘の場合はこれには当てはまらない。
- 8、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は

不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるところを常に意識する」と。

# 試験科目について

科目

- 現代国語
  - 古典
  - 日本史
  - 世界史
  - 数学
  - 化学
  - 物理
  - 保健体育
  - 英語
  - 現代社会

以上、計10科目に設定しています。

総合科目は上記の全ての点数の和とし、召喚獣の腕輪は各教科400点以上の時に装備される。総合科目では4000点の時装備される。

## 各クラスの総合科目の点数

- |         |         |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| ・       | ・       | ・       | ・       | ・       | ・       |
| Aクラス    | Bクラス    | Cクラス    | Dクラス    | Eクラス    | Fクラス    |
| 2200点以上 | 1900点以上 | 1600点以上 | 1300点以上 | 1000点以上 | 1000点以下 |
|         |         |         |         |         |         |

こんな感じに考えてます。

ただし、A～Eクラスは定員50名となつてるのでEクラス並の点数でもFクラスになる可能性がある

## （宣戦布告）

相手に宣戦布告する際は、各クラス毎に置かれているワッペンがあるので、  
戦争の意志を伝え、クラスのワッペンを置く事。  
そしてようやく戦争を行うことができる。  
その後は教師に戦争を行うことを伝える事

## （決闘システム）

お互い合意があれば、白黒つけて戦う事が許可されている。  
(互いのワッペンを重ねる事で)

形式は、勉学でもスポーツ、喧嘩でもなんでも良い。  
決闘中の怪我は合法である。

もちろんいくつかの規則がある。

- 1、肉体を使用する決闘の場合は決闘法を明記し教師に届け  
職員会での承認が必要。
- 2、決闘に立会人が必要な場合は、教師がそれを担当し  
公平な立場でジャッジをする
- 3、肉体を使用する決闘の場合は必ず2人以上の教師が必要
- 4、決闘はなるべく召喚獣を用いて行うこと。

ただしそれが絶対ではないが教師の許可が必要

## 文月学園 設定1（後書き）

今回はこの物語の設定についてです。

質問や、意見がありましたら教えてください。

## オリキャラ紹介1

真田

さなだ  
八雲

・身長 176cm

・誕生日 7月29日

・一人称 僕

・あだ名 八雲

・武器 槍と拳

・好きな食べ物 魚料理や肉、お菓子

・趣味 ゲームや漫画（軽いオタク）

・特技 色々と器用にこなせる  
　　バイトをして見聞を広げる事

・見た目は戦国バサラの真田幸村で髪の色が黒である。

・真田幸村の子孫で槍を使う事が得意である。

・両親は武道家で道場を開いていて凄腕の持ち主である。本人も両親の血を引いているので腕のほうはピカ一である。

・両親は現在は海外のほうで指導していて、道場の門下生が暮らしている寮で生活している。

実家に自室があるがなんとなくこちらに住んでいる。

寮自体はまだ新しいので門下生は誰も住んでいない。

・友達や仲間が侮辱させる事が嫌い

・八雲の武道の腕前は物凄く高く川神百代に匹敵するほどの腕前。

- ・主に槍を使うが拳でも充分に戦える事ができる。
- ・成績もAクラス並あり文武両道である。
- ・常に仕込み槍を所持している（暴れた百代を抑えるため）
- ・明久と同じ観察処分者である
- ・時々まじめだが時々フリー・ダムな男

- ・バイトを数箇所掛け持ち中

< 召喚獣 >

- ・武器と防具は戦国無双3の真田幸村の装備
- ・腕輪の能力は『風林火山』

『風』・・・風を操ることができる。

風を纏う事でスピードを上げることが可能  
『林』・・・1分間だけ召喚獣の姿を消す事ができる。  
ただし攻撃しようとすると姿を現してしまう

『火』・・・炎を操る事ができる

炎を纏う事で攻撃力が増す  
『山』・・・大地を操る事ができる

土を纏う事で防御力を増す事が可能

< 成績 >

平均

・ 現代国語	300点
・ 古典	100点
・ 日本史	700点
・ 世界史	400点
・ 現代社会	200点
・ 数学	600点
・ 物理	500点
・ 化学	300点
・ 英語	100点
・ 保健体育	300点
・ 総合科目	3500点

今後伸びる可能性あり

## オリキャラ紹介1（後書き）

オリキャラの紹介でした。

## 戦争前の話し合い

雄二「明久、お前にはEクラスへの宣戦布告の使者をやつしてもいい。  
大役だ、任せるぞ」

明久「下位勢力の使者って、たいがいヒドい目にあつよね？」

雄二「大丈夫だ。たかが学生の戦争じつで本当に危害を加えるわけはない」

明久「ほんとうに？」

雄二「もちろんだ。俺は友人をだますような真似はしない」

明久「けど……」

八雲「だつたらワン子を護衛につけていけ。それなら安心だわ」

一子「え？ アタシ？」

一子「アタシ行くわ！」

エサをやると簡単につれた

明久「ワン子。いいの？」

一子「勿論よ！ 早く行くわよアキ」

「…………」  
明久とワン子は明久を引っ張り教室から連れ出した。

しばらくして明久とワン子は無傷で帰ってきた。

ワン子の人付き合いの良さのおかげで無事だったらしい

雄二「…………ちッ（無事だったか）」

明久「ねえ、今舌打ちしなかつた？」

雄二「さて、今からミーティングを行つぞ」

明久「あれ、今スルーされた？」

ハ雲「じゃあ行こうぜ。明久もブツブツ言つてないで行くぞ」

一子「早く行きましょ！」

康太「…………了解」

明久「ムツリーーーもう畳の後なら消えてるよ」

康太「…………！（ブンブン）」

八雲「いや、今さら否定されても」

康太「……………！」（ブンブン）

八雲「大丈夫だ。ムツリー二がHなのはよく知っているから」

康太「……………！」（ブンブン）

明久「……ちなみに何色だった？」

康太「みずいろ」  
・・・・・即答かよ

明久「さすがムツツリー二だね」

雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

そして、屋上にて。

雄二「で、明久。時間は伝えたのか？」

明久「うん、今日の午後からつて伝えといた。だから先にお昼ご飯  
だね？」

雄二「今日も弁当か明久」

明久「うんそりだよ。はい、モモ姉、ワン子、八雲」

八雲「いつも悪いな」

俺たちは明久から弁当をつける

一子「わーいお弁当だ！ いただきますー！」

パクパクパクパク

八雲「おい落ちついて食べろよワン子」

一子「だつておいしくてつい」

姫路「あれ、川神さんが食べてるお弁当ついて？」

一子「アキが作ってくれるのよ」

百代「弟の弁当は美味しいからな」

島田「え？ 吉井が弁当作ったの？」

明久「そうだよ」

姫路「う、嘘です。吉井君が料理できるなんて信じられません」

島田「そうよ。本当は誰が作ったのよー！」

雄二「いや、その弁当は本当に明久が作ったんだぞ」

秀吉「明久の料理は美味しいからの」

康太「…………また食べたい」

岳人「そうだぜ。明久の数少ない利点だからな」

八雲「え？ ガクトお前利点つて言葉知ってるのか？」

ガクト「おい、それはどういう意味だ！」

雄二「さて話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

ガクトの言葉を無視して話を進める

秀吉「Eクラス相手じゃな。どんな風に戦うのじゃ？」

雄二「いやEクラス相手には作戦という作戦はない。ガチで戦う」

秀吉「Eクラス相手に作戦なしじゃと？」

雄二「そうだ。色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。

明久見てみる。「ここにいるメンバーを」

雄二「が明久に集まつたメンバーを見ると言い、明久は全員の顔を見回し言うと、

明久「えーと、美少女が3人、バカが2人にムツツリが1人と天才が1人

筋肉が1人に犬が1匹いるね」

雄二「誰が美少女だと！？」

明久「どうして、雄二が美少女に反応するの！？」

康太「…………（ポツ）」

明久「ムツツリーーまでー？　どうじょりー？　僕だけじゃ ツツコミ  
切れないよー！？」

美少女に雄一と康太が反応して明久は声を上げる。

ガクト「俺様が筋肉だな」

一子「誰が犬よー！」

八雲「おっ、わかったか」

一子「わかるわよー！」

秀吉「まあまあ皆落ち着くのじや」

秀吉が明久たちを落ち着かせると

雄一「ま、要するにだ」

コホンと咳払いして雄一が説明を再開する。

雄一「姫路や八雲に問題のない今、正面からやりあつてもEクラス  
には勝てる。」

今回の目的は八雲と明久、姫路の点数確保が目的だ

一子「どうこいつ」と？

雄一「この3人は振り分け試験を途中退席したから今の点数は0点になっているからな

秀吉「それを回復試験で点数を回復するわけじゃな」

雄一「そうだ。初陣だからな。派手にやつて今後の景氣づけにしたいだろ?」

姫路「あ、あの~」

雄一「ん? デリした姫路」

姫路「えっと、その。・・・・・吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか?」

雄一「ああ、それか。それはついたさ、姫路の為について明久に相談されて~」

明久「それはそうと!」

明久「タイミングが悪いぞ。少し聞こえたんじゃないかな?」

明久「さつきの話、Eクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

雄一「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄一

雄一「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる・・・・・いいか、お前ら。

ウチのクラスは 最強だ

島田「良いわね。面白やつじやないー。」

秀吉「やつじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「……………（グッ）」

姫路「が、頑張ります」

百代「まあ面白やつだしな」

ガクト「俺様がやつけてやるぜ」

一子「アタシも頑張るわ」

八雲「じゃあいっちょ頑張りますか」

雄二「そつか。それじゃ、一度教室に戻るぞ」

## 戦争前の話しあい（後書き）

次回はEクラス戦です。

どのよつこ戦うのかお楽しみに

皆さんの感想・ご意見お待ちしております

これからも応援よろしくお願いします

## Eクラス戦

雄一「戦争の前に軽く作戦を伝える。Eクラス戦には数学の長谷川先生を使つ。

丁度5時現目でEクラスに向ひるのでそこで確保する」

島田「数学つて事はウチの出番ね」

島田さんはドイツからの帰国子女なのでまだ日本語が得意ではないらしい。

数学は数字なので文章題を除けばかなりの点数だったはず

雄一「そうだ。その島田の数学を主力にして戦つ」

島田「姫路さん数学は？」

姫路「苦手ではないんですけど・・・」

島田「なら姫路さんも一緒に戦えるね」

雄一「いや、それは無理だ」

一子「どうして？」

八雲「姫路は俺と明久と同じで試験を途中退出したから0点扱いだからな」

雄一「でも試験が開戦したら回復試験を受ける事ができる。それを受ければ途中からでも参戦できる。」

だからハ雲と明久、姫路は戦争が開始されたらすぐに回復試験を

受けるんだ。先に言つておくが姫路は今回の戦争では出でないからな

秀吉「それはどうしてじゃ？」

雄一「まだ姫路を隠しておきたいからな。今後の戦いに必要だからな」

雄一「で一子とガクト、秀吉は島田と一緒に前線に向かってくれ。ムツツリーーは今回は情報収集を頼む」

康太「……………わかった」

百代「私はどうすればいい？」

雄一「川神姉については自由だな」

明久「自由にしていいの？」

雄一「まあ今回はいいだろう。今回はストッパーがないしな」

八雲「ストッパーって俺か？」

雄一「まあとりあえず皆頑張ってくれ」

F全員『了解！』

## キンコーンカーンコーン

ガラツ

F 「長谷川先生を確保したぞおー！」

雄一「開戦だあーー総員戦闘開始ー！」

F 全『おおおーーー』

F クラスとEクラスは隣の教室なので廊下に出ればすぐに戦闘が開始される

島田「島田美波、いきます！」

秀吉「木下秀吉、参戦いたす！」

一子「川神一子、勝負するわ！」

ガクト「島津岳人、いくぜえーー！」

長谷川「承認します」

島・秀・一・ガ『試験召喚獣召喚！ー！』サモン

4人の召喚獣が召喚される。

島田の召喚獣は軍服にサーべルという武器

秀吉は袴に薙刀、一子は武道着に薙刀、

ガクトは上はタンクトップで下は普通の長ズボンで武器は籠手のようだ

Fクラス	<	数学	>
島田		158点	
秀吉		76点	
一子		65点	
ガクト		45点	

島田「来るわよ」

Eクラスの生徒がFクラスへ乗り込もうと次々現れる

一子「ここを通りたいならアタシたちを倒す事ね」

三上「三上良子、受けます『試験召喚獣召喚…!』」

Eクラス

数学	>
三上	81点

三上「こいつ」

三上さんの召喚獣がガクトの召喚獣に攻撃する。数点ガクトの点数

が削られる

三上「トドメ！」

三上さんがガクトの召喚獣にトドメをさしつつすると  
そこへ島田さんの召喚獣が割り込み攻撃を防ぐ

島田「それはこっちのセリフよ」

島田「それはこっちのセリフよ」  
島田さんの攻撃により三上さんの召喚獣は0点となつた

三上「そ、そんな」

島田「数学ならEクラスには負けないんだから」

ドシン そこへ

西村「戦死者は補修室に集中!」

島田「あれは!?」

秀吉「鉄人」

西村「召喚戦争のルールに則り戦死者には補修を行つ

三上「た、助けて~、鬼の補修はイヤ~」

Eクラスの三上さんが鉄人によって補修室に連れて行かれた

秀吉「ここを通りたければワシらを倒していくのじゃ」

そこでFクラスとEクラスの戦闘が行われることになった

一方 教室では

俺と明久、姫路が回復試験を受けていた

百代「で雄一。どういう作戦で戦うんだ」

雄一「作戦なんてねえ。力任せのパワーゲームで押し切られたほうの教室に敵が流れ込む。そして代表が倒されたほうの負けだ」

百代「そつか」

雄一「おそれく押し込まれるだらうが、しかしには川神姉がいるからな。

それに押し込まれるまでには時間がかかるだらう。

その時にはハ雲と明久の試験が終わるからな」

百代「なら期待にこたえるよつ頑張るさ」

雄一「頼むぞ」

しまいくして

島田「大変押し切られる…」

その言葉通りEクラスの人たちがFクラスへとなだれ込んだ。

今のところ残っているのは雄一と百代、秀吉、島田、一子、ガクト、ゲンさんの7人だ

まだ、あの3人は回復試験から帰ってきていない

一子「めんなさいお姉様。アタシ達じゃとめられなかつたわ」

百代「別に良じや。ここからは私がやるわ」

一子「え？お姉様が

百代「ああ、暴れなくてウズウズしてたんだ」

雄二「じゃあ川神姉たのむな」

川神「川神百代、いざ参る『試験召喚獣召喚…』」  
かわがみももよ

Fクラス < 数学 >  
百代 55点

中林「な、何よ。勿体つけぢやって。そんな点数では私たちには勝てないわよ」

百代「それはどうかな」

そこで百代の召喚獣が一気に駆け出していく

E「な、なに！？動きが早いぞ」

百代の召喚獣は敵の攻撃をどんどんかわしていく

百代「いくぞ！川神流奥義『無双正拳突きイー・ー』！」

一度の攻撃でEクラスの敵を5人まとめて戦死させる

中林「なによあの動き！？」

雄二「知らないのか？あいつは観察処分者であり文月四天王の一人だぞ。

観察処分者だから召喚獣の操作はピカ一だからあんな反則的な動きができるんだ」

百代「さあじんじゃかって来い！」

一子「さすがお姉様」

ガクト「モモ姉が味方で助かつたぜ」

その間にもモモ姉がドンドン敵を倒していく

雄二「…………そろそろだな」

中林「クツ！なら代表を狙うわよ」

明久「それはさせないよ」

中林「だ、だれ？」

雄二「やつと来たが明久」

明久「吉井明久、いきます。『試験召喚獣召喚！－！』」

Fクラス < 数学 >  
明久 105点

中林「負けないわよ。『試験召喚獣召喚！－！』」

Eクラス < 数学 >  
中林 89点

明久「じゃあいくよ」

明久は中林の攻撃を余裕でかわしていき攻撃を加えていく

中林「Fクラス相手にい」

明久の攻撃により中林の召喚獣は倒れた

中林「そ、そんな」

こうしてこの試験召喚戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた  
この後戦後対談でEクラスと設備を交換し戦争は終わつた

八雲「あら？俺の出番なし！？」

雄二「いや、思つてたより川神姉の動きが良くてな」

百代「たまにはこういう戯いも面白いな」

八雲「え！？え～」

明久「八雲、次回頑張ろうね」

俺はしぶしぶ了解し、明久たちと帰つていった

## Eクラス戦（後書き）

あつやうとEクラスには勝ちました。

さすが百代という感じです。

まだまだマジ恋キャラ募集中です。

ちなみに今、登場決定しているのが  
マジ恋では、

大和、京、クリス、九鬼英雄、あずみ、マルさん  
の9名と  
准<sup>ハゲ</sup>、ユキ、冬馬

マジ恋では

燕さんと、

天神館から、石田三郎、焰、晴の 4名です。

そして皆さんに2つ質問なんですが  
マコつちは参戦させたほうがいいですか？  
今、かなり悩んでいます。

もし出したなら一年として出すかと考えていてます。

そして2つ目の質問なんですが

燕さんの武器の平蜘蛛つてどんな武器だと思いますか？  
腰に巻いてあるホルスターが気になるのですが・・・・・



Eクラス戦を終えた次の日、俺たちはEクラスに勝利したのでEクラスと設備を交換した。

昨日が始業式だったこともあり荷物とかは少なかつたのすぐに交換する事ができた。

なセ交換したかどしことをすかに衛生状態が酷すぎたので。。。

た二で豊か腐二でしたんたぞ！

そして朝のH R

福村「突然ですが今日は転入生をお知らせします」

「男子『女子はいますか?』

Fクラスの男子全員（俺、雄一、明久、秀吉以外）の男子が一斉に先生に質問した

福村「はい、います。転入生は3人いますが  
ですがそのうちの1人は遅れて入ってくるようなので今日は  
2人紹介します」

皆大はしゃぎだ。でも男子もいるんだぞ

福村「では、入ってきてください」

扉を開けて入ってきたのは

大和「直江大和です。今日から2・Fのメンバーになります。

皆さんよろしくお願ひします」

京「……椎名京。よろしく」  
しいなみやこ

福原「席は空いてるところに座つてください」

F『女子だあああああ』

F「やべえマジ可愛いんだけど」

F「俺と付き合つてください」

今、おかしなことが聞こえたが気にしない。今はそれより

八雲「久しぶり2人とも」

明久「大和に命じやないか！？久しぶりだね」

百代「久しぶりだな大和、京」

一子「京久しぶり」

ガクト「おう大和、元気にしてたか」

大和「皆、ただいま」

京「皆、久しぶりだね」

八雲「お前らなんでここに?」

大和と椎名は俺たちと小学校からの友人だ。

とある事情で県外の高校に行つたはずだが何でここに?  
ちなみに2人は付き合っています。

それを皆に伝えたら暴徒と化したが百代が一発殴ると一瞬で収まった  
大和「いや、あっちの学校がつまらなかつたから転校してきたんだ」

京「私もだよ」

明久「そななんだ。それよりこれで僕達のグループは元通りだね」

俺、明久、百代、一子、ガクト、大和、京の7人で小学校の頃から  
ずっと仲良くなってきた

俺たち8人で真田ファミリーと名乗っている。  
一応俺がリーダー（キャップ）という事になつていて

八雲「まあこれからまた楽しくなりそうだな」

大和「そうだな。ところで俺が来たのはこのクラスはFクラスなん  
だよな」

一子「そうだよ」

大和「じゃあなんでEクラスの設備にいるんだ?」

八雲「ああそれはな」

俺はそこでこの文月学園のルールと昨日行われた戦争について話した

大和「そう」「う」とか

八雲「じゃあこのクラスの代表を教えておくな。おーい雄二！」

雄二「どうした八雲？」

八雲「こいつが俺たちの代表だ。そして俺のダチだ」

大和「初めまして先ほども言つたが直江大和だ。よろしく」

雄二「ああ、このクラスの坂本雄一だ。好きに呼んでくれ」

八雲「大和は俺たちファミリーの軍師だ。だから頭がすげえ。今後の試召戦争で必ず役に立つぞ。あそこでワン子と話してる京は弓がかなり上手い」

雄二「そうか。これからよろしくな」

大和「こちらこそよろしくな」

その後は大和と京にこの学校でできた友達を紹介した。

そして昼休み

俺たちが食事を食べ終わると

八雲「よしそろそろ仕掛けるか。仕掛けて仕損じはなし。

おーい皆聞いてくれー！あと1人の転入生だけど性別もわ

からなくて、

謎に包まれているだろ？

どしきせなら男か女か賭けないか？賭け札作つたんだ

須川「お。いいな。真田が胴元になるのか」

八雲「ああ。手数料なんぞとらねえよ。男か女か1つに絞つて賭けるつてことだ。

で、札は1枚千円。配当はどしきも2倍、公平だろ？」

百代「よーし、乗つた！私は男に3枚だ！！」

八雲「おー早速かい。毎度あり。ちなみに上限1万ね  
つてか百代金、大丈夫か？」

百代が自信満々に買つたことで他のメンバーも買い始めた。

須川「情報だと男つて噂がきてたからな」

忠勝「はつ……ぐだらねえが…小遣い稼ぎにやいいか

一子「ちょっと軍師大和、これどしきなのよ正解は？」

大和「知らない。だつて俺今日転入してきたんだぜ。情報がねえよ

明久「あれ、ワン子やらないの？ ださいね。八雲、女に3枚！」

一子「やつてやるわよ！…！… 女に1枚！」

最終的にはFクラスの全員（大和と京、姫路以外）が買っていた。

ちなみにほんとどが男にかけている。

女にかけているのが明久、一子、雄二、秀吉、ムツツリー、ゲンさんのは6名だ。

そして

雄二「明日試召戦争をするから明久。Dクラスに宣戦布告して来い」

明久「嫌だ」

雄二「やつぱり断るか」

明久「当たり前だよ」

八雲「昨日は明久がいつたから今日はガクト言つて来い！」

ガクト「なんで俺様が」

八雲「確かにDクラスの女子は力が強い男が好みだった気が・・・」

ガクト「仕方ない。俺様がいつてきてやろう」

ガクトはそういうとDクラスに向かっていった

明久「ねえ八雲。その話本当?」

八雲「あんなの嘘に決まってるだろ?」

雄二「やつぱりな」

すると

ガクト「だまされたあああーー！」

ガクトがボロボロの状態で戻ってきた

八雲「ガクトお帰り。ちゃんと明日の宣戦布告してきたか」

ガクト「八雲この野郎。嘘だつたじやねえか！」

八雲「え？何が？」

ガクト「Dクラスだと、俺様が超もてるって言つただろうがーー！」

八雲「俺そんなこと言つた？」

京「ガクトの氣のせいじゃない」

大和「まあガクトは名前負けしてるからな

京「それもそうだね」

ガクト「なんだこの2人。戻ってきたと思ったらコレかよ

八雲「それがガクトの運命なんだよ」

大和「だな」

百代「そうだな」

一子「そうね」

京「そうに違いない」

明久「そうだね」

ガクト「なんだこの幼馴染達。本当に容赦ねあーな

秀吉「凄い力オスジヤの」

雄一「面白いから良いんじやないのか」

康太「・・・・・・・・・（口クン）」

ちなみに大和と京は俺の道場の寮に住むことになつたらしい。  
大和たちが住むのは今年新しく建てたほうなので、俺もそこにすんで  
いる。

また。そこはガクトの母麗子さんが平日、食事をつくってくれる。  
詳しく述べてはまだどこかで・・・・・・・・（多分）

新しい仲間（後書き）

大和と京参加です。

## 朝からの挑戦者

次の日、川沿いを歩いていると

大和「こいつも天気が良いとこ」の川辺で昼寝したいな

ハ雲「それ俺も思った。じゃあ昼寝でもするか?たまにはいいだろ  
ら」  
明久「だめだよ。ハ雲、今日はロクラスとの試召戦争があるんだか

ハ雲「なんだ誰もサボリフレンドはいないのか?」

ガクト「今日は試召戦争だからな、俺様の見せ場だしな」

ハ雲「どこかに同志は……誰か、笛もつてきてるか?」

京「当然。ブリーダーには必需品」

大和「俺も持つてる」

ガクト「俺様も。面白いからなこれ」

ハ雲「ワン子呼んでくれ」

明久「じゃあ吹くよ」

ピィ――――――――――

明久が笛を吹くと遠くからワン子が走ってきた

「子、「呼んだつ——!？」『うか、おはよー。』

八雲「ようワン子。おはよう。そして笛を吹くとすぐ来る習慣は偉いぞ、いい味出してる」

「子、「なによ。アンタ達がそういう風にしたんだじょ」

皆で面白がってしつけたのだ。

「子、「ちやんと来たんだから、サ、ね?」

期待したよつな田で見上げられる。

八雲「キャラメルやるよ」

「子、「これじゃ栄養足りないわよ!肉的なものを出しなさいよ」

大和「英語で言つてみてくれ」

「子、「……こんぐりつしゅ?」

「ふ……フリーズ ミート イン マイ マウス フロム モ——ング」

ガクト「お前馬鹿だよなあ。恥ずかしいヤツだ」

「子、「あははは——! ガクトには言われたくないわね——!」

明久「馬鹿っぽいなあ

京「実に馬鹿」

一子「……な、なんだよ……イジメるために呼んだの?」

八雲「とりあえずキャラメル系を食え系で」

俺は一子の口にキャラメルを詰め込んだ。

俺は専ら一子の教育・世話係みたいなものだ。

一子「むぐむぐ系。これはこれで美味しい系」

簡単に機嫌が直った。食べ物を食べさせれば大抵落ち着く。

百代「皆揃っているな。どうした道端で」

ガクト「はて、これもともと何の話だっけか?」

大和「ワン子、馬鹿つて言い返すチャンス到来だぞ」

一子「ぐまぐま」  
キャラメルを咀嚼していた。

八雲「……皆揃つちまつたし登校するか」

明久「うん。サボつて鉄人に目をつけられるのはイヤだしね

八雲「だな」

大和「よし行くぞ」

仲間が7人揃つて、川辺を歩き始める。

傍から見れば仲良し幼馴染軍団だが、普通とはひと味……いや、な  
な味ぐらい違うな

京「ん？ 橋の所に誰かいるよ。こっち見てる」

百代「男か。……武道やつている人間だな」

一子「お姉さまか八雲田~~山~~じゅないかしら？」

明久「また挑戦者……か」

百代「面白い。」の前の不良どもじゅつまらなかつたんだ」

俺を除いた女子が武道集団なのだ。まあ俺は真田道場の跡取りだからな。

この前の不良軍団と違い、道義を身を包んだ拳法家風の男が1人で待ち続けていた。

拳法家「……貴女が川神百代さんで、貴方が真田八雲さん？」

百代「いかにも」

八雲「そつだが」

拳法家「私は雲野十三。武の探求者だ。高名な川神院の鉄心先生に相手を願おうとしたところ、

貴方方に勝てないと勝負を受けられないと」

百代「そういう仕組みになつている」

八雲「あのじいさんめ。なんで俺まで加えるんだよ。

まあいいや、百代よろしく。俺はバスする方向で」

百代「もちろん私がやる!」

拳法家「フフツ……フフフフ、フハハハハ!!!!  
川神鉄心、噂だけの男だったのかい！」

百代「ん?」

拳法家「そつだらう? こんな美人な女子学生と  
試合しろなんて正氣の沙汰とは… (ジロジロ)」

拳法家『・・・・・!?

(な、なんだ良く見ると全くスキがない、端田にはただの  
美人だが……)

『俺には理解できる、その理不尽なまでの強さ』

拳法家「大変失礼な事を…!… 申し訳ない…!」

いきなり相手が謝った。

拳法家「貴方は武道家でありました。お手合わせを」

百代「…承知…ふふふ。場所は今ここで。すぐに戦おう。服はこれ  
で問題ない」

モモ姉が嬉しそうに笑った。相手の心意気に応えるべく本気だ戦う  
ようだ。

また周囲にギャリリーが集まつとしていた。

百代「今日は正式な死合いだ。観客は遠ざかってくれ」

俺たちはすぐさま動き観客を遠ざける。

八雲「ワン！」、はじめる

一子「おつとお。これは絶対見届けないとね」

川原で百代と拳法家が対峙する。  
拳法家はすぐさま構えをとる。

百代「構えているが…仕掛けてもよろしいか？」

拳法家「なー？あ、ああ」

百代「せいいつー！」

拳法家「ぱきゅー！」

稻妻が横を走つたように見えた。

八雲「勝負あり」

みれば挑戦者は一〇三ほど吹つ飛ばされている。完全に気絶している。

ピシッとした姿勢で相手に一礼する百代

一子「さすが血慢のお姉様。ね、ね、凄いでしょ！」

明久「ワン子揺らがないでよ、わかつてゐるから」

その後百代が川神院に連絡をいれ、挑戦者の治療を頼んだ。  
きちんと試合形式をとつた者には、フォローする。

礼を欠く外道には、その悪の上を行く鬼畜さで処刑するのが百代の  
スタイルだ。

その後は普通に学校へと向かつて行つた。

今日は午前10時からDクラス戦が開始される。  
Eクラス戦では活躍できなかつたが今回は頑張るとしよう。

## 朝からの挑戦者（後書き）

次回で残りの転入生1人を紹介します。

まあ皆さん検討がついているかもしれませんが・・・

これからも応援よろしくお願いします

## ドイツより参上ーー！

朝のH.R

福村「昨日の今日ですが転入生をお知らせします」

凄いな始業式からまだ2日しか立っていないのに3人も転入生かよ

福村「では紹介します」

Fクラスの皆はどんな人かざわついている

ガラガラッ！

転入生？「グーテン・モルゲン」

ざわ　ざわ　ざわ　ざわ　ざわ　ざわつ！！

一子「え？あ、あの人気が転入生だつていうの？  
ちょっとふけてる感がないかしら？」

教室に入ってきたのは外国人のオッサンだった

ガクト「そこが問題じゃねーよー！」

姫路「あのう身体的特徴をしてはいけないと思いますが」

秀吉「突っ込むところが違う氣がするが・・・・・・」

康太「…………ツツコム…………（ブシュー）」

明久「ム、ムツツリーーーーー！」

八雲「お前は何に興奮したんだ？」

福原「皆さん勘違いしないでください。この方は転入生の保護者の方です」

明久「あ、そーなんだ、びっくりしたよ」

福原「あの、ご息女は？」

転入生父「ご安心を。時間には正確な娘です。間もなく駆けて来るでしょう」

オジサンが指差した先、窓に視線が集中する。

転入生父「グラウンドを見てみるがいい」

大和「……？ げつ！？」

すると窓から外を覗いていた大和から驚きの声があがる

ガクト「どうした大和、何が見えるんだ？」

大和「女の子が学校に乗り込んできた」

ガクト「なんだそりや！！」

大和がそんな事を言うので皆が窓に近づき外を覗く

明久「うん確かに乗り込んできたねえ」

明久「馬で」

クリス・クリスティアーネ・フリードリヒー！ ドイツ・リューベックより推参！！

「この状況で今より早めに話した方がいい」

馬に乗り、風にたなびく金髪が美しい。

須川「おおお金髪さん！ 可愛くね、マジ可愛くないか！？」

百代「アレは本当に可愛いなあ

乗り込んできた美少女に男子達が咆哮する。  
1人女子がまぎれているが・・・・・・

八雲「ははははは、馬かよ！面白いなあいつ」

島田「うわ……あれはもう完全に負けたわ……でも馬つて」

クリス父「日本では馬は交通の手段だろ？？」

明久「いや、あの、道路とか見ましたよね？」

クリス父「自動車が多かつた。だがTVでは馬も走っている」

秀吉「それは時代劇だと思うのじゃが」

クリス父「おお、あれはまさか……」

八雲「ん？ げえ！！ よりによつて例外が……」

窓の外を見るとよりによつて例外が現れた

クリス「ここが今日から自分の学び舎か。

自分その他に馬登校はいらないのだろうか？」

英雄「フハハ！ 転入生が朝から馬で登校とはやるな」

あずみ「おはようござこますつ」

それは俺たちと同じ学年の九鬼英雄だ。

あいつは九鬼財閥の息子で人力車で登校している

そしてメイドのあずみだな。1人で人力車を動かすとは本当に凄い女だな

クリス「それは……ジンリキシャ」

英雄「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄くきひょうである！」

クリス「自分はクリス！ 馬上にてご免」

英雄「我が名は九鬼英雄！ いざれ世界を統べる者だ！ この榮光の印、その目に焼き付けるが良い！！！」

そこで九鬼は金ぴかの学ラン（特注）の背中に書かれている昇り龍を見せ付ける

クリス「おお、まるで遠山！」

クリス父「人力車で登校の生徒もいるとは、さすがはサムライの国ですな。ハハハ」

クラスの皆があんぐりと口を開けていた

明久「雄！……この人達つてもしかして」

雄二「ああ……日本を勘違いしている外国人”だ”

あの後も転入生は馬でここまで来ようとしていたし、あの福原先生でも頭を抱えていた。

クリス「クリスティアーネだ。改めてよろしく！」

凛とした声と立ち振る舞いに男達は見惚れていた。

ガクト「はいはい！……質問です。えーと、くりすていあーね？」

クリス「自分としてはクリスと呼ばれることを希望する」

ガクト「クリス。彼氏はいたりすんのかな？」

ガクトの質問にFクラスの男子が身構える。

皆、よく言つたという顔で返答を待つていたが

クリス父「そんなものいないに決まってるだろ」ガツ！…」

クリスの親父さんの怒号でクラスが静まりかえってしまった。

クリス「父様のおっしゃる通りだ」

ガクト「そ、そーすか……」

クリス父「クリスにちよつかいを出す者は軍が殲滅する」

姫路「GUN？」

クリス「父様は任務に私情を持ち込まない軍人だ」

秀吉「いや、今持ち込んでいた気がするがのう」

クリス「友達から日本の良さをいっぱい聞いてきた。  
日本のドラマも見ている」

明久「ちなみにそのドラマって何？」

クリス「大和丸夢日記や鬼兵などだな」

クラスの皆がやつぱりか、という顔をした。  
いずれも日本では有名な時代劇だからな。

クリス「ここに来る前に、京都にも観光で一度寄ったのだが、  
ドラマ（時代劇）そのものの場所で感動した！」

ガクト「映画村だ。それ絶対映画村だ」

姫路「日本のどういふところが好きなの？」

クリス『武士道精神！』

クリス「自分は騎士道精神を父様より教わったが、  
驚いた事に日本のボクサーは負けると切腹するといつ、  
何と誇り高い！ボクサーまでサムライとは」

姫路「あのそれ…一部の人人が勝手に言つただけで…」

秀吉「しかも負けても切つておらぬし」

クリス「SUMOのRIKISHIのKIHは全てを貫通するとい  
う。まさに神技」

康太「…………それはネット上のカラージュ」

雄二「つまり日本人を過大評価しそぎているんだ」

クリス「父様、これが武士の“謙遜”なのですね」

クリス父「うむ。日本人は慎み深いと聞く」

クリス「素晴らしい考え方だと思います」

雄二「もう何を言つても無駄だろうなこれは……」

その後、クリスの親父は馬を連れて帰つていった。

最後に「何かあれば戦闘機でかけつけてくるからな」と言つていた。  
それを聞いてFクラスの皆はかなり落ち込んでいた。

その後追撃で俺のトトカルチョで皆はずしていたのでショックを  
受けていた。女にかけた人と俺は儲けたな。

ダイシよつ參上ーー（後書き）

クリス登場です。

そして何気なく英雄とあずみを出してみました。

次回はいよいよロクラス戦です。

## Dクラス戦（開幕）

その後HRが終わるとすぐに試合戦争の準備に入った。クリスには試合戦争について軽く説明しておいた  
大和と京には昨日話した。

雄一「皆、明日はDクラスと戦争を行う。

昨日のEクラスと違った戦いになるが俺たちには  
昨日言ったように強力な仲間がいる」

F「そうだ！俺たちには姉御がいるんだ」

F「それに姫路さんもいる」

F「一子タン俺とつきあつてくれ」

F「京さん俺と結婚してくれ」

今また何か幻聴が聞こえた気が・・・・・・

雄一「そこで昨日は戦争になれるため何も言わなかつたが、

今回からは隊を作る」

明久「隊？」

雄一「ああ、前線部隊、中堅部隊、遊撃舞台、情報部隊、近衛部隊、  
補給支援部隊の6つの部隊を作ろうと思つていい

八雲「で雄一、もう割り当ても考へてるんだろ」

雄二「ああ、今それを張り出す」

そして雄二是紙に書かれた部隊表を黒板へと貼りつけた。

< 前線部隊 >	部隊長 源忠勝 以下 8名	補佐 川神一子 計10名
< 中堅部隊 >	部隊長 吉井明久 以下 7名	補佐 木下秀吉・島田美波 計10名
< 遊撃部隊 >	部隊長 真田八雲 以下 8名	補佐 川神百代・クリス 計10名
< 情報部隊 >	部隊長 直江大和 以下 3名	補佐 土屋康太 計5名
< 補給支援部隊 >	部隊長 椎名京 以下 8名	補佐 島津岳人 計10名
< 近衛部隊 >	部隊長 坂本雄二 (代表と兼任) 以下 13名	補佐 姫路瑞希 計15名

とかかれてあつた。

俺たちFクラスは他のクラスより11名ほど多い。

理由は成績上位からクラスを分けていて席の数が決まっているので各クラス毎に50名なのでFクラスに残つた者が送られるからである

雄二「とこつ風になつてゐる。俺からも指示を出すが

大和からも指示を出すようにしてゐるから大和の指示にも従うよに」

大和「ちよつといいか。俺と京は今日きたばかりなのに部隊長をやつて良いのか?」

雄二「ああ、八雲がお前らは役に立つと言つたからな

大和「それだけで」

雄二「そうだ。まあよろしく頼むぜ軍師さん」

大和「わかつた。期待に答えるようがんばるとしよう」

八雲「なあ雄二。俺の負担でかくないか?」

雄二「気のせいだ」

八雲「絶対気のせいじゃない気がするが・・・」

雄二「で作戦だが、まずは源率いる前線部隊がDクラスと戦う。その後ろに明久率いる中堅部隊が状況を見てから援護しろ。情報部隊はムツツリー二たちで情報を集めてきて

۱۵۰

大和だけは明久たちと一緒に指揮をとつて欲しい。  
八雲率いる遊撃部隊はまあ自由にしろ。

大和「いいんじやないか」

雄一では皆頑張って欲しい！」

開戦時間になり、Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切つて落とされた。

一子が叫び、突撃する。

忠勝一突つ込め――――――――――

一子が敵の先手とぶつかる。

Fクラス 川神一子 VS Dクラス男1  
化学 53点 135点

一子は薙刀を上手く使い相手の間合いの外から振り下ろす。

そのまま相手を切り裂き 相手の召喚體は消滅した  
一子は明久や俺達と比べると召喚獸の操作は上手くない

普通の生徒と比べるとかなり上手いほうだったから、瞬で倒す事ができた。

一子「一番手柄、Fクラス、川神一子！！！」

一子はそのまま敵の群れの中に突っ込んだ。

その操作の高さで敵をバタバタと倒していく。

倒し損ねた敵はゲンさんが上手く味方を使い倒していく  
薙刀を器用に回転させ、なおも敵に切り込む。

忠勝「あそこだ、一子が討ちもうしたヤツらを狙えーー！」

敵がひるんだ所にゲンさん達が突っ込んでいく。

D男2「クソッ！Fクラス相手にやられてたまるか

Fクラス	源忠勝	VS	Dクラス男2
化学	253点		138点

D男2「なんだよあの点数は！？本当にFクラスか？」

もともとゲンさんはAクラス並の点数を持っている。

試験当日は用があつて試験を受けてないからFクラスらしいからな。

D男3「塚本どうするんだ？」

塚本「焦るな。俺達のほうが点数も數も上だー因んでつぶすんだ！」

！」

今、前線部隊は10名それに対しDクラスは30名近くいる。

10対30の戦いが始まっていた。  
が、すでに一子により6人ほど倒している。

今、遊撃部隊では

百代「おい、八雲どうするつもりだ。私は早く戦いたいのだが」

クリス「自分もだ。早く活躍したいぞ」

八雲「まあ今は待つてよ。今はゲンさんと一子たちが粘っているからね」

百代とクリスを抑えていた。

そして中堅部隊では

明久「今は前線はどうなっているの？」

大和「今は源とワニ子が粘ってくれてるが、そろそろヤバいな」

明久「なら、援護に向かってほうがいいよね」

大和「そうだな。ならまず班を2つに分けて、えっと木下だつたよな？」

秀吉「秀吉でよいぞ。でワシがどうしたのじゃ？」

大和「まず秀吉が4人連れて前線部隊を援護してきてくれないか、で、その人、八雲に作戦通りに行動してくれと伝言を頼む」

秀吉「わかつたのじゃ。では行つてくるぞ」

明久「氣をつけてね秀吉」

大和「明久と島田もいつでも出られるようにしておいてくれ」

島田「わかつたわ」

明久「了解」

大和の指示でテキパキ動いていた。

それからしばらくして

F伝「伝令、前線部隊残り半分を切り、木下率いる部隊も2名やられ、

残りは7名となりました」

明久「ゲンさんとワニ子の状況は?」

F伝「源隊長は点数が3桁をきり、川神補佐官は先ほど2桁をきました」

明久「大和!」

大和「ああ、明久たちも行つてくれるか。源とワニ子を戦死させないでくれ」

明久「了解! 中堅部隊、残った前線部隊を助けに行くよ」

F 中『おおう！――』

大和「伝令さん、遊撃部隊に動いてくれと云々てくれ」

F 伝「了解」

## Dクラス戦～中堅部隊参入～

一子「さすがにこれはヤバいわね」 8点 化学

忠勝「チツ、ここまでか」 53点

秀吉「・・・ここまでかのう」 34点

前線部隊はこの3人を残して全滅してしまった。

相手はまだ17人が程いるし、援護として5名ほど加わってしまった。

3人とも戦死を覚悟していたが

明久「試獣召喚！」

吉井明久  
化学 130点

明久「これより中堅部隊を援護するー皆、僕に続けえ！！」

明久たち中堅部隊が援護に入った。

明久「3人とも大丈夫？」

一子「何とか大丈夫よ」

秀吉「明久たちのおかげでギリギリ間に合つたぞい」

忠勝「だがこれ以上は戦えねえ！」

明久「こゝは僕達が引き受けるから回復試験受けきなよ」

忠勝「すまねえ」

明久「皆ーの3人を下がせるよ。援護して」

F中『了解つ！』

とりあえず指示を出し終わつたあと、また別の声が聞こえた。

美春「ようやく見つけました！お姉さま！」

島田「げつ！ 美春」

明久「何？島田さん。知り合い」

清水「……お姉さまに捨てられて幾日、美春は、美春はこの瞬間を待ち続けていました！」

島田「もう一 いい加減つひのことは諦めなさい！」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

清水「イヤです！ お姉さまは、いつまでも……いつまでも、美春

のお姉さんなんです！」

繰り出された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

島田「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

清水「嘘です！ お姉さんは美春のこと愛しているはずです！」  
どう見ても島田さんは本気で嫌がっているはずなのだが、

清水さんにはそう見えないらしい。

島田「て、やあ」

清水「負けません！」

何回かの打ち合いがあつたが、その全てで美波の召喚獣は打ち負け  
る。

明久「島田さん！ 点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメ  
だ！」

島田「そんな、こと、言われても、細かい、動作は、できない、の  
よ、

きやつ！？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

清水「ここまでですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。  
2人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。  
当然、清水さんが94で島田さんが53だ。

清水「さ、お姉さま、勝負はつきました」

島田「ほ、補習室は嫌あつ！」

清水「補習室？……フフッ。そんな無料な場所へお姉さまを送り込んでしませんわ。

さあ、参りましょう」

そう言つと、清水さんは島田さんの手を取つた。

島田「な、なにを……」

清水「この時間ならベッドも空いてますわ」

島田「い、いやよ。よ、吉井。助けて」

仕方ないな。ここに戦力が減るのもイヤだし

清水「邪魔者は殺します！」

明久「はつ！」

僕は清水さんの攻撃を軽くかわし木刀をのぞいて突き刺した

清水「そ、そんな……」

召喚獣を一撃で倒された清水さんは、呆然と立ち去つた。

島田「補習の西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

鉄人「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぜ。いつかこ  
まい」

清水「お、お姉さま！美春は諦めませんから！」

「のまま無事に卒業出来るなんて思わないでくださいね！」

最後に恐ろしい言葉を残して連れ去られていった。

Dクラス戦 ～中堅部隊参入～（後書き）

清水登場です。

## Dクラス戦 ～決着～

清水さんは倒したけど、その間に仲間が数人やられていた。  
しかもあそこにいるのは数学の船越先生だ。相手は一気に僕達を片付ける気だ。

このままじゃヤバイな・・・・・・

と明久が考えていると

『ピンポンパンボーン』  
『連絡致します』

F中1「校内放送？」

明久「あれ？何かどつかで聞いた事のある声...」

F中2「なあ、こいつ須川じゃねーか？」

F中3「ああ、須川だな」

これは大和か雄二の策かな

須川『船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい』

明久「どうやら何かの作戦みたいだね」

島田「多分、先生を別の場所に向かわせて時間を稼ぐのが狙いじゃないの?」

明久「しかも船越先生とはタイミングがいいね」

『島津岳人君が体育館裏で待っています。

なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

ガクト「チクショー————！」

遠くでガクトの叫ぶ声が聞こえた。

船越先生はすぐ様ここを離れ体育館裏へと向かっていった。

ちなみに船越先生は今年も婚期を逃し、生徒に単位を使っておどし迫つたほどの人物だ

明久「皆、ガクトの死を無駄にするなー！」

F中1「なんてヤツだ。あいつは」

F中2「クラスのために命を捨てるなんて」

F中3「この戦いは負けられないな」

D2「こんなヤツがいるクラスに俺達は勝てるのか」

今の放送によつて味方の指揮があがり、相手には動搖が広がつた。  
そこへ

京「明久、援護に来た」

京、率いる支援部隊が到着した。しかも教師を連れてやってくれた

明久「京、助かるよ」

京「もう少ししたら本体も来る。だからこのまま耐えて」

明久「うん、わかったよ」

明・京「試験召喚…！」

Fクラス 吉井明久 & 椎名京  
世界史 217点 312点

明久「皆、ここが踏ん張りビームだよ。もう少ししたら雄一たちが  
くる

それまで耐えるんだ。京は援護お願いね」

京「援護は任せて」

塚本「あちらの本体が来る前に敵を倒すんだ」

平賀「塚本援護に来たぞ」

塚本「代表、すまない。あの2人を倒せばこちらの勝ちだろ。アレ以上の点数を持つヤツはないだろうしな」

今の戦力は

Fクラス 明久・京・島田 以下14名

Dクラス 平賀・塚本・玉野 以下35名

塚本「吉井を囮んで倒せ！ヤツがこの場の指揮官だ」

明久「そう簡単にはやられないよ

明久は自慢の操作技術で敵をかわしていく。  
そこへ京の援護の矢が敵に刺さっていく

塚本「なんだこいつらの連携は」

平賀「そう慌てるな。もうこいつら以外はもう残ってない」

いつの間にかにFクラスの中堅部隊・支援部隊は2人を残して全滅していた。

雄一「明久！生きているか！俺達が行くまで耐えろ！」

そこへ雄一率いる本体が向こうのほうからやつてくる。

塙本「つ！もう着やがったか。あいつらが来る前にこの2人を倒すんだ。

代表は念のために下がってくれ」

平賀「わかつた」

八雲「そつは問屋が卸さないぜえ！遊撃部隊コレより代表平賀を狙う。皆、かかりえー！」

雄一たちが来ている反対のほうから俺率いる遊撃部隊が参上する。

今、Dクラスをはさみうちにしている。

平賀「所詮はFクラスだ。あいつらを破つて離脱するぞ」

八雲「百代、クリス。随分待つたから共に暴れようぜーーー！」

百代「ああーーー！」

クリス「もちろんだーーー！」

八・百・ク「「試獣召喚」」<sup>サモン</sup>

玉野「近衛部隊が受けます試獣召喚ーーー！」

保健体育

352点

363点

312点

VS

Dクラス 玉野美紀 & D近衛1 & D近衛2 & D近衛3 & D近衛4  
保健体育 158点 142点 139点 150点 147点

D近衛1 「なんだあの点数は！？」

D近衛2 「本当にFクラスか」

D近衛3 「しかもあの川神百代って四天王の1人だよな」

八雲「本当に前からは保健体育だけは点数良いよな」

百代「一応、武道の娘だからな」

八雲「それなら他の教科も頑張つて欲しいよ

百代「あーあー何も聞こえない」

八雲「それにしてもクリスは凄いな」

クリス「そうだろ」

八雲「じゃあそろそろやるか。今の間に本隊も着たようだし、俺と百代は2殺で、クリスはひとまず操作に慣れてくれ」

クリス「任せろ」

百代「どうせなら私が全部やるが」

八雲「ダメだ！俺この前の戦争では何もしてないからな。今回は暴れたいからな！」

D近衛1「何だと！？」

D近衛2「舐めやがつて！..！」

八雲「じゃあ散開！」

Fクラス

真田八雲

VS Dクラス

玉野美紀

& D

近衛1

保健体育

158点

1

42点

八雲「行くぞっ！」

俺は一気に駆け出し距離をつめ槍を振るう

八雲「はっ！..！」

それ続いて突いていく

D近衛1「つ！..！」

その後は相手の武器を叩き落とし胸を貫き、まず一人終わらせる

玉野「まだ、私もいるよ

近衛部隊の1人の玉野さんが俺に向かつて斬りつけて来る

俺はそれ攻撃を槍を使って受けながら、

ハ雲「甘い！これで終わり！！」

槍で玉野さんの召喚獣の首を跳ね飛ばした。

百代とクリスもどうやら倒し終わつたみたいだ。

向こうのほうでもロクラス代表の平賀が姫路に討ち取られたみたい  
だな

## Dクラス戦後対談とある出会い

F 「…………うおおおおおッ…………」

F 「凄えよ……本当にDクラスに勝てるなんて！」

F 「これで畠や卓袱台ともあさらばだ！！！」

F 「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな！……」

F 「坂本万歳！……」

雄「あーまあなんだ。そう褒められるとなんつーか・・・  
そういうと雄二は頭をポリポリかいて照れていた。

F 「坂本……握手してくれ！」

F 「俺も」

ハ雲「明久もお疲れ、頑張ったみたいだな」

明久「そうかな。僕より大和の指示のおかげと京の援護射撃のおかげだよ」

京「明久も頑張っていたと思うよ」

大和「そうだぞ明久。お前が居たから前線部隊は全滅を免れたんだ  
しな」

「な、八雲。明久もだけどワン子やゲンさん、秀吉も頑張つてたみたいだ

忠勝「俺よりも一子のほうが凄かつたぞ」

秀吉「セウジヤの、一子の活躍は田を見張るセウジヤつたぞ」

一子「えへへへ、照るなあ」

八雲「良く頑張ったなワン子」

卷之三

「子、そこへでしゃ！アタシたゞてせぬんだからね。」

ハ雲一  
だな。なら勉強をもつとやって点数も伸ばさないとな  
じゃあ早速ワソ子のために勉強会でもするかな「

一子「えつ！？」

八雲「じゃあ頑張ろうな」

「子で、でもハ雲今田バイトでしょ？」

八雲「それは大丈夫。問題集を渡せばすむ事だし、

一子「う！」

京「敵し乍らあざむ」

明久「ワン子、僕も一緒にやるから一緒に頑張りつよ」

その後ワン子は落ち込んでいた。

しばらくして落ち着き、雄一はロクラスの平賀が戦後対談している。

俺はバイトがあるので雄一に任せ先に帰らせてもらつた。  
ちなみにガクトはあまりに不憫だったので大和にお願いして助けて  
もらつた。

そして、バイトへ向かっている途中

八雲「ん? 何だあれは?」

そこにはウチの学園の制服を着た女子一人が複数の男に囲まれていた。

良く見れば知つた顔のように見えた。

・・・・・あれば秀吉か?いやでも女子の制服着てるしな。  
それに秀吉はまだ学校だろうしな。  
つてことは、前言つてた秀吉のお姉さんか?

そんな事を考えていると向こうでの会話が聞こえた

不良1『よお嬢ちゃん。可愛いじやねえか』

不良2『ちよひへりお兄さんたちと遊ばねえか?』

優子『や、やめてよ!』

不良3『ああ?何だよ。断わるつて言つんなら仕方ねえな。  
無理矢理連れていくしかねえか』

正直、ああいつのは見ていていい気がしないな。

・・・・・・めんぢくせいけどしょ「うがないか

俺は、その男たちのグループに近づいていった。

八雲「木下、こんなところに居たのか?探したぞ」

そつ音ついで、周りのやつらを押し退る。

不良2「何だ?」

八雲「木下、急にいなくなるなよ。心配しちだ?」

優子「え?」

八雲「(いいから話を合わせろ)」

相手に聞こえない程度の声で話すと、秀吉の姉は理解したらしくすぐ黙った。

八雲「じゃあ行くぞ木下」

俺は秀吉姉の手を掴んで、その場を離れようとしたが

不良1「おい待てよー！」の女は俺達が目をつけてんだ

不良2「その嬢ちゃんには少しばかり俺たちの相手して貰わねえといけねえんだよ」

八雲「すみませんね。こいつは俺のツレでね。悪いが手を離してもらえないか？」

「こつちは急いでんだ！」

バイトの時間なんだ急がないと遅刻するだろ？が！

不良3「それは無理な相談だな」

不良4「さつたとその嬢ちゃんを一いち方に渡せやあー！」

不良の一人が殴りかかってくる。

バシッ

俺は殴つてくる男の手を掴み、そのまま背負い投げを決める。

八雲「正当防衛だ！まだやる気か。まだやるつて言つなら相手にないだよ」

不良1「な、なめるなあー！」

不良が一気に迫つてくる

八雲「木下。俺の後ろにいるよ」

俺は迎え撃つため秀吉の姉を俺の後ろに下がらせ迎え撃つ。

ドコッ バキッ バキッ

勝負は一瞬でついた

八雲「まだやるか？」

不良1「ひ、ひいい……！」

不良たちはすぐさまここから離れていった。

あいつらよりまだ明久たちのほうが強いな

八雲「もう大丈夫なようだな」

優子「あ、あの、ありがとうございました」

八雲「気にするな。げつ！時間がヤバい！！ もう大丈夫だと思つ  
けど 」

俺は犬笛を取り出すと

ピイー————

一子「何のようハ雲？」

俺がワン子笛を使うと10秒も経たずにワン子がやってきた。  
・・・・・随分早いな。まあ都合が良いが。

ハ雲「ワン子任務だ！」これからそこそこいる秀吉のお姉さんを無事に  
家に送り届ける！

それができたら明日、褒美をやるから良いなー俺はこれから  
バイトだからよろしく」

一子「わかつたわ」

ハ雲「じゃあ頼むな。木下も一子が護衛するからもう大丈夫だと思  
うから、じゃあな」

俺は秀吉のお姉さんこそいついつバイト先に向けて急いで向かった。

## 昼ラジオ①

Dクラス戦を終えた次の日の昼休み

教室（Eクラス）で明久たちと食事をしていると

スピーカーから音楽が流れ始めた

この学園では1週間に2日、放送が流れている

準「ハアイエブリバデイ、春といえば恋だよね。

でも浮かれていって妙な病気にかかるのだけは、勘弁な。

今週もラジオ番組「LOVEふみつきがはじまるよー！  
いのうえじゅん

パーソナリティーは俺、ハゲこと2年の井上準と…」

百代「人生、喧嘩上等諸行無常。2年の川神百代だ」

これには百代がいつも登場する。

学園で男女とはす人気があるかららしい……

準「今日も百代さんに相談のメールが沢山きますよ。

準さん、百代さんこんにちは、はいこんにちわー！」

百代「よ。といふか、前置きはいいから本文読めハゲ」

準「好きな子ができました。どう接すれば良いですか

百代「私が味見してやるからその娘を紹介してみる」

準「ちなみに本氣で言つてますから注意してくださいね」

それは本当だぞ。注意するんだ手紙主ー。

準「はい、次。“百代さん好きです付き合つてください”ー。」

百代「おー。メールで言わず正面から来るんだ」

準「次、百代さんはどんな映画が好きなんですか」

百代「ひたすらにアクション映画だ」

準「俺はなんでこのラジオ人気あるのか分かりません」

百代「ハゲ、お前は好きな映画何なの？」

準「可愛い児童達が活躍する映画かな。なごむ」

百代「ちょっと危ない意見だなハゲ」

いや、ちょっとじゃない気が・・・・

準「危なくない！そもそも可愛いものを見守るという行為は父性のそれと同等であり決してやましいものなぞ

ミクロンもないと命を賭けて言い切れる！

だいたいなあ口リコンなんて言葉が流行したからいけないんだ。

俺はただ、小さい女の子とお風呂に入りたいだけなんだ、

それだけの純粋な粉雪の心なんだ」

百代「暴走すんなハゲ！（バキッ）

…あ、氣絶させてしまつたな。まい。曲流すぞ

ぐだぐだなラジオだつた。

百代のキャラが面白いといふことでお願いしてくるそつだ。

ハ雲「いつもながら凄いラジオだな」

秀吉「そうじやの」

明久「話は変わるけど雄二」

雄二「なんだ明久？」

明久「今度はCクラスと戦うの？」

雄二「いや、次はBクラスとやる」

秀吉「Bクラスじやと？」

雄二「ああ、大和たちが居るおかげでこちらの戦力は随分と上がったからな」

大和「で、Bクラスとはいつやるんだ？」

雄二「週明けだな。今日はさすがに連戦で皆疲れているだろうしな。それに明日からは休みだしな。

その間にムツツリーに情報を集めてもらひつ」

ハ雲「でも勝てるのか？皆の点数じやBクラス相手だときついだろ

う

雄二「そこは俺と大和に任せろ！勝つ為の策を考えてやる」

明久「それなら安心だね」

雄二「だから明久たちはしつかり点数を確保しておけよ」

明久「そうだね。ならハ雲、大和今日も勉強教えて」

ハ雲「今日はバイトが休みだからいいぞ！  
最近は勉強よくやるな」

大和「俺もいいぞ」

京「大和が手伝うなら私も」

秀吉「のうハ雲よ。ワシにも勉強を教えてもらえぬじやろ？」

康太「…………俺も」

雄二「俺も良いか？」

ハ雲「ああ、いいぜ。ならせつかくだし皆でやるか。

ワン子や百代、ガクトの成績も上げないといけないしね。  
じゃあウチの寮に集合つてことでいいよな」

一・岳「「げえ！？」

大和「3人は強制だな！」

そういうことで今日は強制で勉強会することになった。

その後、彼らは涙を流しながら勉強したという。

一子曰く「あ、あれは『』、拷問よ」 うしい

何が起きたのかは知る人ぞ知るということ。

## ■ラジオ（後書き）

今回は井上準<sup>ハナ</sup>登場です！

この調子でどんどんキャラを出していけたらなと思います。

## 昼の地獄

週明けの昼休み

雄二「よしあ昼飯食いに行くか！」

島田「あツウチも一緒にていー？」

八雲「俺も一緒に行くぞ」

明久「僕もいいかな？今日はお弁当持つてきていらないんだよね」

俺達が食堂へと向かおうとすると

姫路「あ、あの皆さん」

姫路が恥ずかしそうに話しつけてきた

姫路「え、えっと。おツお昼なんですけど、そのツ・・・・・・

秀吉「おお、もしや弁当かの？」

姫路「はツはー、迷惑じゃなかつたらどうぞー。」

明久「迷惑なもんか！ねツ雄二！」

雄二「ああそだな、ありがたい」

康太「・・・・・楽しみ」

一子「楽しみだわ」

ガクト「まさか女子の手料理が食べられるなんて」

島田「むー・・・ツ瑞希って意外と積極的なのね・・・」

秀吉「せっかくの」馳走じゃしこんな教室ではなく屋上にでも行くかのう

雄二「だつたらお前ら先に行つてくれ」

明久「ん? 雄二はどうか行くのか?」

雄二「飲み物でも買つてくる。全員お茶で良いよな?」

八雲「ああ、良いと思つぜ」

島田「あツウチも行く! 一人じゃ持ちきれないでしょ?」

百代「私も行くぞ」

雄二「きみちゃんと俺達の分とつておけよ」

八雲「多分、大丈夫・・・・でも急いで帰つてこいよ

明久「じゃあ僕らは行こうか

秀「そうじやな」

俺達は屋上に向かつて行つた

秀吉「天気が良くてなによりじゃ」

一子「そうね」

八雲「人がいないから貸切状態だな」

すると、姫路さんが料理を入れた重箱を中央に置いた

姫路「あんまり自信はないんですけど・・・」

そう言いつつ姫路さんは蓋を開けた

明・秀・八・ガ「「「おおッ」「」」  
俺らは一声に歎声をあげた。

旨そうだ。姫路さんにはから揚げやエビフライにおにぎりなど定番のメニューが入っていた。

明久「こりゃこれはーー！」

康太「・・・・おしゃれ！」

ガクト「これは凄えな！」

姫路「よッ喜んでもらえて良かつたです・・・」

明「じゃあ、雄二たちには悪いけどお先に」と

クリス「こなんおいしそうなのは待つていられないな」

そう言い明久は箸をのばしていくと、不意に横から先に

ムツリーー」とガクトが姫路さんのエビフライを口の中に入れた

パクッ

明「あツするいぞムツリーー、ガクトー！」

バタン

ガタガタガタ

八・明・秀・大・京・一・ク「「「「「「一?」」「」「」「」「」「」「」」  
エビフライを食べた直後、ムツリーーとガクトが豪快に倒れ、小刻  
みに震えだした。

八・明・秀「「「「「「」」」

秀吉と明久と顔を見合わせる。

姫路「わわっ土屋君、島津君！？」

姫路さんが慌てて、配ろうとした割り箸を取り落とす。

康太「・・・・・・・・（ムクリ）」

ムツリーーが起き上がつた。

康太「・・・・・・・（グツ）」

そして姫路さんに向けて親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と  
伝えたいんだろう。

姫路「あつお口に合いましたか？良かったです」

でもなムツリーー、それならなぜ足が未だにガクガク震えているん  
だ？

俺にはＫＯ才前のボクサーにしか見えないだが

姫路「良かつたらどんどん食べてくださいね」

姫路さんが嬉しそうに勧めてくれると断れない。  
むしろ、どんなにまずくても残さず食べてやる、といつぱんにさえな  
つてくる。

・・・でも俺には田を虚ろにして体を震わすムツリーが忘れられ  
ない。

八雲（・・・・・まああれ、どう思つ？）

俺達は姫路さんに聞こえないくらい小さい声で話し掛ける。

秀吉（・・・・・どう考えても演技には見えん）

明久（・・・・・だよね。ヤバイよね）

大和（京並の腕前か）

一子（確かに京の料理わね）

大和（じゃあまず、ワン子と京、クリスは姫路が  
こちらの会話に気づかれないようにしてほしい。

こつちは俺達でどうにかしてみるから）

一・京・ク（（わかった））

そう言うと3人は言われた通りに動いてくれた

秀吉（で、大和よ。どうするつもりじゃ？）

大和（・・・・・皆。お前、身体は頑丈なほうか？）

明久（・・・・・正直、あれが京レベルのものなら無理だね）

秀吉（・・・ならば、ここはワシに任せてもらおう  
八雲（ひとまよ、）

俺は姫路のほうへ向かうと

八雲「なあ姫路、弁当に何を入れたかを聞かせてくれないか?」

姫路「何と言われましても、普通に作りましたよ?隠し味に“硫酸”を入れた位で」

八雲「普通に……ん? 硫酸?」

不吉な単語を聞きとつた俺はは、その海老フライを畏怖の視線で見つめる。

そして大和たちと顔を合わせる

八雲「どうやって手に入れたかが気になるが、どうしてそんな物を？」

姫路「ちょっと、酸味が欲しいと思いまして」

八雲「……なあ姫路、硫酸の特性を教えてくれないか?」

少々罪悪感に晒されつつ、俺は内容説明に。

生き残った皆は、俺をまるで英雄の様に尊敬の眼差しを浮かべている。

雄二「待たせたな。こりゃ美味そりじゃないか。どれどれ?」

手に飲み物の缶を抱えた雄二が、弁当に手を伸ばす。

明久「あつ、雄二!?

明久の制止を聞かずに入れる、逝った2人のように雄二も倒れた

大和「卵焼きは何を？」

姫路「えつと、クロロ酢酸を……」

明久「大和、京、皆にパンとお茶を買ってきてくれないかな。百代とワニ子も手伝ってあげて」

大和「ああ、わかった」

とんだランチタイムとなってしまった。

大和たちがパンなどを買いにいっている間に俺は姫路を説教した。そして今後弁当を作つてくる事を禁止した。

その数分後

雄二「…………まさか、姫路にこんな欠点があつたとは」

康太「…………意外」

被害者3名は、殺菌作用のあるお茶を大量に飲みながらの会話。顔色も悪く、小刻みに震え続けたまま。ただし、ガクトだけはまだ倒れていた

大和「それで試合戦争だけど、次はBクラスなんだつたな？」

雄二「ああ。Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝

つための要素がある。

俺たちじゃ真正面からぶつかつた処で、勝ち目はないからな

Aクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート達。

試合戦争は代表を倒す事が勝利であるが、

Aクラス代表はそれすなわち学年首席。

Fクラスの戦力では、囮つた処で返り討ちに遭つ事は容易に想像がつく。

ちなみにDクラスとは雄一に考えがあり設備の交換はしなかつた

ハ雲「それで、どうする気だ？」

雄一「Bクラスとの戦争のシステムを使って、

Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

一子「システム？」

雄一「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか一子？」

一子「え！？ えーっと……」

ハ雲「負けたらランクを一つ落とされるんだ。コレ位覚えておけよ」

雄一「そうだ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

大和「成程な。設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させる。

そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、1騎打ちの条件を呑ませる……か？」

雄二が頷く。

いずれにせよ、Bクラスを倒さなければ意味がないが。

雄二「明久、今日の午後のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」

明久「断る！ 雄二が行けばいいだろ」

八雲「雄二、明久を行かせるのは止めろ！ 明日の戦いに響く」

大和「そうだな。明日は明久とモモ姉、八雲の3人がキーマンになるだろうしな」

雄二「それもそうだな。なら須川たちに行かせるか」

そうして明日の戦争へ向けて準備を進めていった

## 姫の地獄（後書き）

姫路の弁当により3人の犠牲者が・・・・・

次回は登場しているマジ恋キャラの紹介をしたいと思います

## 真剣で私に恋しなさい！ キャラ紹介 1

川神

百代

173cm

誕生日 8月31日

3サイズ 91 58 88

一人称 私

あだ名 モモ姉 モモ 姉さん 百代

武器 拳

好きな食べ物 桃

趣味 人をからかつたり皆でワイワイ遊ぶ事

特技 粘滅

明久や八雲とは小学校からの知り合い。

明久を舍弟としておりいつもからかっている

昔から武家の鍛錬場所として名高い関東三山の一つ川神院の娘。別次元の強さを誇つており武神扱いされているが戦闘を楽しみ戦う相手に飢えている等精神面にまだまだ難がある。

性格は陽気。美人さも学園最高レベルだがその強さから

周囲の男子は敬遠しており、逆に女子からはエラくもてる。

成績はやる気を出せばできるがほとんどやる気を出さないのでF

クラス程度の成績

明久と同じ観察処分者である。

### 召喚獣

- ・ 武道着（黒帯）に籠手の装備
- ・ 腕輪の能力『瞬間回復』

- ・ 1回の試獣戦争中に10回発動可能

- ・ 使用すると戦争が始まる前の点数まで回復する事がで

さる。

川神

かわかみ  
一子

身長

159cm

誕生日

2月26日

・3サイズ

77 54 79

・一人称

アタシ

・あだ名

ワン子

・武器

薙刀

・好きな食べ物

骨付き肉

・趣味

鍛錬

・特技

笛を聞けば10分以内で駆けつける

元々は孤児だったが色々あり川神家の養女になる元気つ娘で、常に前向き。一緒にいるだけで人に活力を与えており友達が多い。

落ち着きがなく猪突猛進で切り込み隊長を自負。

(実際はマスクコットのようなもので皆から可愛がられている) 明久や百代、八雲は一子笛を持しており、

このホイッスルはどこでもふくと一子が10分で現れる。

義姉の百合が好きで(百合ではない)彼女のように強くなりたく日夜修練している。

召喚獣

- ・武道着(赤帯)に薙刀の装備
- ・腕輪『身体能力向上』

島津

しまづ  
岳人

がくと

・身長

188cm

- ・誕生日 8月1日
  - ・一人称 オレ様
  - ・あだ名 ガクト
  - ・好きな食べ物 いかにモテルかを研究すること
  - ・趣味 力を使うもの全部
  - ・特技
  - ・筋肉質で長身、チーム内での力仕事担当。熱血馬鹿で単純一途。
  - バカゆえにユニークで情にもろく、優しいために男からは好かれる。
  - しかし、「ゴツツイ系のため女子からは筋肉から敬遠されている。でもどうしても女子にはもてたいらしい。
  - 頼りがいがあるため年下からはすかれる傾向があるが本人が同世代、できれば年上が信条という空回りっぷり。
  - 勉強は全然出来ない。名前が「ガクト」のため名前負けともバカにされる
- 召喚獣
- ・上はタンクトップで下は普通の長ズボン
  - 武器は籠手
  - ・腕輪『筋力向上』
- 源  
みなもと ただかつ  
忠勝
- ・身長 178cm
  - ・誕生日 1月30日
  - ・一人称 僕
  - ・あだ名 ゲンさん
  - ・好きな食べ物 ご飯と納豆、味噌汁
  - ・趣味 料理・裁縫
  - ・特技 体を動かす事なら一通り

八雲と同じ寮に住んでいる。でも門下生ではないが時々体を鍛えている。

群れるのを嫌い、いつも1人で行動している。  
孤兎だったので代行業者の宇佐美（教師）に引き取られ跡継ぎになるべくイロハを教え込まれたため色々知識＆技術などを持っている。

目つきの悪さや、口の悪さなどで周囲からは不良扱いで友人は皆無。

気性は荒っぽいし、他人に対しても攻撃的だが、家事スキルが高く、意外と優しいところもあるので八雲や明久に懐かれている。のちに大和にも。

明久の料理の腕は認めている。

### 召喚獣

- ・黒の鎧を装着しており武器は大槍「蜻蛉切」
- ・腕輪『?』

直江

なおえ  
大和

やまと

なおえ

直江

なおえ  
大和

やまと

・身長

170cm

・誕生日

2月20日

・一人称

俺

・あだ名

ヤマト

・好きな食べ物

京が作ったもの以外ならなんでも

・趣味

ヤドカリ飼育

・特技

作戦を練る事

- ・幼馴染の仲間内での参謀役。陽気でおしゃべり。
- ・人ととのつながりを大事にしているため同じクラスだけじゃなく

他クラス・他学年にも知り合いが多く、色々なところに顔がいく。

勝利を得るためにには過程は問わないタイプで

何かを成し遂げるために作戦を立てるなどを好む頭脳派。

京とは恋仲の関係である。

とある事情で京と共に他県の高校に行つたが文月学園に転入してきた。

頭がいいというより、効率がいいので成績が良い（Aクラス並）現在は八雲と同じ寮で生活している（1F）

仲間以外では雄二と特に気が合つ仲

### 召喚獣

・ 戦国無双3の直江兼続のような装備。ただし兜には愛の文字はない。

武器は刀と護符

・ 腕輪『護符操作』

・ 護符を用いてビームを出したり、  
相手の動きを封じる事ができる

< 成績 > 平均

・ 現代国語	500点
・ 古典	400点
・ 日本史	400点
・ 世界史	400点
・ 現代社会	500点
・ 数学	400点
・ 物理	300点
・ 化学	300点
・ 英語	300点
・ 保健体育	200点
・ 総合科目	3700点

今後伸びる可能性あり

椎名

みやこ

川神

かずこ

・身長 155cm

・誕生日 4月13日

・3サイズ 84 59 83

・一人称 私

・あだ名 京

・武器 弓

・好きな食べ物 麻婆豆腐（デスチリソース入り）

・趣味 読書

・特技 存在感を消して周囲に溶け込む事

見た目は可愛いのだが、無口。

大和と付き合い始めてからはそれなりの人付き合いを行うようになつた。

大和に手を出そうとするものには容赦しない。

弓道部に所属しており、弓の腕前は天下五弓と言われるほど。集中した際の矢の威力、射程、貫通力ともに弓のソレでは想像できない程の性能を持つ。

かなりの辛党であり、彼女が口にするものはたいてい真っ赤。大和の世話を焼いているが、料理などは味覚が壊れているため絶対に任せられない。姫路の薬品料理並の威力をもつ。

以前罰ゲームで食べたガクトが2週間入院してしまっている。現在はハ雲と同じ寮で生活している（2F）

召喚獣

・戦国無双3の稻姫のような装備。

武器は弓

・腕輪『氷』

・氷を操る事ができる。

< 成績 >  
平均

・ 現代国語	600点
・ 古典	500点
・ 日本史	300点
・ 世界史	300点
・ 現代社会	300点
・ 数学	300点
・ 物理	300点
・ 化学	300点
・ 英語	400点
・ 保健体育	300点
・ 総合科目	3600点

今後伸びる可能性あり

### クリスティアーネフリードヒ

『義』

- ・ 身長 163cm
- ・ 誕生日 10月26日
- ・ 3サイズ 80 58 81
- ・ 一人称 自分
- ・ あだ名 ク里斯 クリ(一子のみ)
- ・ 武器 レイピア
- ・ 好きな食べ物 いなり寿司
- ・ 趣味 ぬいぐるみ収集、お風呂
- ・ 特技 説教

ドイツ軍人家系の娘。留学生としてドイツからやってきた。  
武士道精神ならぬ騎士道精神を大事にしている礼儀正しい娘。  
フェンシングをはじめ運動は得意。

真面目で人を疑う事を知らない眞っ直ぐな人だがプライドも高く負けず嫌いなところもある。

作戦を好む大和や雄一とは、良く意見が対立するが、なんだかんだって仲は良い。

時代劇が大好きで日本文化には理解が深いと豪語する。が、いまだに日本を間違つて解釈している所も多い。

頭は実はあまりよくないが勉強はキッチリしているので成績は悪くない

凛とした風格を持ちながらも親に過保護に育てられており、行動言動の端々にお嬢様らしさを晒し出している。

#### 召喚獣

- ・白のドレスを着ており、武器はレイピア
- ・腕輪『?』

	< 成績 >	平均
・ 現代国語	200点	
・ 古典	50点	
・ 日本史	450点	
・ 世界史	200点	
・ 現代社会	200点	
・ 数学	200点	
・ 物理	200点	
・ 化学	200点	
・ 英語	300点	
・ 保健体育	300点	
・ 総合科目	2100点	

今後伸びる可能性あり

## 真剣で私に恋しなさい！ キャラ紹介 1（後書き）

今回はマジ恋キャラを紹介してみました。

百代、一子、ガクトの点数を載せてないのは点数が低すぎるからです。

ゲンさんは内緒といひとで・・・・・・

## Bクラス戦（開戦）

翌日の中、試験を受け終えFクラスは最後の打ち合わせをしていた

雄一「さて皆、総合科目テスト」苦勞だつた。

午後はBクラスとの試合戦争に突入するが殺る気は充分か？

F「「「「「おおおおおおおおおお」」「」「」「

Fクラス男子の雄たけびが教室内に轟いた。

雄一「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。

その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない。

心して戦ってくれ

F「「「「「「了解」」」」

雄一「開戦前に最終確認だ。まず姫路に前線に出てもらい渡り廊下を俺達の手中に入れ、敵を教室に押し込む。姫路しつかり頼むぞ」

姫路「が、頑張ります」

雄一「野郎共、きつちり死んで来い！」

『キーンゴーンカーンゴーン』

そこで開戦のチャイムが鳴り響いた

雄一「よし、行つてこい……田嶋すはシステムデスクだ」

F「うおおおおおおおおおお」

Fクラスの雄たけびのもと、Bクラスとの戦争が開始された。

今回は敵を教室内に押し込むのが目的なのでとにかく勢いが重要となる。

今、前線ではゲンさん率いる前線部隊と明久率いる中堅部隊がほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出し戦闘中である。

今回こちらの主武器は数学。

Bクラスは比較的文系が多いのと、数学の長谷川先生は召喚フュードが広いというのが理由だ。

一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生なのだ。他にも物理や化学などの先生も連れてきている。

F「いたぞ、Bクラスだ！」

F「高橋先生をつれているぞ……」

明久（FクラスとBクラスじゃ総合点数に差があるから相手は一気にかたをつけろつもりかな）

B「生かして帰るなッ！」

物騒な台詞を皮切りにBクラス戦が始まった。

Bクラス相手にFクラスの仲間が戦いを挑んで行つた。

Bクラス	野中長男	VS	Fクラス	横溝浩二
総合	1943点			762点
Bクラス	金田一祐子	VS	Fクラス	武藤啓太
数学	159点			69点
Bクラス	里井真由子	VS	Fクラス	君島博
数学	142点			72点
なつ！？	なんて強さだ。仲間が「みのよつにやられていっ	て	いる。	
明久「ゲンさん、このままじゃやばいよ」				
忠勝「わかってる。皆、絶対1人で戦うな。3～4人で挑むんだ」				
一子「アタシが突破口を開くわー！皆は援護お願いね」				
F「了解です！！」				
前線で皆が奮闘していると				
姫路「お、遅れ、まし、た・・・。ごめ、んな、さい・・・」				
息を切らして姫路さんがやつてきた。				
B男1「来たぞ！姫路瑞樹だ！」				
明久「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」				
姫路「は、はい。行つて、きます」				

言わした「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんには数学で勝負を挑みます！」

姫路「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

早速勝負を仕掛けられてるな。向こうとしては早く潰しておきたい相手なんだろうな

B女1「律子、私も手伝う」

その後ろから、さらにもう一人Bクラスの女子が召喚を始めた。

『試験召喚！』  
『サモン

すると、お互いの召喚獣が召喚された

明久「あれ？ 姫路さんの召喚獣アクセサリーなんてしてるんだね？」

姫路「あつはい数学は結構解けたので・・・」

B女1「そっそれって！？」

岩下「私たちで勝てるわけないじゃないつ！？」

姫路「じゃいきますね」

姫路さんがそう言つと、姫路さんの召喚獣は左手を相手に向け熱線を照射し

相手を1人焼き殺し、熱線を運良くかわした相手は大きな剣で切り

を照射し

相手を1人焼き殺し、熱線を運良くかわした相手は大きな剣で切り

捨てた。

そこで、Bクラスが慌てふためいた。

一瞬で2人も戦死してしまったのだから仕方がない。

姫路「皆さん頑張つてくださいね！」

ト「モウトモドベーシ...」

F 「姫路さんサイ」「ーッ!!」

明久「姫路さん。ありがとうございます、とりあえず下がつて」

姫路「あつはい」

姫路さんを一度下させらる理由は簡単、  
いくら姫路が強いといつても何度も戦いつづければ傷を負い点数も  
下がつてしまふ。

51

忠勝「姫路が敵を倒して今、流れはこちらにある。今のうちに3人  
1組で敵を倒すんだ」

ମାତ୍ରମାତ୍ର କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

そこへ続いて

八雲「遊撃部隊！これより敵の横つ腹を叩く。俺に続けえ！！」

そこへ俺達遊撃部隊が参戦する。

明久やゲンさん達が敵を階段まで戦線を下げさせてくれたので突撃に成功した。

八雲「明久！ゲンさん！無事か」

明久「うん、僕の部隊は今のところ大丈夫だよ」

忠勝「俺のところもだ。この調子で押し切る」

遊撃部隊の突撃により今はこちらに流れが傾いている。  
今の勢いを持続させれば、このまま徐々にBクラス内に追い込める  
だろうと考えていると

秀吉「八雲と明久よ。ワシらは一旦教室に戻るぞ」

明久「え？ なんで？」

秀吉「それは、Bクラスの代表じゃが・・・『あの』根本らしい

八雲「根本って『あの』ねもときようじ根本恭一か？」

秀吉「うむ。そうじゃ」

根本恭一と根城敦といふのはとにかく評判が悪い。噂ではカン二ングの常連だとか・・・。

目的のためなら手段を選ばないらしいが用心にこしたことはないな・  
・。

八雲「なるほどな。それは戻ったほうがいいかもな」

秀吉「それでは、戻るとするかの」

明久「そうだね」

俺たちは部隊をゲンさんとクリスにまかせ一度教室へと引き返した。

## Bクラス戦～開戦～（後書き）

Bクラス戦開戦です。

皆さんの「感想・」意見お待ちしております

## Bクラス戦（人質）

八雲「……うわあ、これは酷いな」

秀吉「まさか」「いづくるとは」「」

明久「卑怯だね」

教室に引き返した俺たちを迎えたのは、穴だらけになつた卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだつた。

明久「酷いね。これじゃ補給もままならない」

秀吉「うむ。地味じやが点数に影響の出る嫌がらせじやな」

明久「ここまでやる必要があるの」

雄一「まさか、ここまでされるとはな」とすると雄一が教室に入ってきた

明久「……雄一。どうして教室がこんなことになつていることに気づかなかつたの」

雄一「Bクラスから、4時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続ければ

明日の午前9時に持ち越し。その間は試合戦争に関わる一切の行為を禁止するつていう

協定の申し込みがあつてな。調印の為に教室を空にしてしま

つた

明久「それ、承諾したんだ」

雄二「そうだ」

明久「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利じゃないの？」

雄二「姫路以外は、な。あいつらも今日の戦闘は終了だろ。う。

そうすると、作戦の本番は明日になる。

その時はクラス全体の戦闘力より、姫路の戦闘力のほうが重要となる

八雲「明久、秀吉とりあえず俺たちは前線に戻るぞ。  
向こうでも何かされているかもしれないしな」

明久「わかったよ」

俺はそう言つと駆け足で戦場に戻つて行つた。

明久「なんか、まだまだ色々やつてそうだね」

八雲「そうだな。この程度で終わるとは思えないしな。気を引き締めて行くぞ」

そういう戦場に戻つてみるとやはり問題が起きていた。

明久「待たせたね！戦況は！？」

忠勝「かなり不味い事になつてやがる」

やはりこちらにも何かやつていたのか。

ひとまず現状を聞いてみると島田さんが人質にされているらしい。

八雲「・・・ひとまず状況をみたい」

須川「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

俺たちはゲンさんに着いていき、

部隊の人垣を抜けるとゲンさんが言つてた通りの状況だった

明久「島田さん！」

島田「よ、吉井！」

B男3「そこで止まれ！それ以上近寄るなら凶暴に止めを刺して、  
この女を補習室送りにするぞ」

島田を捕らえている敵の一人が俺たちを牽制してくる。

クリス「なんて卑劣な」

あいつら、わかつていな島田に止めを刺した瞬間、お前らもすぐ補習室に送つてやるよ。

八雲「（明久少しヤツラの氣を引いて時間を稼いでくれ）」

明久「うん、わかったよ」

俺は明久にそう伝えるとある人物の元に向かった。

八雲「百代、今から言つ事を実行してくれないか？」

百代「ん？ わかった」

俺は百代にあることを伝えると

明久「総員突撃用意いーっ！？」

F「隊長それでいいのか！？」

B男4「ま、待て、吉井！ コイツがなんで捕まつたと思ってる？」

明久「馬鹿だから」

島田「殺すわよ」

B男3「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら一人で保健室に向かったよ」

明久「島田さん…」

島田「なつなによ」

明久「怪我した僕にトドメを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

島田「違つわよー。ウチがアンタの様子を見に行つちや悪いつてのー? これでも心配したんだからねツー!」

明久「島田さん、それ本当?」

島田「そつそつよ。悪い」

B男4「やつとわかつたか… それじゃおとなしく…」

クリス「じつあるのまじゅや」

一子「じつあるつもつよ」

八雲「大丈夫、策はある」

明久「総員突撃用意いーつー!」

島田「ど、どうじょつー!」

明久「あの島田さんは偽者だー。変装している敵だぞー!」

B男3「お、おこ、待てつて!」

B男4「マイツ本当に本物の島田だつてー!」

今だ!

八雲「百代、頼む」

百代「ああ！」

人質をとった連中が慌ててている瞬間に百代が相手のほうに駆け出し  
人質となっていた島田さんを救い出した。

まあ百代の力ならあいつらなんて目でもないが、

試召戦争中は故意に召喚者に攻撃してはいけないのでこんな作戦を  
とつたのだ

明久「……よし、作戦通りだ！ 皆あの卑劣なヤツラを補習室<sup>へじ</sup>に送つ  
てやるんだ！！」

明久、最初の間はなんだ？

クリス「任せろ……あんな卑怯なヤツらには遅れば取らない

人質をとったヤツラは俺達によつて袋叩きにされ鉄人によつて連れ  
て行かれた。

島田「吉井・・・

明久「大丈夫、島田さん。今のは敵の注意をそらす作戦だったんだ」

八雲「つてか島田、なに簡単に敵の罠に嵌つているんだ。

お前のおかげでこちらに被害が出る所だつたぞ。

しかも、お前は今、部隊の指揮を執つてた筈だろ？ が、

それなのに勝手に部隊を抜けるな

クリス「少し言い過ぎではないだろ？ が、

八雲「ゲンさん、百代どう思つ？」

百代「ハ雲の言つとおりだ」

忠勝「俺もハ雲の言つとおりだと想つ。

今回はたまたま部隊にあまり影響が出なかつたが、  
次回、同じ事をされたらたまつたもんじやねえからな」

ハ雲「だせうだ。クリス、島田をつれて本陣へ下がつてくれ」

クリス「ああ、わかつた」

俺がそりこつとクリスは島田を連れて下がつていった。

ハ雲「少し乱れはしたがこのままBクラス前へと突き進むぞ」

F 「……………」「……………」

## Bクラス戦 ～人質～（後書き）

余談ですが、ついにマジ恋SのOPが公表されましたね。  
早くゲームしてみたいですね。  
アニメも秋からスタートするみたいですで楽しみです

## Bクラス戦　～VS勇士～

しばらくすると

F遊1「隊長！前方で我々の部隊が」

八雲「どうした？何があつた？」

F遊1「かなりの強敵がいて我が部隊の半数がすでにやられました」

八雲「わかつた。すぐに行く」

明久「どうするの八雲？」

八雲「ひとまず現場を見てみる明久、着いて来てくれ」

明久「うん、わかつたよ」

俺が現場についてみると知つた顔がそこにあつた

八雲「三郎に焰に晴か」

そこには俺の友人の3人の姿があつた。

彼らとは中学の時からの知り合いで時々、ウチの武道場に体を鍛え  
に来ている

三郎「八雲か？何故お前がFクラスに？？まあいい。

今歯ごたえがなくて暇だったんだ。

フフフフ、少しぐらい歯ごたえがないとな」

八雲「明久、部隊を下がらせろ。あいつらは俺が相手する  
ゲンさん、悪いけど部隊の指揮頼むね」

明久「わかった。僕も手伝うよ」

八雲「悪いな」

百代「私もやるぞ」

晴「Bクラス3勇士あまご」が1人、尼子あまこ 晴はる、参上！」

焰「大友はBクラス3勇士あおとも」が1人、大友おおとも 焰ほむらぞ」

三郎「俺はBクラス3勇士いしだ」が1人、石田いしだ 三郎さぶねつ」

三・晴・焰「「「試獣召喚!サモン!」！」」

八雲「Fクラス遊撃部隊隊長、真田八雲！押してまいり！」

明久「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。いきます」

百代「Fクラスの川神百代だ、楽しませてくれよ」

八・明・百「「「試獣召喚!サモン!」！」」

化学

Bクラス

V S

Fクラス

石田三郎	251点	真田八雲	342点
尼子晴	211点	吉井明久	132点
大友焰	261点	川神百代	52点

八雲「百代は晴を頼む。つてかもう少し点数上げようぜ」

百代「う、うるさい！さてあの子が私の相手だな」

明久「じゃあ僕は誰相手したらいい？」

八雲「じゃあ三郎を頼む。近接相手のほうがやりやすいだろ」

明久「わかったよ」

八雲「じゃあ、散開！」

八雲 VS 焰

ドオン ドオン

F「なんだ！？あの威力は！？」

焰「うむ、大火力！コレが大友の実力ぞ！！」

焰の武器は大筒で、かなりの威力の砲術を撃つ事ができる

焰「さすがのハ雲もこれで」

ハ雲「甘いっ！」

焰「なつ！？」

ガギーン

焰は何とか俺の攻撃を受け止めた

焰「何故じゃ！？あれほど砲術したのに生きておるじゃとー？」

ハ雲「さすがに全部はかわせなかつたが、数発覚悟すれば怖くない！  
さて、これで俺の武器の間合いだな」

今は鍔迫り合い？しているので

焰お得意の砲術は撃つ事ができない

ハ雲「その武器の弱点は接近されたらなす術がなくなることだな。  
現に今、砲術を撃つ事ができないだろ」

焰「うつ、じやが、それはハ雲とて同じだろ。今の状態じや槍を振  
るつ事はできぬ」

ハ雲「おい、焰、何か忘れてないか？　俺は槍だけじゃないぜ！」

俺は槍を手放すと焰の間合いに入り打撃による連打を浴びせた。

焰「ふ、武器を手放すじやとー？」

八雲「俺の家は武道の家だぜ、お前時々習いに来てるだろ？  
なら近づいたらすべて俺の間合いだぜ」

焰「つ！」

八雲「いくぞ、真田流奥義『烈火拳』！！」

俺は焰の召喚獣に突きによる連打を浴びせる。

真田八雲 261点 VS 大友焰 0点

八雲「俺の勝ちだな」

焰「うう、負けた……」

八雲「さて皆はどうなったかな？」

明久 VS 三郎

三郎「お前が相手か、俺を楽しませてみる」

三郎の武器は刀、僕の武器は木刀だ。  
点数差もあるから長期戦は不利だね。・・・・・なら

明久「行くよッ」

僕は一気に駆け出し距離をつめる。  
そこで連續で攻撃をしかける

三郎「ほう、なかなかやるな」

三郎は僕の攻撃をかわしていく。

その後、お互に攻撃し、かわしていくの繰り返しが続く

三郎「これでどうだ」

相手は3段突きの後に刀を振り下ろす。

僕は何とか攻撃をかわし、相手の腹に攻撃を入れる

三郎「グッ！」

明久「今だつ！！」

相手が先ほどの攻撃でひるんだので僕は畳み掛けるように攻撃する。

明久「トドメつ！！」

最後に僕の木刀が三郎の召喚獣の喉に突き刺さる

石田三郎 0点 VS 吉井明久 31点

三郎「ば、馬鹿な。この俺が？」

明久「ふう、危なかつたよ。石田君だけ凄い強いね」

三郎「三郎でいい」

明久「え？」

三郎「名だ！俺はお前に負けた。次は必ず勝つてやる」

明久「うん、わかったよ。三郎、次、戦えるのを楽しみにしてるよ」

百代 VS 晴

百代「おーおい、どうした攻撃しないのか？」

晴「つ！」

百代の拳の連打によつて晴は攻撃できないでいた。  
それもそのはず、百代は観察処分者なので明久同様、操作がうまい。  
そのおかげでただの拳による連打だが、それが嵐のように威力があり  
手数が多い。反撃に移ることができないので  
しかも晴の武器がかぎ爪なので百代と同じ間合いのも原因の一つ  
である

百代「よく耐えられるな。なら褒美だ。受け取れ！」

川神流奥義『無双正拳突き』！！

晴「え？ つ、うわあ……」

百代の攻撃で何とか耐えていた晴の召喚獣は吹き飛ばされた。

尼子晴 0点 VS 川神百代 52点

八雲「皆、終わつたみたいだな」

百代「あの子と一緒に遊びたいな」

八雲「……百代言つておくが晴は男だぞ」

百代「何!? あんなに可愛いのに」

晴「私は男だ!...」

秀吉「ワシの他にも同じ境遇のものが居るとわの」

晴「お前もか?」

秀吉「そうじや、ワシは木下秀吉じや。よろしく頼むぞい」

晴「私は尼子晴だ。よろしくな」

向ひでは同じ境遇の2人に親近感が沸いたようだ。  
・・・・・ もう少し2人には優しく接したほうが良いかな・・・・

三郎「でも驚いたぞ! お前がFクラスにいるとはな

八雲「まあ色々あつてな。つてかお前ならAクラスに行けただろ」

三郎「もちろんいけるが、どうせAクラスには九鬼がいるだろ。  
あいつと同じクラスなんて一緒にいられるか」

三郎は九鬼に対して毛嫌いしているからな。

八雲「そうか、で焰と晴は?」

焰「大友は大将についていくだけじゃ」

晴「私もだ」

焰と晴と三郎は小学校からの仲じしく、  
焰と晴は三郎の事を大将と呼んでいる。

八雲「また、たまには武道場に顔出せよ」

三郎「ああ、己を鍛えるのも必要だからな」

晴「ああ、わかつたよ」

焰「ああ、行く時は連絡する」

八雲「ああ、わかつた」

三郎「では、俺達はこれで、今から補習室に行かないといけないからな」

三郎は真面目だな。自分から地獄に行くなんて  
するべく

忠勝「後は俺達がやつておくからお前らは休憩でもしてろ」

ゲンさんはそういうと一子たちを連れて戦いに戻つていった。  
さすがゲンさん。口は少し悪いけど優しいな

そして、ゲンさん達がBクラス前まで攻め入り今日の戦争は終了した

## Bクラス戦 ～VS3勇士～（後書き）

マジ恋Sから 石田三郎と大友綱と尼子晴の3人を出してみました  
何かおかしい点や改善点がありましたら教えてください

## Bクラス戦～根本の暗躍～

協定通りBクラスとの試合戦争は16時で一度やめ、戦況をそのままにして明日の午前9時に持ち越しどなつた。

一応予定通りBクラス前まで進撃できたので明日はそこからとなる。

今は明田の事で話しかけている所だつた。

すると、マッリニーがやつてきて話に加わつた。

今日の戦争ではマッリニーは戦線に出ず情報収集を任務としていた。

雄二「Cクラスが試合戦争の用意を始めているだと? 相手はAクラスか

- ・いやらしい連中め
- ・いやそれはないだろつから漁夫の利を狙うつもりか・

つまり、この戦争の勝者と戦うつもりなのか。疲弊している相手ならやりやすいだろつしな

明久「雄二どうするの?」

雄二「そうだな・・・。Cクラスと協定を結ぶか。

Dクラスを攻め込ませるぞと脅せば俺たちに攻め込む気もな

くなるだろ」

明久「それに、僕らが勝つなんて思つてもいないだろしね

雄二「よし、それじゃ今から行つて来るか

大和「念のためモモ姉と秀吉、姫路、クリスここに残つてくれ」

姫路「はい、わかりました」

秀吉「なんじや？ワシは行かなくて良いのか？」

大和「秀吉の顔を見られると万が一の場合にやうりつとしている作戦に支障があるからな」

雄二「そうだな。秀吉は待機しておいてくれ」

秀吉「よくわからんが、雄二がそいつののであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。まあ雄二の事だ何か策があるのであらうな。

クリス「自分も行きたいのだが」

大和「クリスは俺達の秘密兵器だ。だから相手にあまり知られたくない」

クリス「そ、そういうことなら自分も待機しておく」

大和、今のは嘘だろ

明久「じゃ行こうか。ちょっと人数が少なくて不安だけど」

秀吉と姫路、クリス、百代を残して、

俺、明久、雄二、ムツリーニというメンバーでクラスに向かう

島田「あれ？吉井に坂本？どこが行くの？」

廊下に出ると島田と須川、近藤に会った

八雲「島田と須川、近藤。ちょうど良い。このクラスまで付き合つてくれないか」

まさかとは思うけど、念のためにボディガードは多いほうがいいだろ？

雄一がやられたら意味がないからな

島田「んー、別にいいけど？」

須川「ああ、俺も大丈夫だ」

近藤「俺もいいぜ」

秀吉「急がんとこのクラス代表が帰つてしまつぞい」

明久「うん、そうだね。急がないと」

こうして更に島田さんと須川、近藤を加えた7人でこのクラスへと向かう事になつた

雄一「Fクラス代表の坂本雄一だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄一がそこにいる全員に告げる。

Cクラスにはまだかなりの人数が残っていた。ムツリーノの情報通

り漁夫の利を狙つて

試召戦争の用意を始めているのだ。

小山「私だけじゃ、何かよつかしら?」

俺たちの前に出てきたのはCクラスの代表の小山さんだった

雄一「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか?」

小山「クラス間交渉? ふうん・・・・・・

小山さんは雄一の言葉を聞いてなんだかいやらしい笑みを浮かべで  
いる

八雲（何か嫌な予感がするな）

雄一「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ねえ・・・・・。どうしようかしらね、根本君?」

小山さんは振り返り、教室の奥にいる人たちに声をかけた  
するとそこには、Bクラスの根本いた

根本「当然却下。だつて必要ないだろ?」

それに酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。

試召戦争に関する行為を一切禁止したよな?

先に協定を破つたのはソッチだからな? これはお互い様、だ

よな

根本が告げると同時にその取り巻きが動き出す。

その後ろには先ほどまで戦場にいた長谷川先生の姿があった

B男5「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」「

須・近「「させるか！Fクラス須川（近藤）が受けて立つ…試験召喚！」」

Bクラスが雄二に攻撃を仕掛ける前に、間一髪で須川と近藤が身代わりとなるファインプレイを見せてくれた。

明久「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスの

雄二「無駄だ明久！あいつらは条文の『試験戦争に関する行為』を盾に

しらを切るに決まっている。だから、ここは逃げるぞ」「

戦闘を行っている須川と近藤に背を向け、俺たちはCクラスから離脱しようと駆け出す

根本「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後から根本の指示と複数の足音が聞こえる

はつきり言つてマズイな。

今の状態で戦うのはまずい。

雄二とムツツリー以外は今日の戦争で点数を消費している

俺は明久と目線を合わせると明久も俺と同じ考えらしい。

明久「雄一！」

雄一「なんだ明久！」

明久「ここは、僕と八雲が引き受ける！雄一は逃げてくれ」

俺たちはその場に立ち止まり振り向いて雄一に向かつて親指を立てた

雄一「……わかった。ここは2人に任せる」

雄一が俺たちの要望に応じる。さすが雄一だな。

感情に流されず、今必要な処置を正しく把握している。

康太「…………（ピタッ）」

明久「いや、ムツリーも逃げてほしい。明日はムツリーが戦争の鍵を握るから」

一瞬立ち止まつたムツリー。気持ちはありがたいが明日は重要な役割があるはずだ。

ここで失うわけにはいかない。

康太「…………（グッ）」

ムツリーは俺たちに親指立てて走り去つて行つた。

八雲「……さて、時間を稼ぐぞ明久」

明久「うん。僕に考えがあるんだ。僕だって補習室に行きたくないしね」

八雲「ほお～ならお前の策を信じてやるよ」

B男6『いたぞつ！Fクラスの吉井と織村だ』

B男7『ぶち殺せ！』

正面から追つ手がやつてきた。長谷川先生も一緒に。

明久「Bクラス！そこまで止まるんだ」

相手の気勢を削ぐように、明久は強い口調で呼び止める

B男8「いい度胸だ。たった2人で食い止めようつてか？」

Bクラスからの追つ手は5人ほどいる。  
さて、明久の策とやらを信じてみますかね

明久「その前に長谷川先生に話がある」

八雲（長谷川先生に？）

長谷川「なんですか、吉井君？」

明久「Bクラスが協定違反していることはご存知ですか？」

長谷川「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはFクラスのようですが」

八雲（まあ、あの根本のことだからうまく言つているだらうしな。

さて明久の考え方ってヤツに期待するかな）

明久「・・・・・万策、尽きたか・・・・・」

八・B『こいつ馬鹿だあーーー！』

なんだよあんなの全然策じやないだろうが、  
コイツに期待した俺が馬鹿だつた・・・〇rz

なら仕方ない。まだ勝負は申し込まれていないしな。

俺は懐からあるものを取り出すとそれを地面にたたきつけた。

B男6「ゲホッゲホッ。な、何だコレはーーー！」

B女4「前が見えないわ」

俺は今さつき煙球を投げたのだ。これでにげられるな

八雲「明久逃げるぞー！」

明久「う、うん」

俺達はそこで戦闘をせずに教室へと戻つていった。  
さすがに敵も教室までは攻めてこず撤退していくた

明久と教室に戻ると

明久「ただいま！」

姫路「あ、吉井君！無事だつたんですね！」

戸を開けると姫路が明久に駆け寄つてきた。

明久「うん。なんとかね」

雄一「お。戻つたか。お疲れさん」

秀吉「無事じやつたようじやな」

一子「大丈夫みたいね」

八雲「ただいま。ああ大丈夫だよ」

雄一「さて、お前ら」

明久「ん？」

その場にいる全員を見渡して雄一が告げる

雄一「こうなつた以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、

正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい

まあ向こうもそれが狙いだつからな。俺たちが勝つたらまず間違

いなく攻めて来るだろうな

そこで皆がどうするか悩んでいると

大和「心配するな。向こうがその気なら二つにだつて考えがある」

明久「考え方?」

雄二「ああ。明日の朝に実行する。田には田をだ」

この口はそれで解散となつた

Bクラス戦 ～根本の暗躍～（後書き）

本日2話目の更新です。

## Bクラス戦～明久奮起する～

翌日

雄一「今から昨日言っていた作戦を実行する。」

一子「作戦？」

明久「でも開戦時間はまだだよ？」

大和「Bクラスじゃないクラスの方だ」

明久「あつなるほど。それで何するの？」

雄一「秀吉にコレを来てもらひ」

そつ言いだすと雄一はそばにあつた紙袋から女子の制服を取り出した  
・・・とこりで雄一。それをどうやって手に入れたんだ？

秀吉「別にかまわんがそれでどうするんじや？」

雄一「秀吉には『木下優子』としてAクラスの使者を装つてもらひ」

木下優子つて言つてこの前の女の子か。確かに秀吉によく似てたな。

雄一「とにかく秀吉用意してくれ」

雄一が秀吉に女子の制服を秀吉はその場で着替えを始める  
着替えはとても早くなれているみたいだな。秀吉は一瞬で着替えを

終わらせた

八雲「秀吉、着替えるの早いな」

康太「…………着替えるなら言つて欲しかった」

ガクト「なに…?『眞を撮れなかつたのか!』

明「しつかり目に焼きつければ良かつた」

ムツリー「やF男子（俺と雄）」、ゲンさん以外）は泣きながら床を叩いていた

写真を撮れなかつたことがよほど悲しかつたのである。

島田「秀吉はずるいわ」

姫路「秀吉君は大胆すぎます」

なんか姫路さんと島田さんが言つていたが無視するとしよう

秀吉「早く着替えるのは役者の基本じゃからの」

八雲「それでもこいで着替えるなよ。一応女子も居るんだから」

秀吉「む、それもそうじやな。以後気をつけるとしよう」

雄「おい、さつさと行くぞ。時間がなくなる」

明「僕も行くよ」

一「アタシも行くわ！」

クリス「自分もだ」

雄「じゃあ来たい奴は行くぞ」

そして、雄一達はCクラスへと向かった。俺は昨日の件があるので一応残っている。

そして午前9時よりBクラス戦が開始された

俺たちは昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

秀吉「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戰線を拡大させるでないぞ」

秀吉の指示が飛び

雄一曰く『敵を教室内に閉じ込める』ということ。

そういうわけで指示どおり今は敵を閉じ込めている

八雲「皆、絶対一人で戦うな！ 周りと協力して敵を叩くんだ」

秀吉「勝負は極力単教科で挑むのじゃー補給も念入りに行づんじゃ

！」

八雲「無理をしそうなよ。危ないと感じたら下がるんだ」

現在は俺と明久、秀吉、姫路、ガクト、京の6人で指揮を執つている。

百代とゲンさん、一子、クリス、島田は昨日点数をかなり消費したので回復試験中である。

大和は、雄一の護衛＆作戦を考えている。

そして部隊を2つにわけており、左翼を明久と秀吉、姫路、右翼を俺と京、ガクトで分けて指揮していたのだが、

先ほどより姫路の様子がおかしいので京に左翼に行つてもらい、右翼は俺が指揮している。

え？ ガクトはつて？ あいつが指揮できるわけないだろ（笑）

しばらくして

F「左側出入り口押し戻されています！」

F「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む」

そう聞こえ左側を見てみると少しづつ押し戻されている。

Bクラスは文系が多いので強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破されてしまう

明久「姫路さん、左側に援護を！」

姫路「あ、そ、そのつ……！」

先ほどから姫路の様子がおかしく動いてくれない

秀吉「今ままではやばいの」

京「私が行く。明久と秀吉は私の援護を」

明・秀「『解』」

京「椎名京、古典で勝負を仕掛けます『試験召喚!』」

2 - F	椎名京	VS	Bクラス	モブ × 3
古典	430点			平均 190点

B「なんだ!?あの点数は!?」

B「俺達が敵う訳ねえじゃねえか!」

京「行くよ!」

ヒュン ヒュン ヒュン

京が相手に向かつて弓を撃つ。その矢が見事に相手の頭を貫く

B「相手は『矢だ。近づいたらこいつのものだ!』」

Bクラスの1人が京に斬り込んで来る

明久「そつはさせない!」

キン

すかさず明久が間に入つて攻撃を食い止める。

秀吉「仕舞いじゃ……」

明久が敵の攻撃を食い止めてるスキに秀吉が相手の首をはねる。秀吉は明久やゲンさんといつも前線で戦つてるので操作技術が上がつてるので、皆よりは上手く操作できるようになつたのだ。

明久「大丈夫京？」

京「大丈夫」

秀吉「明久よ。例のアレを頼むのじゃ」

明久「了解」

明久は返事すると共に古典の竹中先生に近づいていき耳元で

明久「…………ジラ、ずれでますよ（ボソッ）」

竹中「ツ！？」

頭を押されて周囲を見渡す竹中先生。

いざと言つ時の為の脅迫ネタの一つだ。

竹中「少々席をはずします！」

狙いどおり竹中先生がその場を離れ古典のフィールドが解除される

秀吉「先生、物理のフィールドお願いするのじゃ」

そこまで古典から物理へとフィールドが変わった

明久「これで少し安心だね」

ひとまず左翼は大丈夫そうだな。と俺が安心していると

F「隊長…」

八雲「なんだ？…どうした？」

F「右側の出入り口が数学から現国に変更されました！」

八雲「数学教師の木内先生はどうした？」

F「Bクラス内に拉致された模様です」  
やばいな。理系から文系の科目に切り替えられたか

八雲「誰か教室まで戻つて援軍を呼んできてくれ！…  
やつは下がれ！…」

F『了解』

八雲「第2部隊行くぞ…！」

F『おおお…』

八雲「出撃する前にあえて言わせてもらひつぞー皆、死ぬなよ

F『はつ…』

八雲「突撃！！」

F『おおおーー..』

・・・でもこのままじゃやばいな。自力の差で破られるな。  
左翼の方もきついだらうしな

八雲「・・・姫路こちらの援護頼めるか？」

姫路「は、はい。行きま・・・あつ・・・」

姫路さんが返事の途中でつむいでしまった。  
先ほどからずっとこの調子だ。何かがおかしいな。  
そう思いBクラスの教室内を覗いてみると、  
窓際に腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者である根本の姿があつた。  
そこでよみやく気が付いた。

おそらく姫路さんはあいつらに何か弱みを握られているんだらう。  
だがどうする。今の状況ではこちらは何もできない。  
すると明久から声をかけられた

明久「八雲、秀吉、京！ちょっとここを任せるとよ！」

八雲「え？」

秀吉「どうしたんじや明久？」

明久「ちゅうとね。姫路さん調子が悪いんだつたら下がつて良こよ

姫路「・・・はい」

おそらく明久も気づいたのだろう。なら明久に任せるとするか

ハ雲「わかった。こつちは任せろ」

京「こつちは任せて」

ガクト「行つて来い明久！」

明久「じゃあ頼むよ」

明久はそう言うとFクラスの教室へ向かつて行つた。

秀吉「どうしたといつのじゃんつか？」

ハ雲「何か策があるんだろうよ。秀吉、今は戦場に集中しよ」

今の中久の顔は久しぶりだな。頼れる時の顔だ。

こういう時の明久は頼れる。さて、明久が戻つてくるまで粘りますか

秀吉「ここが踏ん張りどころじゃ。皆頑張るんじゃ」

秀吉が皆に指示する

俺も明久に答えるため隊を指揮する。

→ SIDE IN 明久

明久「雄二、大和！」

雄二「ん？ 明久か。脱走ならチョキでしばくぞ」

大和「どうした？」

明久「話がある」

雄二「……とりあえず聞こつか」

Fクラス教室にて。皆が回復試験を受けている中で、作戦について話し合う雄二と大和。

明久「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

雄二「……お前に何があつたんだ?」

大和「まあ事情はわからないが何かあるんだろう

雄二「まあいいだろ」

明久「ありがとう……それともう一つ、理由は言えないけど姫路さんを前線から外してもらえないか?」

大和「……理由を言えない事は置いておくとしても、どうしてもか?」

明久「うん」

雄二「……条件がある」

明久「何?」

雄二「明久、お前が姫路の担う予定だった役割を果たせ。どうやっても良いから、必ず成功させろ」

明久「それは誰か人を使つても大丈夫?」

雄二「まあ良いだろう。だから必ず成功させろ」

明久「わかつた。大和、力を貸して欲しいんだけど」

大和「…………わかつた」

雄二「ちなみに誰が必要だ?」

明久「真田ファミリーの皆」

ちなみに真田ファミリーとは、八雲をキャップとしていて、そこに  
明久、百代、一子、  
大和、京、ガクトの7人である。一応勝手にゲンさんを加えている。  
本人は承認してはいない。

雄二「わかつた。よし、皆そこで一度試験を終えて敵に攻撃を仕掛け  
ける!!

川神姉と一子、あと源は明久と大和についていけ、残りはB  
クラス前へ」

大和「じゃあ作戦を伝える。しつかり聞けよ」

明久「うん」

## Bクラス戦 決着

しばらく教室前で攻防戦を続けていると明久が戻ってきた。  
そこには大将である雄一も一緒にいた。

明久「ごめん。待たせたね」

秀「遅いのじや」

八雲「待ちわびたぞ明久。どうするんだ？」

俺達は明久の策を聞く。

八雲「わかった。なら俺達に任してくれよ。

秀吉「やうじやな。ならばいりませワシらに任せぬのじや」

クリス、ここは自分たちに任せてくれよ。

明久「じゃあ、八雲と京、ガクトは大和の指示通りにお願い。  
姉さんは僕と大和と一緒に来てくれる」

八雲「わかつた。行くぞガクト」

ガクト「了解！俺様の力見せてやるぜ！！」

京「大和のために頑張る」

百代「よし、やつてやる」

### 明久SIDE（Dクラス）

現在、僕はBクラスの隣にあるDクラスに来ている。

今、Dクラスの人たちは雄一の作戦のよりBクラスの室外機を壊しに行っているので

不在なので、この場には、僕と姉さん、大和そして英語の遠藤先生だけである。

大和は窓側にいて外を見ている。姉さんは精神統一をしている。作戦開始の15時まであと数分

八雲SIDE  
グラント

今、俺とワニ子、ゲンさん、ガクトはグランドに出ている。京は弓を持ち集中している。京は弓道部なので弓矢を所持しているのだ。

そして俺達はストレッチをしている最中だ。作戦開始まであと少し

Bクラス教室前

根本「お前らしい加減あきらめろよな。

教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないって  
の」

雄一「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギップアップか？」

根本「はあ？ギップアップするのはそつちだろ？」

雄一「無用な心配だな」

根本「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

雄一「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくれ」

根本「けつ！口だけは達者だな負け組み代表様よお」

雄一「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな」

根本「それにこの暑さはなんだ。Hアコンきてんのか？おいつ窓全部開けとけよー」

雄一は時計を見て時間を確認する

雄一「…………態勢を立て直す！一旦下がるぞー！」

根本「なんだよー散々ふかしておきながら逃げるのか！  
全員で一気に置み掛けろー！誰一人生きて帰すなー！」

雄一「頼むぞ真田ファミリー！」

Dクラス

時間は15時になつた。作戦開始だ。

「久姉さん時間だよ！」

僕は姉さんに、大和は窓の外に向かって合図を出す。

ド「木」――――――――――

明久が百代に指示を出すと百代はBクラスとDクラスとの間にある壁に向かつて走り出し、壁を殴りつけた。

あけた。

明久一くたべれえ根本！！」

僕と百代は姉さんがあけた穴を通りBクラスへと進入する

グランド

京「大和から合図が来たよ」

一子「よし、ガクト！たつちゃん！お願いね」

ガクト「おう！任せろ！…」

忠勝「こっちも大丈夫だ」

八雲「2人とも頼むな、京も援護よろしく」

京「任せて」

そういうと俺と一子はゲンさんとガクトに向かって走り出す。ゲンさんとガクトはバレー・ボールのレシーブの体勢をとる。そこへ俺達が走つて行き……

一子「そりやつ！…！」

俺はゲンさんのワン子はガクトの腕を踏みきり台として跳躍した。

忠・ガ「飛べ！…！」

2人は俺達の跳躍にあわせて腕を跳ね上げた。

その方向はBクラスの窓めがけて……

途中、下のクラスの生徒や先生が俺達を見ていたが気にしない

そこへ京がBクラスの窓を矢でぶち抜く！

パリイ——ン

そこへ俺とワン子がBクラスへと乗り込む。

Bクラス

ド、ゴオ――――――――――――――

物凄い音と共にBクラスとロクラスとの間の壁から明久たちが出てくる

根本「ンなッ！？」

明久「くたばれ！――根本！」

根本「壁をぶつ壊すとかどういう神経してんだ！？」

百代「遠藤先生！私が――」

B「Bクラス近衛部隊が受けますッ！――

明久「こ、近衛部隊……」

根本「はッははッ！残念だつたな。驚かせやがつて――」

大和「まだ、安心するのは早いぜ」

パリイ――――

そこへ窓が何かに突き破られた。そこには天井に刺さつた弓矢があつた。

するとその後、

スタッフ　スタッフ

八雲「真田八雲！推参！！」

一子「川神一子！參上！！」

俺とワニ子が窓から乗り込む

根本「今度は窓から乗り込んでくるだよー！」

B「Bクラス近衛部隊が受けますッ！！」

根本「はっははー！2度田の奇襲も無駄に終わったな」

根本までの距離は約20m・・・。

俺たちの周りには近衛部隊。全員に取り囲まれた以上

今、根本に近づく事はできない・・・・だが目的は達した。

ここで少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によつてテストの結果に特徴が現れるんだが・・・  
例えば、数学の木内先生は採点が早い。

世界史の田中先生は点数のつけ方が甘く、

数学の長谷川先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生は多少の事は寛容で見逃してくれる。

じゃあ保健体育の先生は、採点が早いわけでも甘いわけでもなく召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である

すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立つた。

スタッツ

ム「・・・・・Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムツリイーと保健体育の大島先生だ

根本「き、キサマは・・・・・！」

ム「・・・・・Bクラス根本恭一に保健体育で勝負を申し込む」

根本「ムツリイーイーイー！」

ム「サモン試験召喚」

Fクラス	土屋康太	VS	Bクラス	根本恭一
保健体育	441点		203点	

ムツリイーの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

Bクラス戦 ～決着～（後書き）

連続での3回の奇襲攻撃でした。

## Bクラス戦（戦後対談）

秀吉「お主らは随分と思い切った行動にじゅつたの?」

雄一「本當だな、素手で壁をぶち破るとか、3階にある教室まで窓をぶち破って

乗り込んでくるとは誰にも発想できないしやれねえぞ」

八雲「それが俺達真田ファミリーだぜー！」

百代「そうだ、力の入れ具合で壁なんて簡単に壊せるぞ」

一子「さすがお姉様ー！」

明久「一子も八雲も凄いよね。まさかグランドから3階の窓まで飛んでくるなんて」

一子「えへへへ、照れるなあ／＼／＼／＼

八雲「ゲンさんとガクトがいたからだぜ」

ガクト「俺様の力ならコレ位余裕だぜー！」

忠勝「普通はつまらないだるー！れくらじやないとな」

八雲「普通はつまらないだるー！れくらじやないとな」

大和「八雲らしいな」

雄一「さて、それじゃ嬉し恥ずかしの戦後対談といくか。な、負け組代表?」

そして雄一は根本の前に立つて言った。

雄一「本来なら設備を明け渡してもらいたいお前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが

特別に免除してやらんでもない」

雄一がそう言いだすとBクラスのメンバーはざわつき始めた。  
Fクラスのメンバーにはあらかじめ伝えてあるので動搖は無い。

根本「・・・条件はなんだ」

雄一「条件? それはお前さん次第だ」

根本「お、俺たちだと?」

雄一「ああ、お前らには散々好き勝手やつてもうたし正直去年から  
目障りだつたんだよな。そこでお前らBクラスに特別チャンス  
だ。」

Aクラスに試合戦争の準備ができるといふ言ひ方をして来い。

そうすれば今回は設備は見逃してやる。

ただし宣戦布告ではなく戦争の意志と準備があるだけ伝えるん

だ

根本「・・・それだけでいいのか」

雄一「あ」

八雲「それと」

雄一「何か言う前に俺が遅つた

八雲「今回の戦争で随分やつてくれたからな。その分も入れて・・・  
そうだなあ・・・

根本がコスプレして今さつき雄一が言った通りにしてくれた  
ら良いよ」

雄一「お、おい」

八雲「明久、それでどうだ?」

明久「それだけじゃぬるいよ、その後は写真撮影会ぐらいしないと  
ね」

百代「おっそれは面白そうだな」

ガクト「それはいいな。おいムツツリーー綺麗に撮つてやれよ」

康太「・・・・・・任せろ」

雄一「まあ、いいか」

根本「ばつ馬鹿なことを言うな!—この俺がそんなふざけた事を・・・

・ツー

B 「…………Bクラス全員で必ず実行しようつー……」

B 「任せて必ずやらせるからー。」

B 「それだけで教室を守れるならやらなっては無いなー。」

どんだけコイツは人望が無いんだ。まあいいけど

雄一「んじゃ。決定だな」

その後、根本は女装させられた状態でAクラスに行き、ムッリーニによる撮影会が行われた。

おそらく根本は一生忘れられない素敵な思い出を背負う事になるだろ、ひ。

そして、俺達ファミリーは職員室で先生方の親身な指導を受けたのは言つまでも無いだろ、ひ。

ちなみに根本も信用は地に落ちたので

今、Bクラスは三郎がほぼ代表として動いているよ、ひ。

## 真田寮での生活（一）（前書き）

さて今回はウチにある寮での生活を紹介するよ

## 真田寮での生活（1）

「 SIDE IN 大和 」

大和「ん、んん・・・・・？」

俺は何か違和感を感じ目を覚ます。

京「おはよう大和。そして愛している」

俺の目の前に京の姿があった。

そして京はいきなりキスをしようとして迫ってきた。

ガツ

大和「おはよう京。好意はとても嬉しいが今は自粛してくれ。  
隣の部屋には八雲たちがいるからな」

俺は京の頭を掴みそれを阻止する。

京「・・・・・ちつ惜しい」

大和「惜しくない。朝から襲わないでくれる?」

京「朝といえば朝」はんできてる

大和「ん、了解」

京「私自身が朝ごはんという説もある」

大和「着替えるから出て行ってくれ」

大和がそういうと京は一度大和の部屋を出た。

京「…………」

チラツ

大和「出てけっ！――」

＼ SIDE OUT 大和 ／

大和「おはよっ」ざこいまーす」

大和が眠そうな顔で食堂に入ってきた。

クリス「おはよっ」

黛「お……おはよっ」ざこま……す！」

黛さんは今年から文月学園に入学した1年生だ。うちの寮で生活をしている。

忠勝「チツー起きるのが遅えんだよテメエは」

ゲンさんがあさに「」飯をつぎながら「」

大和「ゲンさん、おはよつ今日も元氣やうだね」

八雲「おはよう大和」

大和「おはよう八雲。今日も朝からランニングに行つたのか?」

八雲「ああ、今日は1年生の麗さんと一緒に走つたんだ」

大和「へえ~」

八雲「じゃあ、食べよつぜ。おつ今日は麗子さんのおしん」付だ。  
これおいしいんだよな」

大和「俺もコレすつげえ好き」

京「じゃあ私の分をあげるのさ。これで好感度がよりアップ?」

大和「京カスタム(超激辛)の食品なんかくえません」

京の料理は唐辛子やタバスコなどによつて真つ赤に染まつていた。

八雲「ねえねえゲンさんの1個ちょうどいな」

忠勝「あ!/?ふざけてんじやねえぞ!

何だつて俺がテメエなんかに物やんなきやいけねえんだ?」

クリス「おい、なんだ朝から喧嘩か? 感心しないぞ」

黛「ハラハラ」

今のをみてクリスと黛さんがハラハラしている。

忠勝「ちつ、ほらやるよー勘違にするんじゃねえぞ。  
ガタガタうるせえから恵んでやるだけだ」

八雲「わーい。ありがとうゲンさん！」

俺はゲンさんからおしんこを一個もらつた

八雲「で、皆。どうよ真田寮は？何か不憫な事があるか？」

大和「ああ、快適に暮らしているよ。ただ京が突然入つて来るんだが  
どうにかならないか？」

八雲「それは彼氏であるお前の役目だな。

ゲンさんにクリスに黛さんは？」

忠勝「不備はねえな。ただもう少し静かにしてくれ」

八雲「それは無理だね。ゲンさんも一緒に遊ぼうぜ」

忠勝「なんで俺がテメエラなんかと」

八雲「まあ今はそれでいいや。

クリスと黛さんは？」

黛「わ、私は、だ、大丈夫、です」

クリス「和風の庭もあるし温泉もある日本好きの自分にひとつはとてもいい寮だ」

ちなみに寮は全部で10部屋あり、

1Fは男子、2Fは女子となつてゐる。2Fには男子禁制である。女子からの許可があれば2Fに上がつても良い事になつてゐる。そして寮の責任者は俺ということになつてゐる。・・・・・ただしこの寮だけだが。

部屋は 101はゲンさん、102は大和、103は俺、104は明久

105は真田ファミリー専用部屋、

201は京、202はクリス、203は黛さん、204は川神姉妹

205はあきとこう風になつてゐる。

104と204は時々明久や百代と一子が泊まつていくので今は部屋に空きがあるので使つてゐるのだ。

105は他の部屋の比べると少し広いのでファミリーの集まり場になつてゐる。

寮には温泉つきで1Fと2Fにそなえついてゐる。

また庭は和風の庭にしてゐる。

基本的寮では、自由だが風呂は交代で掃除をしている。

食事は月～金の平日はガクトの母親の麗子さんが作ってくれるが土日は自分で作らないといけない。

また、門限はない。

ただし生活費（電気代など）は毎月俺に払つてもらつてゐる。

するとそこへ

ガクト「よお俺様が来てやつたぜーー！」

大和「おっす！ガクト」

八雲「もひそんな時間か」

明久「皆、おはよつ」

大和「じやあそろそろ行くか」

俺達が席を立つと

黛「あつあのー」

八雲「ん？」

黛「……あ……あのつ、そのつですね……わた……も……」いっしょ

黛さんが凄い形相で俺達に話しかけてきた

ガクト「…………」

大和「な、なに？」

黛「あ……ひ……ひべ……な……なんでもあいつませんっ！すみませんでしたーっ！」

黛さんはいつも食堂から出て行った

大和「俺、あの子にいつも睨まれてるんだけど」

クリス「何か気に障ることでもしたのではないか？」

ガクト「俺らだけで騒いでいるのが気に入らなかつたんじゃね？」

明久「そうかな？」

八雲「…………まつとりあえず学校いこうぜ」

そこで俺達は学校へと向かつた

## 真田寮での生活（一）（後書き）

いきなりまゆづち登場です。

これから登場回数を増やしていけばと思つています。

で全然話がかわるのですが、

今まででは毎日更新するよう頑張つてきたのですが  
先週からある場所で正式に働く事になつて頑張つてきたのですが  
毎日更新するのがきつくなつてきたので

誠に勝手ながら更新速度を少し落としていきたいと思います。

更新は『バカと俺たちの召喚獣』と『バカとマジ恋と召喚獣』を  
一日毎交代で更新したいと思います。

今日までは一応両方更新しますが明日からは更新速度を変えていきます。

明日は『バカとマジ恋と召喚獣』を

明後日は『バカと俺たちの召喚獣』を更新したいと思います。

本当に作者の都合で変更した事はありませんでした。

これからも応援よろしくお願いします

## 百代の欠点

教室につくと

百代「おー明久！ 我が愛しの弟よー！」

そこには両手を広げて皿を輝かせ満面の笑みの百代の姿があった。

それを見た俺たちは

ガラツ　　ダツ！！

扉を閉めてその場から逃げ出した。

百代「あつーおいー！」

だが一瞬で皆つかまつた。

百代「なんで逃げるんだよー！」

八雲「百代がそういう顔の時は金だろー！」

明久「お金はありますん」

百代「失礼だなお前らは！」

大和「なうどうこう用なんだ？」

百代「それはな……………金貸してくれ……」

八・明「やつぱ金じやねえかよ！..」

大和「意味がわからん」

百代「実はな今日中に金を返せといわれててな

明久「本当に困つた人間だね」

百代「なー」

明久「姉さんがね！！」

ハ雲「ちなみにいくら足りないんだ？」

百代「3万！」

明久「かなりの額だよね。どれだけ借りてたの！？」

百代「いやー照れるな」

ハ雲「ちなみに何人に？」

百代「10人ほどだな」

明久「いろんな人から借りすぎだよ……」

大和「はあ～（ため息）。ちなみに皆いくら持つてる？ 僕は5千円だ」

ガクト「俺様は3千円」

明久「僕は1万円だよ」

京「4千円だね」

一子「アタシは3千円ね

八雲「1万3千円だな。でもさすがに全額は無理だぞ」

そこへ雄二と秀吉たちが教室にやつて来た

秀吉「皆、おはようなのじや。べつしたのじや皆で集まつて」

雄二「べつしたんだ？」

康太「…………困り」となら手伝つ

八雲「そうか。なら今いくらいお金持つてる？」

雄二「ん？ 金か…………4千円だな」

秀吉「ワシは4千円じゃな

康太「……………6千円」

ハ雲「ならその半分の金貸してくれないか?  
金は月末に百代が必ず払うからさ」

秀吉「どうこう」とじゅ

明久「それはね…………（事情説明中）…………といふことなんだよ」

秀吉「そういうことなら仕方ないの」

雄二「仕方ないな」

康太「…………月末に必ず返してくれ」

雄二「まさかこんな欠点があつたとはな」

秀吉「そうじやの…………」

ハ雲「これは直して欲しいものだぜ」

結局3人から7千円借りることになった。

残りの2万3千円はガクトとワン子が千円ずつ、大和と京が2千円  
ずつ、  
明久が7千円で俺が1万円貸す事になった。

百代「皆、悪いな」

明久「そつ思つなら今度から氣をつけよ」

こんな事がよくあるので俺と明久は常に多めにお金をサイフに入れ  
ている。

まあ、このおかげで明久の生活が改善されている原因の一つだが・・

・

百代「あらためて助かつたぞ」

明久「ほどほどにしてくれると助かるよ」

百代「特に『金がらみ』では頼むぞ。『金がらみ』では!」

皆『・・・・・』

明久「生々しいよ姉さん」

今回も反省しない百代であった

番外編 黨編～友達100人できるかな～

黌「新天地でお友達を作ると心に決めではやー週間。まだお友達が出来ませんでした。

なにが悪かったのでしょうか？松風」

松風「うーん、ちょっと堅かつたんじゃね」

黌「堅い…ですか」

松風「だなー」

黌「そうですね。ちょっと丁寧すぎたかもしません。ですが…次こそ！次こそは…」

松風「そうだー！その意気だぜまゆつちー！

踏み出せ！そしてつかめー友達をおおおッ！」

と黌さんの携帯ストラップが喋つてゐる。

CV：黌

黌「はーー！まずはじめの一歩です」

松風「さしあたつて真田グループに入りたいんだろ？まゆつち

1人反省会之図

黌「はーー！みなさん凄く楽しそうなんです。

お友達になれたらどんなに……

松風「もうあれだよなー。入一れーて  
つてYOOH言つちやいなYOO!」

黛「そそそんなー私なんかが入つたらこ迷惑に  
」

松風「余計な事を考えたらダメだ! 友達が欲しいんだろー?」

黛「はつー…はい…ひとりはさびしいです」

松風「だつたら行動だぜー! 行けまゆつちー!」

黛「わかりました! まずは1階を偵察に!」

文月学園1年	黛	由紀江
友達100人計画	現在の達成数	0人

階段を降りてみると

? ? ? 「あああああ

何か食堂のほうから声が聞こえてきたので行ってみると

ハ雲「あああ…腹減つたぜー。なージャンケンで負けたほうがメシ  
作らねえ?

大和と明久はグーしか出せないルールで

大和「キヤップがチヨキしか出せないなら良こよ」

明久「本当に土田はきつこよね…」

八雲「土田自炊システムのうちの寮の欠点だぜー」

黛（真田さんに直江さんに吉井さん？お腹空いてるなんて氣の毒に  
私の料理でよければ作つてあげたい）

はつ！

黛「これはチャンスなのでは！？」

「こで私がお料理すればその流れでお友達に…！」

松風「名案だまゆつちー！」

黛「でもでもこきなり変なヤツーとか思われたら」

松風「おここらーー決意決意ーー！」

黛「やうでした！友達！友達100人！こきますー！」

決意して食堂へ向かう

黛「いんこひ…」

忠勝「あやーあやーつむせえどおまえりー！」

黛「ー?（ピクーッ）」

そこに源さんがバイトから帰ってきたみたいです

大和「あーゲンさんが帰ってきた！」

八雲「ぼくらのゲンさん！腹減った！」

明久「なにか作って！」

忠勝「ああ！？なんで俺がテメエらのためにメシを…アホか！」

3人は源さんに頼んでいます

大和「ゲンさんが作ってくれないと前途ある若者3人が栄養失調で電車の駅名しか言えない体になっちゃう…」

明久「なっちゃうー！」

忠勝「知った事か！つてか吉井は料理できるだろうが！」

明久「お腹が減つてできないよ。だからゲンさんお願ひーーー！」

忠勝「俺は夜もバイトがあるんだ。安眠の邪魔をすんな」

明・大「ゲンさん！」

明久「あーあ、ゲンさん行つちやつた」

八雲「練馬…桜台…江古田…東長崎…」

大和「つて駅名しか言えない体につ！？」

黛「あ、あのー…」

明久「ん? 2階の… 黛さん?」

八雲「椎名町? (なんか用?)」

黛「あ… のつですねつ、わ、私でよければ… その…  
これからタツ食を… ツ!」

大和（よくわからんが超にらんでる——ツー?）

忠勝「ちつメシの話されたら腹減つてきやがった。  
おいバカ3人、テメヒらの分も軽いもん作つてやる」

八雲「さすがゲンさん」

大和「やさしい」

忠勝「勘違いすんじゃねえ、ただのつこで…  
おう、お前も食うか?」

黛「えつ?」

大和「ああ、そうだ。黛さんなに?」

黛「あ……いえ、何でもないです。すみませんでした! では!」

私は頭を下げてすぐ食堂から出て行きました。

八雲「？」

大和「何だつたんだ？」

明久「…………めん、ちょっとトイレ行ってくるね」

黛「…………だ、ダメでした。あそこで一緒にと言つべきでした……」

そこへ

明久「黛さん」

そこへ吉井さんが私を呼ぶ声が聞こえました

黛「は、はい！な、なにか私してしまったでしょ？」「

明久「ん？何もしていないと思うけど……」

そうだ。今日はなにかあったのかも知れなかつたけど

今度は一緒に食べようね。ゲンさんの料理はおいしいからね。  
それを伝えに来たんだ。じゃあね」

吉井さんは私にそつこうと食堂へと戻つていきました。

自室に戻ると

黛「ひとり反省会」

松風「頑張れまゆっちー！」

黛「昨日、母上が送つてくださった大福が役に立つ時がきました」

松風「物で釣るのはセコに氣もするけどとにかくかりとしてはありますなー！」

黛「じうせひとつでは食べられませんし

もしかしたら母上が見越してくださったのかも」

松風「愛が痛てーー！」

黛「では、今度こそ」

パンパン

明久「！　はい、どうぞー開いてるよー！」

ガラッ

黛「……あーあのつー！」

明久「あれ？黛さん」

黛「うーん、これ、実家から送られてきたつまらないものなん  
ですけどーー！」

明久「えー？良いの？」

黛「つて違う！つまらないものなんて失礼ですよねー。  
そうではなくえーと…」

松風「落ち着けまゆっちー・まゆっちなりいけるー。」

黛「でも松風、吉井さんポカーンとしてますー。  
戦力的撤退を提案しますー！」

松風「そこで引いてしまっていいのかまゆっちーー。」

明久「あの…」

黛「はいっー？」

明久「大丈夫？ひとまず落ち着こひつよ」

黛「あ…じ…」めんなさいー迷惑ですよね？駄目ですよねー引きま  
したよね？」

明久「え？」

黛「本当にすみませんでした。お見苦しいものをーーーツーーー。  
し、失礼しますーーー！」

明久「え、えつー？ちよつと黛さん？どうしたんだろう？ん？」

明久が足元を見ると黛さんが持つてきていた大福がおいてあった。

明久「これは…」

黛「またやつてしましました。失礼がないかと必死なあまりまた動転して…  
あれだけ物を送る鍛錬を重ねたのに…！」

松風「ねー100回練習したよねえ人形相手に、人形相手に」

黛「2回言わなくていいです。

それに…松風のこときつと変な目で見られましたよね」

松風「間違いないなー」

黛「でもここであきらめたら今までと同じ…

友達100人なんて夢のまた夢です…頑張らないと」

そこに

明久「あついたいた。黛さん」

黛「えつ？」

私が振り返るとそこには吉井さんがいました

明久「や！　お茶入れたんだけど一緒に飲まない？」

黛「え？　えええええええつー？」

私は吉井さんに連れられ食堂に向かうと

黛「あつ…私の…」

食堂に行くと机の上には私の実家から送られてきた大福が並べられていた

明久「もうつたもんで悪いけどせつかくだから一緒に…って思った  
んだけど」

八雲「おーい、黛ちゃん。これつめーなーありがとうなー！」

黛「え…」

八雲「ほーー君も遠慮せず食べたまえー！」

大和「なんでキャップが偉そつなんだよー！」

黛「……はい、 いただきまーす」

明久（あつ笑つた）

黛「ままままま松風ーお礼ーお礼ー言わされましたーお呼ばれしてー」

松風「一步前進だまゆつちーー！」

明久（それにしても凄いなアレ？確か腹話術だつけ？）

八雲（ふうん、黛かあ…）いつも面白いな（

文月学園1年 黛まゆずみ

由紀江ゆきえ

友達100人計画 現在の達成数

0人

ただし前途有望？

番外編 黛編～友達100人できるかな～（後書き）

今回はまゆっち視点での話でした

## Aクラス戦（序章）

Bクラスとの戦争から数日後の朝

いよいよAクラス戦を残すのみとなつた俺たちは、  
もうじきお別れになる予定のEクラスで最後の作戦の説明を受けて  
いた。

雄二「まず皆に礼を言いたい。

不可能だと言っていたのにも拘らずここまで来れたのは  
他でもない皆の協力があつてのことだ感謝している」

明久「ゆつ雄二びつしたの？らしくないよ？」

明久の言つ通りだ。氣味が悪いぜ。

雄二「ああ自分でもそつ思つ。だがこれは偽うざる俺の気持ちだ」

やつぱり氣味が悪いな

雄二「ここまで来た以上絶対Aクラスにも勝ちたい・・・

勝つて生き残るには勉強が全てじゃない現実を教師どもに突  
きつけるんだ！――」

F『おお――ツ――』

F「やうだあ――ツ――」

F「勉強だけじゃねえんだ――ツ――」

最後に勝負に皆の気持ちが一つになつてゐる。そんな気がした。

雄一「皆ありがと。」

そして残るAクラスだがこれは一騎討ちで決着をつけたいと考えている

F「どうこう」とだ?」

F「誰と誰が一騎討ちするんだ?」

F「それで本当に勝てんのか?」

雄一が教卓を叩いて黙らせる

雄一「落ち着いてくれ。それを今から説明する。一騎討ちをやるのは俺と翔子だ」

明久「馬鹿の雄一が学年主席の霧島さんに勝てるわけがな」

シユウ　パシ　シユウ

明久の顔のすぐ横をカッターが通り過ぎよつとしたが百代がそれをキヤッチ、

それを雄一の顔のすぐ横目掛けて投げつける。

雄一「つ!・・・・・」

百代「次、弟を狙つたら拳を叩き込む」

雄一「…………まあ明久の言うとおり確かに翔子は強い。

まともにやりあえれば勝ち目は無いかもしない。

だがそれはD・Bクラス戦も同じだつたろ？

まともにやりあえれば俺たちに勝ち目はなかつた

確かにそうだな。最初は勝てないと思つていた戦争を勝利に導いてきた雄一の言葉だ。

それを否定する人間はこのクラスにはいない

雄一「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆さん見せてやる」

F『おおおお―――っ！』

今Fクラス全員が雄一を信じている

雄一「具体的なやり方だが、一騎打ちではファイールドを限定するつもりだ」

一子「ファイールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

雄一「日本史だ、ただし内容を限定する。

レベルは小学生程度方式の百点満点の上限あり。

召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負となる

小学生程度の満点ありだと？

それだと満点前提の勝負だから集中力が先に切れた方が負けになるな

明久「でも同点だつたら延長戦だよ？」

そうなるとブランクのある雄一には厳しくない？

雄一「おいおいあまり俺を舐めるなよ。  
いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦と言つ  
るものか」

一子「どうこいつこと?」

雄一「アイツなら集中なんかしなくてもこの程度のレベルのテスト  
なら何の問題も無いだろう。」

俺がこのやり方をとつた理由は一つ。

『ある問題』がでればアイツは確実に間違えるからだ

なんだ？ある問題つて？

雄一「その問題は『大化の改心』だ」

大和「小学生レベルとなると何年に起きたとかか？」

雄一「そうだ。その年号を問う問題が出たら俺たちの勝ちだ。  
大化の改心が起きたのは645年。」

こんな簡単な問題だつて明久ですら間違えない

明久「そうだよ。雄一そんな問題なら僕だつて間違えないよ」

今の明久は間違えないだろうが・・・・・・百代と一子、ガクトは  
目を逸らしていた。

やつぱりこいつらは・・・・・・

雄一「だが翔子は間違えるこれは確実だ。」

そうすれば俺達は勝つて晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

姫路「あの坂本君」

雄二「ん?なんだ姫路」

姫路「霧島さんはその・・・仲が良いんですか?」

そういうべきから名前で呼んでたりしたな

雄二「ああアイツとは幼馴染だ」

明久「総員狙ええっ!!」

雄二「なつ!なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構えるー?」

それに八雲までどうした!?

明久「黙れ男の敵!!」

ガクト「そりだ!霧島と幼馴染だと!なんて羨ましい!!」

八雲「面白田やうだったから」

明久「Aクラスの前にキサマを殺す!」

雄二「俺が一体何をしたと!?」

ガクト「遺言はそれだけか?」

明久「待つんだ須川君靴下はまだ早い、それは押さえつけた後に口に押し込むものだ」

須川「了解です。隊長」

男子の全員（俺、秀吉、大和以外）が雄一に向けて殺氣を向けている。

姫路「あの、吉井君」

明久「ん？なに、姫路さん」

姫路「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

明久「そりや、まあ。美人だし」

そうだな。霧島さんは学園内でも上位の美しさだらうしな。  
俺達の周りにはあんな清楚な女子はいないしな

明久「え？なんで姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの？  
それと美波も僕に向かつて教卓なんて物を投げようとしているの…？」

おお凄えな姫路がFクラスの空氣に毒されてきたな。

秀吉「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」  
パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉

明久「む。秀吉は雄一が憎くないの？」

秀吉「冷静になつて考えてみるが良い。相手は霧島翔子じゃぞ？  
男である雄一に興味があるとは思えんじゃね？が」

え？ そうか？

秀吉 「むしろ、興味があるとすれば・・・」

明久 「・・・そうだね」

明久達の目線が姫路に集まる

姫路 「な、なんですか？」

まさか、霧島さんが同姓愛かなにかと思つてゐるのか？

雄二 「とにかく俺と翔子は幼馴染で小さい頃間違えて嘘を教えていたんだ。」

アイツは一度教えた事は忘れない。だから今学年トップの座にいる」

それって凄くないか。一度教えた事は忘れないって・・・

雄二 「俺はそれを利用してアイツに勝つ。」

そしたら俺達の机は『システムデスクだ！』

## Aクラス戦 → 交渉へ

Aクラス

優子「一騎討ち?」

雄一「ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄一を筆頭に俺や明久、秀吉、ムツリー、大和、姫路、島田という首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。  
え?百代やワン子達はって教室で問題集を解かせてるよ(笑)  
今の点数じゃやばいしな。京が監督でな。

まあもし何かあつたら犬笛を吹けば良い事だしな

優子「何が狙いなの?」

現在、俺たちと交渉の席についているのは秀吉の姉の木下優子だ。

雄一「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

まあ訝しいのも無理は無い。

底辺に位置する俺たちが一騎討ちで学年トップの霧島さんに挑む事  
自体が

不自然なのだから当然何か裏があると考えるだらう

優子「面倒な試合戦争を手軽に終わらせる事ができるのはありがたいけどね、

だからと言つてわざわざリスクを犯す必要もないわね」

雄二「賢明だな」

予想通りの返事だ

大和「ところで、Cクラスの連中との試合戦争はどうだった?」

優子「時間は取られたけど、それだけだったよ?何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗り昨日Aクラスに乗り込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がつき、CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている

雄二「Bクラスとはやうやくあるか?」

優子「Bクラスって……昨日来ていた『あの』…………」

雄二「ああ。アレが代表をやつているクラスだ。

幸い宣戦布告はまだされていないようだが、  
それでいてどうなることやら」

優子「でも、BクラスはFクラスと戦争して負けたのだから

試合戦争はできないはずよね」

試合戦争の決まりごとの一つ、準備期間。

戦争に負けたクラスは準備期間を経ない限り戦争を申し込む事がで

きないのである。

雄二「知つてゐるだろ? 事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』つて事になつてゐることを。規約にはなんの問題も無い」

これは設備を入れ替へなかつたからこそできる方法だ。

優子「…………それって脅迫?」

雄二「人聞きが悪い。ただのお願いだよ

優子「うーん…………わかつたよ。何を企んでいるか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。

だけど少し待つてアタシだけではそれは決められないから

そこで優子は人を呼ぶ

冬馬「どうかしましたか木下さん?」

優子「葵君、相談なんだけどFクラスの人たちが一騎討ちを所望しているんだけど」

そこで優子は葵に今までの話を説明する

葵「良いでしょ。お受けしますよ」

明久「え? 本当に?」

葵「はい、いくら私がバイでも

あんな格好した人達がいるクラスと戦争なんて嫌ですか？」

・・・今、凄い事を聞いて様な気が

葵「えっと吉井君でしたっけ？明久君とこれから呼んでもよろしいですか？」

おい、コイツ明久に目をつけたのか

明久「え？別に良いよ。よろしくね葵君」

明久、お前気づいてないのか、・・・いや気づかないほうがまだ良いのか

優子「でも、こちらからも提案代表同士じゃなくて・・・

お互い5人ずつ選んで一騎討ちを

5回で3回勝った方が勝ちって言うのならいいわ」

雄二「なるほど。」(ちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな?)

優子「多分大丈夫だと思うけど代表の調子が悪かったら

問題次第では万が一があるかもしれないし」

八雲「わかつたぜ。それで良いぜ」

雄二「お、おい八雲。勝手に・・・」

優子「あ、あなた・・・」

八雲「ぶつちやけ俺もAクラス相手に戦つてみたいしな。  
それと・・・えつとこの前は大丈夫だつたか?」

優子「ええ、お陰様で」

八雲「それなら良かつた」

雄「おい、八雲。知り合いだつたのか?」

八雲「ん~、この前少しな」

雄「「そうか。なら、わかつた。そちらの条件を呑んでもいい。  
ただし、勝負の内容はこちらで決めさせてもらひ。  
それくらいのハンデがあつてもいいはずだ」

優子「え?うーん・・・」

霧島「・・・受けてもいい」

そこで優子と葵の後ろからAクラス代表の霧島翔子があらわれた

霧島「・・・雄一の提案を受けてもいい」

優子「あれ?代表いいの?」

優子「・・・その代わり条件がある」

大和「条件?」

霧島「・・・うん」

霧島さんが軽く頷く

霧島「・・・負けたら相手は何でも一つ言つ事を聞く」

つてことは試合に出たメンバーは負けたら相手の言つ事を聞かないといけないのか

向こうで明久とマッリー二が何か騒いでいたが無視する事にした。良い予感がしなくてな・・・

優「じゃ、いつしましょ。勝負内容は5つの内3つ決めさせてあげる。

2つはうちで決めさせて

大和「雄二それでいいんじゃないのか」

雄一「ああ、そうだな。交渉成立だ」

明久「ゆッ雄二ーーーまだ姫路さんが了承していないのにそんな勝手な！」

明久はわざわざから何を言つてるんだ・・・

雄一「心配すんな。絶対姫路に迷惑はかけない」

霧島「・・・勝負はいつ？」

雄一「そつだな。10時からでいいか？」

霧島「・・・わかった」

霧島さんって独特の雰囲気を持つ人だな。話し方だけならムツリー  
二と似ているし。

雄二「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

大和「そうだな。皆さんも報告しておかないとな」

交渉が終了し、Aクラスを後にする。

## Aクラス戦（1試合目）

### Fクラス

雄一 「 ということだ。

Aクラスとは5対5の勝負で3勝した方が勝ちとなる。  
そこで今から相手の情報についてムツリー一から報告がある」

雄一「がAクラスで起きたこと云ふるとムツリー一が教卓の前に立ち  
1枚の紙を見せてくれた

雄一「この紙に書いてあるのはAクラスの成績上位のヤツについてだ」

そこに書かれているのは

Aクラス上位成績者（新学期当初）

#### 総合科目

1)	霧島 翔子	5291点
2)	葵 冬馬	5290点
3)	九鬼 英雄	4926点
4)	久保 利光	3997点
5)	木下 優子	3781点
6)	工藤 愛子	3691点
7)	不死川 心	3572点
8)	忍足 あずみ	3569点
9)	井上 準	3431点
10)	佐藤 美穂	3197点

雄一「おそらくAクラス戦ではこの10人の中から選ばれて出て来

るだろ？」「

雄二「俺達は行つてからメンバーを言つが、候補としては代表である俺と姫路、秀吉、明久、康太、八雲、京、大和を候補としている」

クリス「なぜ自分が選ばれていらないんだ」

一子「アタシも」

ガクト「俺様もだ」

百代「私もだ」

雄二の言葉に納得しないよう意見を上げる

雄二「理由は簡単だ。一子とガクト、川神姉は点数が低すぎるからな。

クリスは点数がAクラスに及ばないし召喚獣の操作技術がまだ低いからな」

クリス「ではなぜ木下と吉井、土屋は選ばれたのだ」

雄二「秀吉はAクラスにはコイツの姉である木下優子がいるから考えや行動がわかると思ったし、召喚獣の操作も上手くなっているからな。

次に明久だが確かに点数はクリスよりは低いが、操作技術ながら学年で1・2を

争うまでの実力があるからな。

そしてムツツリーは保健体育だけはAクラス並の点数があ

るからだ

クリス「そうなのか」

雄一「ただ、これは候補なだけで、もしかしたら向こうで変更する可能性があるかもしれないからな。他の皆も心構えはしておいてくれ。

さあAクラスに乗り込むぞ！」

F「…………うおおおおおお……」「…………」

そしてFクラスとAクラスとの戦争がついに始まる。

Aクラス

高橋「では、両名共準備は良いですか？」

今田はここ数日、戦争で何度もお世話になつてゐる  
Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

雄一「ああ」

霧島「…………問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。

高橋「それでは一人目どうぞ」

雄二「姫路頼むぞ！先に1勝が欲しい」

姫路「はい、頑張ります！」

冬馬「では、頼みますよ英雄」

英雄「我が友の望みならば仕方あるまい。我が出る」

あずみ「頑張つてください英雄様」

英雄「うむ」

高橋「では、両者前へ」

姫路と九鬼が前に出る

九鬼「科目は総合科目でたのむぞ！」

科目の選択権は1・4試合目はAクラス、2・3・5試合目はFクラスとなっている。

英雄と姫路は自分のワッペンを机に重ねておくと

九鬼・姫路『サモン試獣召喚！』

総合科目

Aクラス

九鬼英雄

V S

Fクラス

姫路瑞希

4926点

4409点

英雄の召喚獣はまるで fate の英雄王と同じ金ピカの装備で、武器もエヌマ・エリッシュだ。

雄一「しまつたな。相手は九鬼か

大和「まざいな。先に勝するはずだったが

姫路「行きます！！」

姫路は先に攻撃を仕掛ける。  
だが英雄は軽く避ける。

あずみ「英雄様あ！！、頑張ってください……！」

英雄「ああ、愛しの一子殿が見ておられるのだ。負けるわけにはいかぬな」

一子「八雲～」

八雲「はいはい、お前、本当に英雄の事苦手だよな」

ワン子は俺の後ろに隠れる

一子「だつて～」

英雄「なら一子殿の前だ。すぐ終わられてやろ～」

英雄がそつといつと召喚獣の腕輪が光る。

すると、英雄の周りから数十本の剣が現れた。

アレはギルのゲートオブ ビロンか！？

英雄「我の腕輪が見れたのだ！光榮に思つがいい」

英雄が合図すると周りにあつた剣が姫路の召喚獣に突き刺さつてい  
く。

そこで勝負が決した。

高橋「勝者、Aクラス！！」

まずはAクラスが1勝をあげた。

## Aクラス戦～1試合目～（後書き）

ついにAクラス戦が始まりました。

次は誰が出てくるのか楽しみに

## Aクラス戦～2試合目～

雄二「すまない姫路、当てが外れた」

姫路「すみません、力が及ばず」

大和「いや、気にするな姫路。相手が悪すぎた」

高橋「では次の方はお願ひします」

霧島「……愛子お願ひ」

工藤「了解!、勝つてくれるからね~」

不死川「エクラスなどけちよんけちよんにしてくるのじゃ」

工藤「わかったよ心さん」

雄二「工藤か。なら康太、いってくれ」

康太「……任せておけ」

工藤「君の噂は聞いてるよ?ムツツリーー君だね?」

康太「……土屋康太」

工藤「それじゃあよろしくねムツツリーー君」

康太「…………だから土屋康太」

愛子「じゃあ行くよムツツリー二君」

康太「…………最近誰も名前を呼んでくれない」

高橋「それでは対戦教科を指定してください」

康太「…………保健体育」

工藤「君、保健体育が得意なんだってね？でもボクも保健体育は得意なんだよ

君と違つて…………実技でね」

大和「問題発言だな」

京「私も大和のためなら」

大和「はいはい、その話はまたいつかな」

康太「…………実技…………つ！（ブシャアア――！）」

ムツツリー二が工藤の発言で何を妄想したのかわからないが盛大に鼻血を噴き出した。

八雲「ムツツリー二！！大丈夫か？しつかりするんだ！」

明久「ムツツリー二――！」

俺と明久はムツツリーの元に駆け寄り安否を確認する

工藤「あはは！ムツツリー君は面白いね！」

明久「ムツツリーになんて酷いことを……つー！」

八雲「これは酷いぞ！」

工藤「君、吉井君と真田君だっけ？ボクでよかつたら教えてあげようか？」

もちろん、実技でね」「

明久「（ブシャアアーーーーー）」

八雲「あ、明久！？」

明久も工藤の発言にやられ鼻血を噴き出す。

康太「……これしきのことなんともない」

秀吉「かなり鼻血をだしておるがの……」

いや、ムツツリー本当に大丈夫か？足元が震えているんだが・・・

高橋「そろそろ勝負に入つてください」

いや、先生これはオタクの生徒の仕業ですけど

工藤「はーい、試験召喚サモンつと」

康太「……試<sup>サモン</sup>獣召喚」

明久「なに！？あの巨大な斧はっ！？」

明久が驚きの声を上げる。オマケに腕輪も装備している。

工藤「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

心「工藤！やつてやるのじや」

愛子が笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く。  
武器を構え大斧に雷光をまとい康太の召喚獣に襲い掛かる。

工藤「それじゃ、バイバイ。ムツツリーー二君」

康太「……加速」

土屋がそう呟いた時、土屋の腕輪が輝き、召喚獣がブレた。

工藤「……え？」

戸惑う愛子。康太の召喚獣は敵に射程外にいた。

康太「……加速、終了」

そして遅れて一人の点数が表示されていた。

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス土屋康太  
543点 681点

康太「……俺の勝ちだ」

工藤「……まだだよ」

勝負はついたと思ったが工藤の召喚獣が最後の力を振り縛り雷光を帯びて『る』斧をムツツリーーの召喚獣に投げつけていた。油断していたムツツリーーの召喚獣は避けることが出来ず真っ一いつになつた。

しかし、工藤の召喚獣もすでに切り裂かれていたので倒れてしまつ。

#### 保健体育

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス土屋康太  
0点 0点

高橋「両者、戦死なのでこの試合は引き分けとなります」

工藤「嘘!」めんね。勝てなかつたよ

霧島「……愛子はよくやつた」

心「まあ負けなかつただけよしとするかの」

葵「良く引き分けましたね。それだけでも上出来ですよ」

小雪「マシュー馬口食べる?」

工藤「うん、もうひつよ」

康太「…………すまない、最後油断した」

大和「いや、あれは仕方ない。まだ動けるとは思わなかつた」

雄二「だが、まずいな。この2人が勝つことが条件だつたんだが」

大和「そうだな。俺もまだ召喚獣の操作は不慣れだし、  
京の召喚獣は1対1の戦いでは不利だ」

雄二「ということは明久、秀吉、八雲の3人で勝つてもらひつかないのか」

大和「そういうことになるな」

## Aクラス戦～2試合目～（後書き）

まさかのムツツリーも勝てませんでした。

これでFクラスは1敗1分けとなりました。

さて次は誰でしょうか？

次回をお楽しみに

## Aクラス戦 ～3試合～

高橋「それでは三試合戦に参ります。対戦者は前へ」

霧島「……優子よろしく頼む」

優子「任せ」

雄一「……秀吉の姉か。秀吉頼む」

秀吉「了解じゃ」

優子「秀吉、試合の前にひょいとこにかしぃりへ」

秀吉「なんじや?」

優子「このクラスの小山さんって知ってる」

秀吉「はて誰じや?」

あれ?このクラスの小山さんの前秀吉が・・・

優子「じゃあこいや。その代わり、ちょっとこいつに来てくれる?」

秀吉「うん?ワシを廊下に連れ出しちどつかぬごじや姉上?」

秀吉が廊下につれていかかる

秀吉「姉上、勝負は・・・・ビハビハワシの腕を掴む?」

優子「アンタ、このクラスで何してくれたのかしぃり?」

どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなあ？」

秀吉「はっはっは。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上っ！ちがつ……そその関節はそっちには曲がらなつ……！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻つてくる。

優子「秀吉は急用ができたから帰るつて」

雄一「そ、 そつか……」

高橋「では代わりの方を出してください」

雄一と大和が悩んでいると

優子「まったく秀吉も演劇なんて遊びばかりしないで勉強していれば

成績だつてもう少し上がったでしょうに。

演劇なんてくだらないことばかりしているから

プチ

雄一「こちからは」「

八雲「俺が出る」

雄一「なつー?」

八雲「良いよな雄一

雄一「だが!」

大和「雄一もうダメだ」

明久「そうだね。八雲が怒るの久しぶりだね」

百代「あんなつた八雲は大変だぞ」

一子「そうね」

京「でもこれで勝ったも同然だね」

雄一「……仕方ない。八雲任せや。だが絶対に勝てよ」

八雲「もちろんだ」

俺が前に出ると

優子「貴方が相手ね」

八雲「木下優子。今さつき秀吉の夢の事をくだらないとか言わなかつたか?」

優子「ええ、言つたけど。それが何か？」

八雲「秀吉に謝れ！確かにCクラスのことで秀吉君やりすぎたかも知れないが

夢を侮辱するのは間違っている。俺は夢に向かつて頑張つているヤツを応援している

優子「え？」

八雲「お前は何か夢があつて今、頑張つているのか！？」

もし夢を持つていらないのなら人の夢を馬鹿にするな！！！  
たとえ持つていたとしても夢に向かつて頑張つてるヤツを馬鹿にするのはたとえ誰であろうと許さない！」

だから俺が勝つたら秀吉に謝つてもうひざ」

優子「わ、わかつたわ。あなたが勝つたら謝るわよ」

高橋「教科は何にしますか？」

八雲「物理でお願いします」

高橋「わかりました」

優子・八雲『試験召喚！』<sup>サモシ</sup>

物理

Aクラス 木下優子

VS

Fクラス 真田八雲

A 「なんだ!?あの点数は」

F 「凄え!!」

八雲「いくぞ、木下優子」

俺は優子の召喚獣に向かって槍を構え突撃する。  
優子も無事を構え、対応する。

俺の武器は槍、優子の武器はランス、お互いの間合いはほぼ同じだ  
俺は突いたり斬つたりとじわじわと優子の点数を削っていく。  
対する優子の攻撃はすべてかわしている。  
これも観察処分者になつたおかげだ。操作技術が格段に向上していく。

百代「さすが八雲だな」

明久「完全に秀吉のお姉さんの攻撃をかわしているよね

クリス「凄いな真田は」

一子「八雲の召喚獣、腕輪しているわね。どんなのかしら?」

明久「そうだね。気になるね」

八雲「なら明久、ワン子。見せてやるよ。  
こっちも九鬼の腕輪を見せてもうつたしな」

明久「あれ？聞こえた」

優子「なに、余所見しているのよ」

優子がランスを突き出してくるが軽く横に避けて攻撃をかわす

八雲「ならいくぞ、『侵略する』と火の如し』ってね」

俺は炎を武器に纏わせ攻撃する

優子「きやつ！」

優子は俺のいきなりの攻撃と炎に驚き、攻撃に当たってしまう

八雲「じゃあこれで終わりにするぞ！」

真田流奥義『烈火槍』！』

俺は炎を纏った槍で優子の召喚獣に向かつて連続で突きを放ちトドメをさした

高橋「勝者Fクラス」

F「うおおおおおおおおおお」

F「Aクラス相手に本当に1勝あげたよ」

八雲「じゃあ約束どおり秀吉に謝つてくれれよ」

優子「わかっているわ。

・・・・・秀吉、「めんなさいねあなたの夢を馬鹿にして

しまつて

優子はいつの間にかに戻つてきていた秀吉の元まで向かつて頭を下げた

秀吉「い、いいのじゃよ姉上。今回の事はワシにも非があるからの。今回の事はお互い水を流そうではないか」

優子「ありがとうね。えっと真田君もごめんなさいね。まだ夢を持つていらないあたしが夢に向かつて頑張っている人を

馬鹿にするなんていけなかつたわね」

八雲「いや、気にするな。勝手なことを言つてすまなかつたな優子つてか俺名前で呼んでたが良かつたか?」

優子「いいのよ。」いついちこそありがとう。優子でいいわよ。秀吉がいるからね

優子はそつにうとAクラスの皆がいるところに戻つた。

優子「……皆」「めん!負けてしまつたわ

霧島「……気にしない。相手が悪かつただけ」

葵「そうですよ。気にしないでください」

心「なにFクラスに負けておるのか!仕方がない次は此方が出よつ

九鬼「不死川の言つ事は気にするでない。」

ただ真田八雲に大事な事を習つたであろう。その事は忘れぬ

よつてな

優子「九鬼君ありがとう」

あづみ「さすが英雄様！！敗者にも優しいです」

## Aクラス戦（～4試合目）

高橋「では、4戦目を行います」

不死川「では此方が出よう。無様な猿共を懲らしめてやるのじゃ」

ガクト「俺達のことを猿呼ばわりだと！！」

京「ガクトは猿じゃなくて、ゴリラだよね」

大和「まあ、そうだな」

ガクト「おいい！！」

八雲「いきなり、俺達の事を猿呼ばわりかよ」

雄二「かなりムカツクな」

明久「じゃあ、僕が行くね」

雄二「……俺達が勝つにはお前が勝たないといけないが」

明久「頑張るよ！友達を侮辱されたからね」

八雲「明久頑張れよ！！」

明久「ああ」

明久と不死川が前に出る

不死川「確かにお主は観察処分者だったのう」

明久「うん、そうだけど」

不死川「なら、召喚獣にどれだけ攻撃を『えてもいじめにはならぬ』といふ事じやな」

明久「え？」

不死川「教科は日本史でお願いするのじや」

高橋「では始めてください」

僕達はお互にワッペンえお置くと

明久・不死川『試験召喚!』サモン

日本史

Aクラス	不死川 心	VS	Fクラス	吉井明久
456点			338点	

大和「さすがAクラスだな点数が高い」

ガクト「なんだと!? 明久の点数が高いだと!?!?」

一子「アキに負けてるなんて」

八雲「元から負けてるだろ」

不死川「Fクラスの猿にしては凄いの。此方には勝てぬであろうが」

明久「やつてみないとわからないよ」

明久は一気に不死川の召喚獣に突撃する。

不死川も武器である鉄扇を構えて対峙する。

明久「そこいつ……！」

明久は不死川のスキをついて鉄扇を蹴り上げて胴に一撃入れる。  
さすが明久だな。召喚獣の操作が上手い。

不死川「ぐぬぬ」

そこからは明久は互角に戦っている。

すると、不死川が鉄扇を明久の召喚獣に投げつける。  
そこで突然の事で明久は一瞬体勢を崩してしまった。  
そこへ不死川が明久の召喚獣の左腕を掴み関節をはずした

明久「うつーー！」

不死川「痛いであろう。まだこれからなのじゃ」

不死川はそういうと腕輪を発動させた

不死川「舞うのじゃーー」の腕輪は此方にふさわしい腕輪なのじゃ

不死川の召喚獣のまわりには花びらが何枚も舞つており、

その花びらが刃のように鋭く明久の召喚獣に傷をつけていきなぶり続ける。

明久もフィードバックで苦しんでおり、すでに片膝が地面についてもう倒れそうだ。

姫路「ひ、ひどいです。あそこまでやる必要はありません」

島田「そ、そりよ。やりすぎだわ」

お前らがそれを言つたか？

秀吉「じゃがアレでもただのリンクチではないか！」

康太「……………酷い」

不死川「どうするギブアップするかの？」

明久は不死川の攻撃に耐えている。

百代「明久！！川神魂を思い出せ！！！」

明久「そうだ…光灯る町に背を向け、輪が歩むは果て無き荒野、奇跡も無く標もなく、ただ夜が広がるのみ、

搖ぎ無い意志を糧として、闇の旅を進んでいく、勇往邁進！

明久は立ち上がり、関節が外れたまま不死川の召喚獣に突撃していく

明久「僕は負ける訳にはいかないんだ！！」

百代「明久いけつ！」

明久の召喚獣は数少ない動きで花びらのかわして行き懐へ忍び込む

明久「はあああー！」

明久は関節が外されていない左腕で木刀を構え、不死川の召喚獣に攻撃する。

不死川は勝負に集中していたのでなす術が無く、明久の攻撃を横払い、突き、足払い、と続き最後に頭に懇親の力で叩きつけられた。

そして勝負がつく

日本史

Aクラス 不死川 心 VS Fクラス 吉井明久 21点

高橋「勝者Fクラス」

明久の勝利の雄たけびが教室に響いた。

## Aクラス戦（5試合目）

不死川「そ、そんなバカな。此方が負けたじゃと」

九鬼「情けないな不死川」

あづみ「完全敗北ですね。まだ木下さんの試合のほうが良かつたですよ」

不死川「うう・・・」

雄一「良くやつた明久」

八雲「お疲れ明久」

明久「姉さんのおかげだよ。あそこで川神魂を思い出さなかつたら負けてたよ」

雄一「それにしても本当に良くやつたぞ明久」

八雲「明久は勝つたんだ！あとはお前だぞ」

雄一「おうー！」

高橋「最後の1人どうぞ」

霧島「・・・はい」

Aクラスからはやはり代表の霧島さんが出てくる

そして、俺たちのクラスからは当然

雄一「俺の出番だな」

坂本雄一。「イツしかいない

高橋「教科はどうしますか」

雄一「教科は日本史、内容は小学生レベルで方程式は百点満点の上限ありだ」

ざわ・・・

雄一の宣言で先ほどまで静かだったAクラスにざわめきが起きる

A「上限ありだって?」

A「しかも小学生レベル。満点確定じゃないか」

A「注意力と集中力の勝負になるぞ」

高橋「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。

少し待っていてください」

高橋先生はノートパソコンを閉じ、教室を出て行った

そんな先生を見送りつつ俺たちは雄一に近づく

明久「雄二、あとは任せたよ」

明久と雄二が手を握る。

雄二「ああ。任せた」

康太「……後は任せる」

ムツリー「が歩み寄り、親指を立てる

秀吉「ここが正念場じゃ。頑張るのじゃよ」

島田「頑張りなさいよ」

姫路「頑張つてくださいね坂本君」

百代「頑張れよ」

一子「頑張りなさいよね」

大和「頑張れよ」

雄二「お前らには随分助けられた。感謝している」

雄二「は皆から応援されそれに答える

八雲「しぐじるなよ雄二」

雄二「ああ、わかっている。もつ少ししたらシステムデスクだ」

高橋「では、最後の勝負、日本史を行います」

高橋先生がそつと雄一と霧島をさす教室を出て試験会場である視聴覚室に行つた。

あと俺たちにできることは『あの問題』が出てくれることを祈るだけだ。

試験の様子はモニターで見ることができる。

いよいよ試験が始まつそうだ。

一子「いよいよね」

八雲「そうだな」

クリス「これで、あの問題が出なかつたら坂本は・・・」

明久「負けるだらうね」

秀吉「もし出たなら勝てるはずだ。」

百代「ああ」

もし出たなら勝てるはずだ。

試験が開始された。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が表示される。

さて問題が出ているか・・・

・・・・問題を見ていくがあの問題は出ていなかった。

＜日本史勝負 限定テスト 100点満点＞

Aクラス 霧島翔子 100点

VS

Fクラス 坂本雄二 100点

なんとか引き分けたみたいだ。

そのあとも何度も同じ展開が続いていき

5回目の試験中・・・・・

『次の（）に正しい年号を記入しなさい』

- ( ) 年 平城京に遷都
- ( ) 年 平安京に遷都
- ( ) 年 鎌倉幕府設立
- ( ) 年 大化の革新

F『あ・・・・・!』

出ていた

姫路「あ、明久君つ」

明久「うん」

秀吉「これで、ワシらは・・・・・」

八雲「ああ。これで俺たちの卓袱台が」

F『システムテストにー』

揃つたFクラス皆の言葉

明久「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

F『うおおおおー』

教室を揺るがすようなFクラスの歓喜の声が上がる。

Aクラスの皆はそれが何かわからず困惑しているみたいだ。

試験の結果は雄一と霧島さんが教室に帰ってきた時に開示されるらしい。

俺たちFクラスの皆は雄一の帰りを待ちわびた。

しばらくして雄一と霧島さんが戻ってくる。

2人が戻ってきた事で得点が表示された

Aクラス

霧島翔子

97点

VS

Fクラス

坂本雄一

96点

雄一が1点差で負けてしまった。

俺たちFクラスとAクラスの戦争は「2勝2敗1分」という形になつた

## Aクラス戦 ～結末は？～

そして雄一の元に流れ込む俺たち

雄一「…………殺せ」

明久「良い覚悟だ、殺してやるー歯を食いしばれ」

姫路「吉井君、落ち着いてくださいー。」

姫路が明久を食い止める

百代「覚悟はできているんだろうな  
百代も拳をならせて雄一の前に立つ

ガクト「だいたい、96点つてなんだよーあと2点じゃねえかー！」

雄一「すまない、途中で集中力が切れた」

明久「この阿呆があーつー」

秀吉「明久もガクトも皆、落ち着くのじやー。」

明久「くつーなぜ止めるんだ秀吉ー。」

この馬鹿には喉笛を引き裂くといつ体罰が必要なのにー。」

姫路「それって体罰じゃなくて処刑だと思いますが・・・」

八雲「お前ら落ちつけー。」

ガクト「何だ八雲！お前は悔しくないのか？」

八雲「悔しいが、終わつたことをビビリ言つつもりは無い。

それにお前らが言つなよ。お前らは半分も解けないだろ？」

百・一・ガ「「「」」」

大和「八雲の言つとおりだ。これからAクラスとこの後どうするか  
話し合うから

雄二と俺、八雲の3人で行つて来るから、京この場を任せせる  
な」

京「わかつた」

大和「雄二、八雲いくぞ！」

俺たち3人は中央へ向かつた。

雄二「待たせたか？」

優子「大して待つてないわよ。で？どうする？」

Aクラスからは霧島さんに優子、葵の3人が来ていた

大和「Fクラスは、Aクラスに和平交渉を申し込む」

葵「私も直江君と同じ考え方ですね」

優子「葵君も？」

葵「ええ、私達は学年最高の成績を所有しているクラスです。

それが言い方は悪いですが最下層のFクラス相手に引き分けという形で

終わりました。正直言つてこれではAクラスの面目が丸つぶれです。

もし、この後戦争を続行したとしても、あちらにはまだ武神と謳われる

川神さんがいますし、FクラスはこれまでE・D・Bクラスと戦つてきたという

経験があります。いくら私達が成績が高かるひとつ操作技術では少し

Fクラスに劣っていますからね。ですので戦つても危ないんですよ」

雄一「では、和平交渉という事でいいのか?」

葵「私はそれで良いと思いますが……」どちらも戦争を仕掛けられたので

そう簡単には納得しない方もいるかもしれませんが

大和「なら、最初に霧島が言っていた勝った相手が負けた相手に一つ言つ事を聞いてもらひつてのを受け入れよう

葵「それなら良いと思つます。どうでしょうか代表?」

霧島「…………いい。優子は?」

優子「代表が受け入れるならアタシもそれでいいわ

葵「だそうです」

大和「わかつた。雄一そういうことだ」

雄一「……仕方ないか、わかつた。それを受け入れよう」

葵「ならこれでAクラスとFクラスとの間に和平交渉が成り立ちましたね」

ハ雲「なら約束だけど、霧島さんが雄一に、明久が不死川さんに、  
工藤さんとムツツリーは引け訳だからなしで、九鬼が姫路  
についてことだな」

葵「あなたも木下さんに勝つたのですから権利はありますよ」

ハ雲「もう俺は秀吉に謝れっていう願いをしたからな。  
だから俺のはもう無いんだ」

優子「え？ あれで良かったの？」

ハ雲「いいよ」

大和「なら、九鬼と不死川を呼んでくれないか？」

「こちらからは明久と姫路を呼ぶから」

その後九鬼と不死川、姫路と明久を呼んだ。

結果から言うと、

九鬼は姫路に何も命令しなかった。

九鬼曰く「こんな試合勝つて当たり前だ」そうだ。

明久も不死川に何も命令はしなかった。

明久曰く「命令する事がない」だそうだ。明久らしい発言だ。

そして最後に霧島さんは

霧島「…………それじゃあ……雄一、私と付き合つて  
皆がいる場で霧島さんは雄一に告白した。

雄一「やつぱりな。お前、まだあきらめてなかつたのか」

霧島「…………私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

やはりか・・・

雄一「その話は何度も断つただろ?他の男と付き合つ氣は無いのか  
?」

霧島「…………私には雄一しかいない。他の人なんて興味ない

雄一「…………拒否権は?」

霧島「…………ない。約束だから」

葵「代表よかつたですね」

優子「おめでとう代表」

九鬼「良かつたな霧島」

不死川「何故Fクラスの猿なんかに」

九鬼「無粋な事を言つではない。あずみやれ!」

あずみ「はい、英雄様! 延髓チヨツプ! !」

不死川「ぴきやあーー。」

八雲「良かつたな霧島さんに雄一」

雄二「雄一おめでとう」

明久「良かつたね雄一」

雄一「チツ」

霧島「・・・・・ありがとうございます」  
霧島さんは少し照れくさそうだった。

霧島「雄一、今からテートに行く」

雄一「なつー?」

八雲「行つてらっしゃい雄一」

大和「こつちは俺達に任せろ」

雄一は霧島さんに連れられ教室から出て行った

ガラツ

すると教室の扉が開く音がする

西村「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」  
そこには生活指導の西村先生（鉄人）と小島先生が立っていた

明久「あれ？ 西村先生、小島先生どうしたんですか？」

西村「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようかと思つてな」

八雲「西村先生。今、我がFクラスと言いましたが・・・」

西村「ああ、今度から福原先生に変わつて担任が小島先生、副担任が俺に変わるそうだ。」

「これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

F「「「「何いいいいいい！」？」？」？」？」」

クラスの男子生徒全員から悲鳴があがる。

小島先生も厳しいと評判の先生である。

小島「いいか。確かにお前等はよくやつたと思う。」

F「クラスがここまでくるとは正直思わなかつただろう」

西村「でもな、いくら『学力が全てではない』と言つても、人生を渡つていく上では

「強力の武器の1つなんだ。だからないがしろにしてもいいものじゃない」

全て正論だから何も言い返せないな。これは・・・

西村「特に吉井、坂本、真田、川神姉は念入りに監視してやる。」

「なにせ、開校依頼は初の『観察処分者』が3人とA級戦犯、それに校舎を破壊するヤツらだからな」

明・百「『だけど、そつはこきませんよ（いかない）』――  
なんとしても監視の田をかいぐぐって今まで通り  
楽しい学園生活を過ぎしてみせる――」

小島「……お前らには悔い改めるとこつ発想はないのか」

小島先生のため息混じりの台詞。

西村「とりあえず明日からは授業とは別に補習の時間を設けてやる  
う」

西村先生がそう言つと、明久達は嫌そつな顔をする。

## ある人物との突然の出会い

西村先生と小島先生が俺達の担任になり補習の時間が増えるというそんな重苦しい空氣の中、島田が明久にススッと歩み寄よつてこいつ言った。

島田「さあ～て、アキ。補習は明日みたいだし、

今からクレープでも食べに行きましょうか？」

明久「え？ 島田さん？ 僕は遠慮す　」

明久が少し戸惑つた声を上げる。

姫路「だ、ダメです！ 吉井君は私と映画を観に行くんです！」

明久「ええっ！？ 姫路さん、てか2人ともそれは話題にすら上がつてないよ！？」

そう思つてると、今度は瑞希が明久を映画にさせました。

明久「鉄人！ 小島先生！ やっぱり補習今からやりましょうーと思つたが仮滅ですよー！」

西村「吉田だバカ。まあお前がやる気のはづれしいが

……まあ無理をする事はないだろ(づ)

地獄へ突き落される様なことこの上ない一言をつげる。

明久「おのれ鉄人！ 僕が苦境にあると知つた上で狼藉だな！？」

「うなつたら卒業式の日に、伝説の木の下で釣バットをもつて貴様を待つ……！」

斬新な告白だな、おい

鉄人に詰め寄らうとしたところを、明久は島田にネクタイをつかまれ引っ張られる。

島田「逃げようつたつてそうはないわよ、吉井」

姫路「では吉井君、この際3人で良いでいいですから行きましょう明久の方はそれに島田も加わり、左腕を抱きかかえるように引っ張り始める。

明久「ちょっと待つて姫路さん……なんで雄一の事をほつといて、僕と映画を観たがるの！？」

姫路「坂本君？ 何のことですか？」

明久「え！？ だって……もしかして、違うの！？ じゃあ誰が」

島田「無駄口叩いてないできなさい！」

明久「ぐぶつ！ ちょっと、ぐるじ……」

島田が引っ張る力を強め、ネクタイが首を締め付ける。

姫路もそれに構わず、ただ引っ張る事に必死になっていた

明久「た、助けて！」

八雲「百代、弟がピンチだぞ」

百代「ううん、何か助けたい気がしないな」

ガクト「右に同じだ」

明久「そ、そんな。や、八雲、大和…」

八雲「はあ、貸し一だぞ」

俺はそういうと明久を島田と姫路から助け出した。

明久「あ、ありがとうハ雲！助かつたよ」

ガクト「なんで助けてんだよ…」

八雲「なら明久今度の休日、寮で飯作つてな。朝晩な！」

大和「それいいな、もちろん全員分な…！」

明久「え！？全員分？」

ガクト「本当にハ雲と大和は明久に甘いよな」

百代「そうだぞ」

一子「そりよ！もう少しアタシにも優しくしなさいよね」

大和「なら、ガクト。お前らには京の手料理を食べてあげよう」

八雲「あつ！2人もいるか？」

百・一・岳「いいえ…いりません…！」

京「そんなにはつきり断らなくとも…」

八雲「こつちは休日自炊なんだぞ！

まともに料理できるのはゲンさんだけなんだぞ！」

大和「そうだぞゲンさんが頼りなんだ」

八雲「そういうことだからよろしくな明久！もちろん金は出すから

明久「わかったよ。なら一度、買い物してからだね」

八雲「なら帰るか！明久手伝うぞ！」

明久「じゃあお願ひするね」

そうして俺と明久は帰つて行つた。

明久が一度荷物を置きに家に帰つてから買い物に出かけてその帰り道

明久「いっぱい買つたね」

八雲「そうだな。明日は雄一たちも呼んで盛り上がるか

明久「それはいいかもね！」

明久と雑談しながら歩いていると、俺達の前方にあたりをキヨロキヨロ見回している女の子の姿があつた。

明久「どうしたの八雲？」

俺が前方の女の子の事を指差す

明久「あ！女の子だね。あたりを見回してるけど迷子かな？」

八雲「そうかもしれないな」

明久「八雲。ちょっとこの荷物お願い！」

明久はそういうと俺に荷物を任せ、女の子の元へ駆け寄る。  
おい、明久。凄い重たいんだが・・・・

明久「ねえ君、どうかしたの？もしかして迷子なの？」

????「つむ、連れとはぐれてしまったのだ」

明久「そりなんだね。人とはぐれてしまつたんだね。

じゃあ、一緒に探してあげるよ。僕の名前は吉井明久って言うんだよ。

で、向こうで荷物を抱えているのが僕の友達の八雲だよ

八雲「悪いなこんな状態で。俺の名前は真田八雲っていうんだ。よろしくな」

????「吉井に真田だな。ふむ、覚えた。」

「フレの名前は九鬼紋白。紋様と呼ぶがいい！」

明久「よろしくね紋様。ん？九鬼？」

八雲「つてことは揚羽さんと英雄の妹か？」

紋白「そうなのだ姉妹なのだ、真田は姉上と兄上を知っているのか」

八雲「まあ知ってるな。揚羽さんはお世話になつたし、英雄とは一応同級生だからな」

紋白「そりであつたか」

八雲「そういうえば、英雄に電話したら良かつたんじゃないのか？」

紋白「それが……フレは携帯を持つていないので」

明久「そつなんだ。それで……でも僕も九鬼君の連絡先は知らないな

八雲「それなら俺が知ってるからちょっと待つて紋ちゃん」

紋白「紋ちゃんだと？」

八雲「紋白だから紋ちゃん」

紋白「まあよいか」

俺は荷物をひとまず降ろしてある人物に電話する

プルルルルル

あずみ「何だよこのボケ」

いきなり罵倒された。

あずみ「今、忙しいんだ後にしろ」

明久「あれ？」の声って

紋白「あずみの声だな」

あずみ「なつ！？そこに紋白様がいらっしゃるのか？」

八雲「ああ、なんかはぐれたらしくてな。  
そこを俺達が見つけたんだが、どうすればいい？  
学園まで連れて行こうか？それともここで待つてたほうがいい  
いか？」

あずみ「すぐに迎えにいくからからで待つて」

ブーーーー

きつやがつた。・・・・・まあいいか

八雲「紋ちゃん迎えに来るつてさ」

明久「良かつたね紋様

紋白「うむ、ありがとうございます」

すると、

あずみ「紋白様ああ……」

紋白「あずみか」

するとあずみが走つてこちらにやつて來た

あずみ「申し訳ありません紋白様。部下の不手際でこんな事になつてしましました」

紋白「よい、気にするでない。それに吉井と真田がワレを助けてくれた」

あずみ「お二人には感謝いたします。この礼は後ほど」

明久「い、良いよ。そんなの。それより良かつたね紋様。すぐに見つかつて」

紋白「うむ。この礼は九鬼の名にかけて必ず果たすのじゃ」

八雲「まあ氣長に待つてるよ」

紋白「ではな、吉井に真田よ」

明久「じやあね紋様」

八雲「じゃあな紋ちゃん。学校で会えたならまたな」

そうして紋ちゃんはあずみと一緒に帰つていった。

明久「何か凄い人を助けたみたいだな」

八雲「だな。じゃあ、帰るとするか」

俺達も寮へと向けて帰つていった。

## ある人物との突然の出会い（後書き）

「マジ恋S体験版、DWしてやつてみました。  
マジで面白かったです。発売日の1月27日が楽しみです。  
さつそくアニアイトで予約してきました。  
皆さんもぜひ体験版をプレイしてみてください。  
でも前作をしてない方は前作をやつてみてからのほうが面白いです  
よ。

## 皆で食事

土曜日

雄一「悪いな。俺達まで呼んでもらって」

秀吉「本当に良いのか？晩御飯に呼ばれて」

八雲「いいや。作るのは明久だしな」

真田寮には俺達真田ファミリーのほか雄一と秀吉、ムツツリーニの3人もいる。

寮生であるクリスと黛、ゲンさんの3人はといふと  
クリスは久しぶりに父親と食事らしく  
ゲンさんはバイト、黛さんは誘つたけど・・・・

ということで今回はこのメンバーで食事ということになった

雄一「八雲本当にありがとうございました誘つてくれて・・・もし呼ばれてなかつたら翔子に・・・」

明久「・・・・大変なんだね雄一」

雄一「・・・・ああ

八雲「まつー今日は楽しもうぜ」

一子「で、何を食べさせてくれるの？」

明久「人数もいるから鍋にしようと思つてるんだけど……」

ガクト「俺様は肉があればなんでもいいぜ」

百代「私は食べられたらしい」

一子「アタシも」

京「私は鍋より大和が…………」

大和「お気持ちだけで」

雄二「こ馳走になるわけだから明久手伝うぞ」

康太「…………手伝う」

明久「え？ 雄二たちつて料理できるの？」

雄二「まあな」

康太「…………コレ位当たり前の技術」

秀吉「ワシは料理は出来ぬから他のことで手伝うのじゃ」

八雲「じゃあ俺も手伝うぜえ！ 味見は任せろー！」

明久「味見じゃなくて手伝つてよ」

その後は明久と雄二、康太の3人で料理の下準備をすませた。

俺と秀吉は人数分の皿と「ツップや飲み物などを準備した。

百代「おおーおいしそうだな」

明久「今日は鳥団子鍋にしてみたんだ」

一子「おいしそうね。早く食べたいわ」

八雲「まあ待てよワソ子。じゃあまずは食べる前に皆に伝えておきたい事がある」

雄二「ん?どうしたんだ?」

八雲「まあファミリーの皆には言つておいたが、

雄二「秀吉、康太。お前ら俺達のファミリーに入らないか?」

秀吉「ファミリーとは真田たちのグループの事かの?」

八雲「ああ、そうだぜ」

雄二「いいのか?俺達が入つても?お前らは幼馴染のグループなんだろう?」

明久「それは大丈夫だよ雄二。皆賛成しているからね」

百代「お前らといたら飽きないしな。それに金にも困らないだろ? しな」

大和「百姉は借りない事を前提にしようぜ」

一子「アタシもあなたたちなら歓迎よ。お菓子分けてくれるし」

八雲「お前ら姉妹は動機が不純だな」

ガクト「俺様も賛成だぜ」

京「……私も短い間だけ少しだけどわかつたから良じよ

俺と明久は去年から雄二たちとは仲が良かつたこともあります  
京も俺と明久が言いといつなら良いみたいだ。

八雲「つてことで皆賛成してるんだ。だから雄二たちが良かつたら  
入らないか?」

雄二「……じゃあ入れさせてもらおうか。お前らといたら面白そう  
だしな」

秀吉「これからよりしく頼むのじゃ」

康太「…………よりしく」

八雲「じゃあ、新しい仲間も加わった事だし乾杯と行くか!」

百代「そうだな」

八雲「じゃあ皆。じゃあ新しい仲間を加え『乾杯ツ』!」

皆『乾杯! ! !』

今日ここに新しいファミリーが加入した。



皆で食事（後書き）

雄一・秀吉・康太をファミリーに入れてみました。

あつもちろんクリスとまゆっちも入れますよ。

それはあとでですが・・・

皆さんの「」感想お待ちしております

## 金曜集会

雄二たちが俺達ファミリーに加入してから1週間が過ぎた金曜日。俺達は雄二たちを秘密基地？もとい真田寮にある俺達の集会場へと連れてきた。

雄二「なあ明久、ここで何をするんだ？」

明久「ここはね僕達の集会場なんだ。金曜日に集まつて」

明久が雄二と秀吉、康太に金曜集会について説明する。

雄二「そういうことか」

秀吉「それは面白そうじゃの」

康太「・・・・・」  
「ククク」

3人は理由を聞き納得しているようだ。

明久「で、大和はどうしたの？」

明久は大和が少し不機嫌そうにしているのを見て質問すると

大和「 つて事がさつきあつたわけなんだぜ！？」

大和曰く今日クリスに川神の町を案内したらしいのだが  
その時に大和の戦法についての議論となり衝突したみたいらしい。

ガクト「はははっ、大和がせこい手を使つてゐるからだ」

雄一「いや、大和は頭を使つただけだぜ！それにあれば戦略だな」

京「失礼な女だね。案内した大和に対して（怒）」

ガクト「む？ 策を用いる大和に怒りを覚エルナラ  
正統派肉弾タイプの俺様ならクリス落チルカ？」

秀吉「無理じゃ らうな」

京「無理無理。ああいうタイプは口ウルサイヨ」

ガクト「まあ父親も怖いしな…俺様の肉体も銃は弾けない」

百代「そういう生真面目そうなのを落とすのが面白い。  
私の美少女パワーでクリスをメロメロにしたいな」

明久「美少女？ 漢パワーの間違……いでつ」

百代「ふふん、生意氣な明久をこねくり回して遊ぶかな」

抱き寄せられたので撃退の呪文を唱える。

明久「姉さんそろそろ貸したお金返してよ

百代「……」

京「寝たフリをする気持ちは分かるけど、私の分もね」

雄二「俺の分もな」

百代「さてポップコーンでも食べるか」

京「無視した」

百代「なーんてな。しつかり金は持つてきてるぞ……」

京がお姫様抱っこされた。

百代「む、この強い気と薄い気はワン子とマッシュリー二か」

京「2人きたんだ。相変わらず便利なセキュリティ」

明久「ハ雲もできるからセキュリティに問題はないよね」

百代「でもハ雲は気は読めるがあまり強くないんだよな」

京「でも私達よりは強いよ」

明久「（まあ隠してるからなんだけどね）」

そこへ

一子「到着ー！ 飲み物買つてきたよー」

秀吉「では預かるのじゃ」

康太「……キャップ以外は揃っている

キャップとは八雲のことだ。一応ファミリーのリーダーだからね。

ガクト「もう来るだろ。ムツツリーは何してたんだよ？やつぱりエロイことか？」

康太「……俺はそんなことしない。そもそもエロとは……」

雄二「出た。ムツツリーのエロ講義」

百代「おい、誰かあれ聞いてやれ。火種のガクトいけ」

ガクト「ヤドカリオタクもいるし迷惑な存在だぜ」

明久「でもガクトも…………ねえ？」

雄二「だな」

ガクト「おい…どういうことだそれは！？」

大和「ヤドカリの良さがわからないか。なら教えてやるわ…………」

大和もヤドカリについて語りだした。

百代「2人に増えてしまつただろうが。早く止める」

京「大和は引き受けろ。例え貞操を失つても止める」

秀吉「大和の貞操が心配じやのつ」

百代「既に無かつたりしてな」

ガクト「そしたら殺す」

一子「てーそり? なんの」と? 和菓子の一種かな?」

京「なんという無垢な存在。まぶしくて見えない」

一子「お姉様、なんの話なのー?」

京「子供はどうやって出来るか・・・そんな感じだ(ずいっ)」

京が百代の前にでて教える。

一子「おおっ! (赤面) ハロチカな会話だつたんだ。  
アタシそーいうの全然分からなくて・・・」

明久「ワン子はそのままでいいんだよ。京みたいに汚れちゃダメだ  
よ」

京「それどういう意味?」

大和「それは言えるな」

京「や、大和! ?」

百代「最後の1人が来たぞ」

八雲「ウイース!!」

だだだだだつ！――

ハ雲「お、駆け寄つてくるとは俺に懷いていのなワンド」

一子「待つていたわよ『晩御飯』！」

ハ雲「あーそっちね。全員揃つてこりよりだし始めるか。  
ほれ！今日のあまり分だ。量多いぜ」フフン」

俺がドンっと置いた荷物の中には  
バイトでの収穫物“寿司”がごつそり入つていた。

一子「大量ね。ざるパック（下の容器がが蕎麦、上が寿司）もある」

ハ雲「今日はかなり余つたからな。ガンガン食え」

百代「ムツツリーー寿司来てるぞ」

まだ康太はエロ講義をしていた

ハ雲「食つ準備しないと欲しいのなくなつちまうぞ」

ガクト「これだけの量の寿司があれば、結構もつぜ」

雄二「だな」

明久「甘いよ雄二、ガクト。ここちには姉さんとワンド子がいるんだ  
から」

一子「アタシらガツツリ食べる心構えよ」

京「大和、はいシヨーグ」

大和「ああ」

京「大和、はいタバスコ」

大和「いらんだろ」

京「いるでしょ」

秀吉「タバスコをかける意味がわからないのじゃ」

大和「醤油にタバスコ混ぜやがつた……赤い、赤いよ」

八雲「それじゃ、頂きまーす」

俺の弓令で旨が箸（一部、手）をのばす。

一子「あはは、美味しい美味しい タダ寿司だわ」

百代「フライドチキンも良かつたが寿司もいいな」

川神姉妹は手でひよいひよい食べていた。

雄二「これは本当に良いな」

秀吉「セーヴィーの。まさか寿司がタダで食べられるとはの」

康太「…………かなり得した気分」

ハ雲「宅配寿司はそろそろ終わりだな、短期だつたし」

明久「何か面白い経験できた?」

ハ雲「宅配先がご老人宅が多いんだ。そこで福引券もいっぱいもらつちゃつたな」

明久「可愛がられてるねハ雲は」

ガクト「しかしこの部屋も荷物が増えてきたな」

京「皆で色々持ち込んだから…」

明久「前は原っぱだつたしね」

一子「何もあそこまで土地開発しなくても良かつたのにね」

前の秘密基地は土地開発により無くなつたので俺の家に上がり込んだりしてたけど、

この真田寮ができてからはここが集会場となつていてる。

京「懐かしい。大和は人氣者の私に一眼ぼれだつた」

秀吉「そうなのか?」

大和「凄まじい自虐かつ、捏造だな」

ガクト「京は小さい頃病原菌扱いだつたる」

京「そうだね。ガクトには随分言われたね」

雄一「そうだったのか？」

3人に明久が説明する。

俺達は子供の頃からずっと一緒にいたが中学の時京が両親の離婚により、

静岡のほうの学校へと転校してしまった事になった。

その時から大和は京と付き合っており京が心配で一緒に静岡までついて行つたのだ。

京と大和は時間を作り毎週金曜日～週末にかけて静岡から遊びに来れるようになつた。

これが俺達が大切にしている“金曜集会”だ。

雄一たちも話を聞いて納得しているようだ。

やはり3人をファミリーに入れたのは間違いじゃなかつたな。

百代「さつきも言つたが今日はバイト代がはいつたぞお前達。

そらさつきと私に貸した分持つて行け金の亡者共」

八雲「遠慮なく」

京「じゃあ私も。7千円だつたね

明久「僕も回収。はい、雄一たちも。姉さんお金をきつちり返すのはいいけど……」

ガクト「まずは借りんようにしないとな

一子「アタシは三千円だから……誰か千円札持つてる?」

京「はい両替任せて。準備してたから」

大和「回収した。ハイこれお釣り」

百代「……おい、残り140円しかないじゃないか」

明久「そうだね」

百代「これじゃ学食でソバだって食べられないぞ。

明久、姉が困ってるぞ。金銭面で助けてくれ」

明久「からんでこないんですよ」

雄二「あの武神からは想像できない姿だな」

百代「だいだいあのジジイがおかしいんだよ。

花の学生に小遣いなしとか質素儉約つてレベルじゃないぞ」

明久「バイトするしかないよ」

食事も終わり一段落すると

八雲「じゃあ今日の議題だが転入生のクリスの事だよ」

一子「んー?クリスビーブラフしたの?」

八雲「俺達のグループに入れようかつて議題出てたろ」

明久「今、聞いたよ！」

八雲「俺は良いと思うが皆はどうだ？」

大和「理由は？」

八雲「クリスはこここの女子連中に負けず気が強いし面白いしな！俺、気に入ったもん。一緒に遊びてえって思った」

明久「それ、もしかして恋？」

八雲「いや、それとは全然違うな（キッパリ）！で皆はどうなんだ？」

結果から言つと

賛成が俺、百代、ガクト、明久

反対が京、大和

様子見がワン子

雄二と秀吉、康太はまだ参入して期間が短いので自分から意見を言うのを止めた。

八雲「じゃ、クリスには声を掛けるつてことで。

でも空気が悪くなりそうだつたら遠慮なく切るつてことで」

明久「（京のために切るとか厳しい言葉言つてるね）

その後は雑談をしながら解散となつた。

## 川原にて

土曜日 川原

ガクト「4番ファースト、島津ーつと（打者）」

俺達ファミリーは野球をして遊んでいた。

京「ガクトか。空振りとりやすい相手かな（投手）」

ガクト「来い京。ヒヨ 口球を太平洋まで飛ばす」

百代「京は結構いい球投げるぞ（捕手）」

京「ライトー、レフトー、よろしくねー」

大和「任せとけー（ライト）」

一子「どんな球來ても捕るよー（レフト）」

明久「ゴロでも大丈夫だよファースト京」

秀吉「任せのんじゃ（セカンド）」

雄二「こっちでもいいぜ（サード）」

康太「・・・任せ。上手く処理する（ショート）」

ガクト「ゴロなんて論外！俺様はHRのみ目指す！」

八雲「3振かな（ネクストバッター）」

クリス「野球か」

八雲「まあテキトーな投手 対 打者勝負なんだけどな。

順番に打者は交代するんだ。俺達いつもこんな風に遊ぶんだ」

京「それっ、ハンサムには打てないボール！」

ガクト「マジで！？（スカッ）」

京「1ストライク」

ガクト「マジメにやれ京」

京「断る」

大和「京——！勝負してあげて——！」

京「了解！」

ガクト「絶対打ってやるよ フン！」

カキイーーン

京「あれ、打たれた？」

ガクト「行つた！これはHRだろ」

百代「甘いなガクト。快速の外野手を忘れてはいけない」

一子「はつはー！……ジャンピング、キャーッチー！」

京「センターも兼任とはワソトをするがだね」

クリス「楽しそうだな」

八雲「そつ思うならクリスも仲間に入れよ」

クリス「いいのか？」

八雲「ああ」

クリス「こんなに友達が増えるとは嬉しいな」

明久「クリス仲間に入るつて」

ガクト「これからよろしくな」

百代「それじゃあ今夜は真田寮でプチ宴会だな。

川神院から肉を持ってそつち行くぞ。

その後、新密度を深めるため一緒に風呂だ！」

その後はクリスも含め野球を楽しんだ。

## ファミリー歓迎会――

真田寮1階

大和「というわけで、新メンバーの加入を祝して不詳わたくし直江  
大和が乾杯の音頭を――」

明久「それは僕が育てた肉だよ――！」

一子「鍋は戦場よ！」

八雲「すき焼きかおいしそうだな」

京「ここでタバスコを・・・・・フフフッ」

百代「京を止める――！」

大和「つて聞けよ――！」

川原で野球を楽しんだ後、真田寮で歓迎パーティを開いている。  
ガクトは何か用事があつて急遽来れなくなつた。可愛そうに・・・・  
・  
ゲンさんはバイトにいつている。

あと黒さんも誘つておいた。彼女も面白そうだしな。

一子「ちょっとクリ！離しなさいよこれはアタシの肉よ――！」

クリス「鍋は戦場だと言つたのはお前だぞ犬」

ハ雲「2人が食べないなら俺が食べるぜ（ヒヨイ）」

俺はワン子とクリスが肉を奪い合っているなか横からそこの肉を奪い取る。

一・クリ「あつ！？」

ハ雲「うめえ～！やつぱり川神院の肉はうめえな」

やはり川神院の肉はうまい！いい油がのつていてるな

一子「卑怯よハ雲！」

クリス「そつだぞ犬の言つとおりだ！」

明久「黛さんも食べててる？」

黛「はいっ、これ、まいうーですよね」

大和「おい京！タバスコ入れようとするな！」

京「ちつ」

雄二「あつ川神！それは俺が育てた肉だ」

百代「早いもの勝ちだ！」

康太「…………おいしい」

秀吉「しらたきがおいしいのじや」

黛「あれ、まいづーがスルーされ氣味でしたよ松風」

松風「状況は悪くない」

大和「（また）の一年一人で何か言つてるよ」

黛「はつ！？なんだか生暖かい視線。

やはり携帯ストラップと喋る怖いヤツと思われたのでしょうか

松風「

松風「大丈夫なんじゃねーか」

百代「ドーナンー！ ははっ、なんだ）の面白い生き物は

百代が黛さんに抱きついた。

黛「わあ！？」

八雲「寮生じゃない人は初対面だつてか。 1年の黛由紀江さん

俺は即ち黛さんを紹介する。

百代「黛？じやあまゆまゆだな！」

黛「はは、はじめまして川神先輩」

百代「おおう、よろしくなーまゆまゆー なかなか良い体している  
な

百代は後ろから黒を抱いて今は胸を揉んでいる。

黒「ビビビビウモ

百代「それに身体だけじゃなくて強いな

百代「え？」

百代「ちょっと避けてみてくれ」

そういうと百代は黒の前にたち殴りかかる。

黒「つー！」

ガシイイツ

黒は百代のパンチをかわして受け止めていた。

百代「うん、やっぱり強いな氣に入つたぞ」

黒「いえ… 私などまだまだです……」

クリス「ほら、 所見で百代さんの拳を防いだのか

一子「な… なかなかやるじゃない？」

ハ雲「それはそうだね」 だって黒は加賀の剣聖・黒十一段の娘  
だからな

黒「父上を！」存知なのですか？」「

八雲「それはな国に帯刀を許可されてる人物だからな」

百代「やはりか」

大和「幻の黛十一段の娘だったのか・・・また大型新人だな」

明久「どうして女子は武闘派ばかり集まるのかな」

雄二「本当に凄いな」

八雲「そっちの方が面白いじゃんか！で俺から提案が」

黛「あ、あの！失礼を承知で言いたい事があるといつが」

松風「ガンバレーまゆっちー！チャンスは今しかねー」

黛「あつはい！お願いします。私も皆さんの仲間に入れてください」

黛が頭を下げてお願いしてきた。

黛「あの、私ずっと友達がいなくて・・・できなくて・・・  
私食事作れます。掃除も自信あります。な、なんでもしますか  
ら、わ、わたしを」

八雲「ストーップー！」

黛「え？」

八雲「黛はなんか勘違いしているようだが仲間つてもんは対等なも

んだ。

土下座みたいな真似して何でもするから入れて…とかで入れるもんじやないぜ」

黛「そり… ですよね」

八雲「だから普通に面白そうだから私も入れてでいいぜ」

黛「…… 真田先輩…… お、面白そうだから私も入れてください…。」

八雲「断る」

黛「はああああうつつ…?」

明久「アンタは鬼か…！」

八雲「冗談だよ[冗談]。仲間入れてやろうぜ」

大和「そういえばキャップは何を<sup>お</sup>うつとしたんだ?」

八雲「ああ、黛を仲間に入れようとしたんだ。でもあっちから言われてしまつたがな」

明久「これからよろしくねまゆっち」

百代「まゆまゆよろしくな」

黛「あつはいーよろしくお願ひします」

その後まゆっちは眞と仲良くなり女子一同でウチの温泉に入った。

その時百代がハイテクションになつすきて女子風呂を壊してしまつ  
事件があつたので

女子風呂が直るまで女子は男子と交代で男子風呂に入る事になつた。

翌日、鉄心さんが謝りに来たのはいつまでもない。

## ファミリー一騒動

その次の金曜日、俺達はクリスとまゆっちを連れて金曜集会が行われている部屋へ向かつた。

同じ寮の中なのですから……

ここにはハ雲以外のファミリーが揃っている。ハ雲はバイト後来るそうだ。

明久「クリスにまゆっちが僕達ファミリーの集会場所なんだ」

一子「ハ雲がわざわざ部屋を一つ空けてくれたのよ」

黛「ここで皆さんが集まっているんですね」

ガクト「皆が色々持つてきてるからあきねえぜ」

この部屋には皆が持ってきたゲームや漫画などが多く揃っていた。

明久「これは僕こだわりのゲームだから面白いこと思つよ」

雄一「ああ、これが。明久が言つゲームに関しては面白いのが多いからな」

康太「（ゴクゴク）」

一子「アタシも狩ゲーならできるわよ」

クリス「うーん…………で？」

明久「え？」

クリス「この部屋にはどういう意味があるんだ？」

一子「ん？」

クリス「遊ぶなら自分達の部屋があるだろ？。

わざわざ寮の部屋を一つ潰してまでここに集まる意味が分からないぞ」

大和「やめておけクリス」

クリス「率直ば意見だ、直江大和。これは八雲の判断が間違っている。

八雲には少し失望したよ。

「このような部屋はさっさと荷物を払つて  
新しい人を入れたほうがいい」

京「お前死ねよ」

クリス「つー？」

京「よくも……よくも好き放題言つてくれたなあーーーーー！」

大和「京！やめろ！」

俺の言葉と同時に百代が飛び出そうとしていた京を押さえていた。  
そうしないと京は危うくクリスに飛びかかる所だった。

京「分からぬだろ、お田辺は……この場所が……」の部屋が……」  
「この空間が……どれだけ……どれだけ大切なのか……」

クリス「え……え？」

クリスは普段冷静な京の豹変に驚いていた。  
これはクリスだけではなくまゆつちや雄一、秀吉、康太たちも驚いていた。

京「だからこんな新参者を入れるの嫌だつたんだ！！  
壊すべき？よくもそんな事この部屋で言つてくれたな！  
何様だと思つてやがる！」

クリス「み、京。待て、話を……」

京「やつせと出て行け！！お前なんか仲間でもな」

明久「京……」

明久が京の言葉をそいざつたのと同時に大和が京を抱きしめる。

大和「落ち着け」

京「大和、明久……だつてコイツ……」の場所を、キャップを侮辱したんだ！

否定したんだ……ゆ、許せないよ……！」

百代「もっと強く抱いてやれ」

大和「ああ、京もついいから」

京「う……うう……ひひううう」

場が静まりかえった。

今この場には京のうめく声だけが響いている。

クリス「な……何だ。何が気に障つた。自分は正しい事を言つたはずだが……」

大和「クリスはそれが正しいとまだ思うんだな」

クリス「あ、ああ」

大和「じゃあ、さよならだな。仲間にはなれなかつたが学校では普通に話そつぜ」

明久「（ま、まずい。大和まで切れてる）」

まゆつちや秀吉は今の状態に対応できていなかつた。  
康太も表情には出でていないものの動搖しているみたいだ。  
雄二は今の状態を考えているみたいだ。

クリス「理由を言つてくれ！納得できない！」

クリスが周囲を見回す。

ガクト「……あー……なんつーかな、んー」

百代「私が言つてやるうか、クリ。お前ひざごぞ」

クリス「え…」

百代「意味がないって言つのも全部お前の物差しだらうが、私達は理屈じやなく、好きでここに集まつているんだ。誰に指図されようがやめる気はないぞ。

八雲はそれを皆のために部屋を提供してくれたんだ」

クリス「自分は、ただ……」

明久「もうやめよつよクリス。ここではクリスが悪いよ

クリス「ワル……自分が悪だと！？ 何故そうなる！？ 確かに自分の物差しであるが自分以外にもこの意見のはずだ！」

明久「確かにそう考える人もいるかも知れないけどね。なんていうかクリスつて頑固すぎるよね」

クリス「何……？」

明久「この部屋のことだって理由があるからわざわざ八雲が寮の1室を僕達、仲間のために提供してくれたんだ」

クリス「仲間のために？……今ひとつ理解できない」

黛「あのつ……自分」ときが口を挟んで恐縮ですが！

そ、その、あまり怒らないで、落ち着いて、その

百代「おこまゆまゆ。お前もそろそろ怒るぞ」

黛「え？」

百代「一人後輩だから丁寧にしゃべるのはわかるがな……いちいち私が」ときが、とか言つた」

ガクト「だなお前キャップが言つた事理解してねーだろ」

明久「うん、その通りだね。まゆつちは人の顔うかがい過ぎだよ」

ガクト「度が過ぎると俺様といえど不快だぜ」

黛「す、すみません、すみませんっ……」

クリス「さつきから意味不明だ」

明久「さつきから何が意味不明なの、おバカお嬢様」

クリス「ば、馬鹿！？」

明久「クリスにとつて何か大切なもの言つてみて」

クリス「親からもうつた、ぬいぐるみなどか」

明久「僕はぬいぐるみの良さが分からぬいぐるみなどか」

部屋にかさばつてしまふから捨ててしまえば

クリス「貴様！！！」

クリスが凄い迫力で明久に詰め寄るが明久も負けずに睨み返す。

明久「クリスのさつきの行動のモノマネだよ。

クリスのぬいぐるみが僕達にとつてはこの部屋なんだよ。  
誰が何を大事にしてるかなんて人それぞれなんだよ。  
それを侮辱して言い訳ないでしょ」

クリス「……そうか、それだけ大事な場所だつたんだな…  
自分の怒りと同じ気持ちだとすればさぞ先ほどの発言は腹  
がたつたであろうつ。

椎名京。皆。謝罪する。すまなかつた」

クリスはふかぶかと頭を下げた。

黛「そ、その……私もすみませんでしたつ！

そ、それでも！私は皆さんと一緒にいたいですつ！……」

まゆつちがきつぱりと主張した。

クリス「自分も……今のような発言はしないことを誓つ。  
だから、ここにこさせて欲しい」

そこへ

八雲「おつーーーーす！！いやいやいや聞け聞けお前達！

俺の運たるや、まさに豪運といつてもいい領域だぜ？

ガラガラ回しまくつて豪華商品GETだぜ！

わざ、寿司の残りでもつまみつつ皆で俺の偉大さを祝つてくれ！

まあ今日はネタ卵だらけだがな！

……つてあれ、なんだこの空氣？ずるいぞ皆！

れ！

俺のいない間に何青春っぽい気まずい雰囲気になつているんだよー！」

明久「お、落ち着いてよハ雲…実は……」

明久がハ雲に今起きたことを話す

ハ雲「ふーん。なるほどねーってか、話もう全部解決してんじゃん。クリスもまゆっちも謝つたから終わりじゃね？」

大和「まあな」

ハ雲「ま、一回ぐらじこいつこの仕方ねえわな」

百代「寛大な処置じゃないかキャップ。同意見だ」

京はまだ拗ねていたが大和に任せることにした

ハ雲「とりあえず既。今ちょっと気まずい思いをした関係を修復する意味で

今度の連休旅行に行かねーか？」

一子「旅行！？」

ガクト「いきなり発言したなお前」

一子「いやーアタシもさつきクリに言おうと思つたケド

アタシこの時は自重しとけってキャップに言われてるんだよね」

雄一「しつかり躰られてるな」

秀吉「それより旅行とはどういってんじや？」

八雲「ふふ。商店街の抽選で見事引き当てて来たのだ。  
じゃーん！2泊3日箱根旅行団体招待券！！！」

ガクト「な、何い！？んなもん当てたのか！」

康太「…それ何位？」

八雲「2位。ちなみに他は全部ティッシュでしょんぼり」

大和「いやいや十分な成果だろ」

八雲「だから今度の連休で皆で旅行だ。

雄一や秀吉、康太、クリスもまゆつちもいいな。つか来い」

黛「はい、是非！」

クリス「箱根温泉と言えば有名だからな。楽しみだ」

雄一「旅行が楽しみだな」

秀吉「皆で旅行とは楽しみなのじゃ」

康太「……必ず行く」

八雲「うーし、決定だな！さあもうパツと行こぜ」

そしてハ雲が寿司の残り物を取り出した。

ハ雲「今日は量が多いから軽い寿司パーティーだな！」

ガクト「うむ、ネタがタマゴだけじゃねーか！」

大和「今日はまたなんでこんなタマゴばっかり」

ハ雲「ネタが偏るのはよくあることだ。ヤー食え」

皆は文句を言いながらも食べていく。

一子は愚痴も言わずドンドン口に放り込んで行く。

雄二「つて明久には驚いたな」

明久「え？何が？」

雄二「お前がああも発言ができるとはな」

秀吉「ワシも驚いたのじや」

ハ雲「まあ明久は大和と京がいない間、俺達ファミリーのブレーキ役だったしな」

明久「大和と京がいなかつたら暴走しちゃうからね。最初は本当に苦労したよ」

康太「…………それは大変そう」

雄二「それなら納得だな」

その後は眞今までより少し仲がよくなつたように見えた。

## 番外編 川原での出会い

クリスと黛との一騒動後のある日のこと

明久「よし、パーティグッズもしつかり買ったね」

ハ雲「これで今度の旅行も盛り上がるな」

俺と明久は旅行の準備もかねて買い物をしていた。

明久「じゃあ、僕はこれから雄一たちと遊ぶ予定があるからここで

ハ雲「ああ、そうだな。荷物は俺が寮に運んでいるから」

明久「そう?ならお願いするね」

明久は雄一たちと遊ぶと言う事で帰つていった。

俺は今日はプラプラしていきたいので今回は一人で行動と言つ事だ。

明久SIDE

僕はハ雲と別れ家に向かつて歩いていた。

明久「雄一たちが来るまで時間があるな

僕はハ雲と別れ家に向かつて歩いていた。

明久「なら少し川原でゆっくりしようかな」「

ちょうど川原近くを歩いていたので川辺近くまで降りて行き、いつも僕がくつろぐスペースに腰を下ろそうとするとそこには1人先客がいた。

明久「お隣いいですか?」

「??? 「んー? いいよ」

明久「じゃあお邪魔して」

明久は先客の女性の近くいき寝転がった。

明久「風が気持ちいい」

丁度寝転がった時風がまつた

「??? 「きみー。よくここにくるのー?」

明久「そうだね。ここにはよく来るかな。ここ涼しいし風が気持ちいいからね」

「??? 「そうだねー」

隣にいたお姉さんも僕と同じように横に寝転がっていた。

明久「あつ僕は吉井明久っていうんだ? お姉さんは?」

辰子「わたしはねー辰子っていうんだよー」

明久「辰子さんか、辰子さんもよくここに来るの?」

辰子「うんーよく来るよー」

明久「そななんだ」

僕は辰子さんと他愛もない会話をして時間を潰した。

明久「そろそろ僕は行こうかな。

じゃあね辰子さん。また会えるかもね

辰子「そうだねーバイバーイ明久君」

明久「バイバイ辰子さん」

僕は辰子さんにお別れを言つと家に戻つていった。

その後は雄一たちとゲームをして遊んだ。

番外編 川原での出会い（後書き）

今回娘子を無理やり登場させてみました。

少し文章が短くなってしましました

## 番外編 町での出会い

俺は明久と別れたは良いものの明久から荷物を預かっている状態なので、

いい感じに荷物が邪魔だな。

・・・・・・・・なら

ピィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

俺は犬笛を吹いた。

一子「何? キヤップ?」

八雲「悪いんだけど今から昼飯おじるからこの荷物俺の部屋まで運んでくれないか?」

一子「飯! ? . . . しょうがないわね。やつてあげるわ」

八雲「さすがワン子」

俺とワン子は近くのレストランに入り食事をおじつてから近くをぶらつく事にした。

ワン子はステーキを食つた後言われたとおり荷物を持って寮まで走つていった。

俺はワン子と別れた後商店街をぶらついていると

? ? ? 「うーん? 困ったね

なにやら困つて困つてせうな女性の姿が田に入つた。

何か困つてそだし助けるとするかな。

俺はその女性に近づき声をかけた。

八雲「どうしたんですか? 何かお困りのよつですナビ?」

「え? あーちよつと道に迷つちゃつてねー」

八雲「そなんですか? 僕でよければ道案内しますよ」

「え? そつ。……ならお願ひしようかな」

女性はおそれく俺より年上な気がする。  
しかもかなりの美少女だな。

八雲「ドコに行きたいんすか?」

「え? 「えつとねつあるんだけどいいかな?」

八雲「いいですよ。お姉さんは今は観光できたんすか?」

「ちよつと違うなー。私はね今度この町に引っ越していく予定なんだよ。それでね下見もかねて来たはいいんだけど道に迷つてね」

八雲「そなんすか? ジャあこれから同じ町民になるわけですね」

「もうこいつ」とだね。で、まずはこの場所なんだけど

女性が指差した地図の場所は

????「確かに文月学園って言つたかな?まずはここに行きたいんだ  
けどわかる?」

八雲「わかりますよ。だつて俺この生徒ですし

俺は女性を連れて学園へと向かつ。

????「そりなんだ!なら同じ学園の生徒になるつて訳だね!」

八雲「そうですね。ちなみに俺は2年っす」

????「残念ー私は3年なんだ」

八雲「そりなんすか。それは残念ですね。でもこの時期に転校つて  
珍しいですね」

????「おとんの仕事の都合でね」

八雲「それは大変ですね」

????「そりなんだよ」

俺と女性は他愛もない会話をしながら学園へと向かつていった。  
学園には鉄人がいたので自分は女性の用が終わるまで学園内をふら  
ついて時間を潰した。

????「『めんね。待たせたね』

八雲「いいですよ全然。次はドコを案内したらいいですか？」

「えっとね次は商店街に連れて行って欲しいかな」

八雲「商店街ですか。分かりました」

今度は女性を商店街へと連れて行き、商店街の中を案内した。

「今日はありがとうございました。親切してくれて」

八雲「別にいいですよ。これから同じ学園のしかも先輩になるわけですし。

あつそりまだ自己紹介していなかつたですね。

俺は2・Fの真田八雲つて言います！これからよろしくお願ひしますね先輩」

松永「そうだね。私は今度、文月学園3年に転入する松永燕だよ。  
これからよろしくねー八雲君！」

あつそりだーこれお近づきの印だよー」

松永先輩がそういうと何かをポシヨットから取り出し俺に渡してきました。

松永「自家製の納豆だよー味は保障するよ」

俺は先輩から納豆を3パックもらつた。（1パック3個いり）

八雲「ありがとうござります松永先輩」

松永「気に入つたら私に言ってねあげるから。  
じゃあ今日はありがとうね。またね」

そういうと松永先輩は駅のほうに向かつて走つていった。

会つた時から思つていたが先輩かなり強いな・・・。

俺は納豆を待ちながら寮へと帰つていった。

**箱根旅行編 ～まさかの友情～（前書き）**

今話でついに50話突破です。

皆様の応援のおかげです。

これからも応援よろしくお願いします。

## 箱根旅行編 ～まさかの友情～

「ゴールデンウィーク真っ盛りな朝。

今日は昼からファミリー総出で箱根だ。

大和「・・・にしても、皆もう起きてる。早いなあ」

クリス「今日は旅行なんだぞ直江大和。たるんでいるな」

秀吉「そうじゃぞ大和よ。皆との旅行なんじゃから楽しみなのじゃ」

康太「（コクン）」

明久と雄二と秀吉と康太の4人は前日からこの真田寮に泊り込んでいた。

秀吉を除く3人は明久用に貸した部屋でとまり秀吉は俺の部屋に泊まつた。

最初は4人まとめて明久の部屋にしようとしたが、

康太が秀吉と一緒に部屋だとつだけで興奮して部屋を血で染めそうにしていたので俺の部屋に泊めた。

もちろん川神姉妹も貸している部屋で泊まつていった。

え？ ガクトはつて？ あいつは家がすぐ近くだから自分の部屋だろ。

一子「まだ時間があるからアタシは少しランニングしてくるね」

八雲「ならワン子、俺も一緒に付き合つぞ」

一子「ならキヤップ、川原まで競争よ！」

ワン子はそういうと玄関を飛び出して走つていった。

ハ雲「面白い、乗つた！」

俺は風だ！風は誰にも止められねえ！」

そのあとをハ雲が追いかけていった。

クリス「自分も一日のノルマであるトレーニングを行つか

クリスも庭に出て日課のトレーニングを始めた。

明久「皆、おはよう。あれ？ハ雲やワン子やクリスは？」

雄二「ハ雲と一緒にランニング、クリスはトレーニングだ」

秀吉「そういうえばハ雲は道場の師範代じゃったの？」

大和「まあな。いつも自由気ままに行動しているからな」

明久「でも一日一回は必ず道場には顔を出しているよ」

そのあとは各自時間まで自由に過い」していった。

明久とまゆっち、京、康太、雄二の5人が昼の弁当の支度を、  
大和は京の監視をしている（劇物阻止のため）

ハ雲とワン子、百代、クリス、ガクトの5人は各自でトレーニング  
中、

秀吉はハ雲に頼まれパートイグッズの確認作業をしていた。

「川神の町から箱根湯本までは電車で約2時間弱。

川神駅から“特急踊り子”に乗れば1本だ。

俺達全員会わせて12人なので

特急電車は4人座席がデフォなのでちょうど収まる形になった。

ちなみに席は

明久 百代 一秀吉 雄二  
一子 八雲 一康太 岳人

クリス 黒 一  
大和 京 一

と言ひ感じになつてゐる。

ガクト「まゆっち。そろそろ腹が減つた。弁当持つてきてるんだろ

？」

黛「！ はい！おにぎりです！！」

ガクト「いや顔こえーからー緊張すんなつて

まゆつちは多少は俺達と一緒にいることがなれたけど表情がまだ硬かつた。

黛「あつ・・・す、すみません意識しちゃつて」

雄二「ガクトなんて意識するだけ無駄だぞ」

明久「そつだよまゆつち。」「コラ相手に緊張するなんて無駄な事だよ」

ガクト「おじいじいことだお前ひ」

雄二「事実を口にしただけだ」

一子「うーん、ウズウズしてきたわねえ。列車内を走り回つたらやつぱりダメ?」

京「うんダメ。やつたらこれからあだ名はスペツシマン」

一子「うわあああ、そんな変態みたいないやあああ」

ガクト「ほれへやまほ、はこねにいつたは…」

秀吉「食べ物は飲み込んでからしゃべるのじや」

クリス「そつだぞ木下秀吉の言つとおつだぞ」

大和「こいつ食べ方も江戸では許されるんだぜ」

クリス「さすが日本だなー」

秀吉「いや、嘘じやからの…」

ガクト「で、大和。箱根に行つてビーすんのかつゝ一話」

大和「打ち合わせどおりだる。1日田テキトー。

2日田は大自然で釣りとか。3日田は名所観光」

明久「細かく決めてもその通りに動く皆じやないし」

京「集団行動の和を乱すのはいけないよね」

大和「お前が言つな」

箱根湯本。旅館は山の上なので本来バスだが。

一子「アタシは走つて旅館までいきまーす」

康太「山道、車で30分。旅館まで結構距離がある」

百代「今日のノルマは脇までに十分こなしたろ私達は」

一子「まだまだ。駆けて駆けて駆けまくるのよ！」

勝負よクリ！どつちが旅館まで先に着けるか

クリス「面白い。自分もノルマはこなしたがそこまで鍛錬に精を出すなら付き合おう」

百代「頑張れ。荷物は任せろ。バスのやつは乗り込めー！」

八雲「明久荷物頼む。俺はあいつらと行くよ。色々心配だし」

明久「うん、お願ひね。僕じゃあの2人にはついていけないから」

八雲「了解」

結局、八雲とワン子とクリスだけが駆ける事に。

明久たちがバスで先に旅館に向かうと、  
綺麗な宿だと思ったら……霧島財閥傘下の旅館だった。

雄一「げえ翔子！？ なんでここに！？」

しかもなぜか霧島さんもいた。

翔子「…雄一。待つてた」

大和「待つてた？ ってことは俺達が来るのを知っていたのか？」

雄一「何故だ！？ 俺は話していないぞ」

京「あつ私が話した」

大和「京がか！？」

京「うん。話してみたら氣があつて」

なぜか京と翔子は氣が合つ仲になつていた。

きつかけは翔子が京に雄一をビリしたら捕まえておいていられるか  
聞いたのが始まりらしい。

翔子「…椎名にはいつもお世話をなってる」

京「ギブアンドテイクだよ」

明久「何か京がからむと恐ろしく聞こえるよ。…雄一」「愁傷様」

愛子「あれ? ムツツリーー君たちだ。君達も遊びに来たの?」

すると奥から△クラスの工藤愛子と木下優子の2人が姿を現した。

康太「…工藤愛子」

秀吉「姉上! ? なぜ姉上がここに?」

優子「代表に誘われたのよ」

ガクト「本当に似ているな」

黛「そつくりです」

松風「ぱねえ程似ているよ

優子「なにあれ?」

秀吉「…色々あるのじゃ」

優子「そういうえば真田君は?」

明久「八雲なら駅からワン子たちと走つてきてるよ」

秀吉「もうそろそろついてもよそうな時間じゃな」

大和「…あつ来た！ 走つてきやがつた」

八雲「俺は負けねえ！！」

八雲がワン子やクリスたちより先に旅館の前にたどり着いた。

一子「さすがキャップね。アタシもまだまだわ」

クリス「八雲がここまでやるとは、次は負けん！！！」

大和「思つてたより早かつたな。ワン子のことだから公道じやなく山道を行くかと思つたが」

一子「アタシはそうしようかと思つたけどキャップが…」

八雲「皆を待たせるのは悪いからな。

つてアレ？どうして霧島たちがここにいるんだ？」

明久「実は

明久が八雲たちに事情説明中。

八雲「へえ、京にそんな友達ができるなんてな。良かつたな大和」

大和「まあ友達が出来る事はいいんだが…」

雄二「考へてゐる事が恐ろしいんだ…」

八雲「ならせつかくだし一緒に行動するか」

雄二「おい、俺達の話聞いてたか！？」

八雲「まあいいじゃないか？で皆どうだ？」

百代「かわいいから問題なし」

ガクト「同じく」

一子「アタシもいいわよ」

黛「私もかまいません」

クリス「いいんじやないか」

秀吉「ワシも良いぞ」

康太「いい写真が撮れそう」

京「翔子なら全然かまわない」

明久「僕も全然いいよ」

八雲「そつちは？」

翔子「私は大丈夫」

愛子「僕も〇〇だよ」

優子「アタシも代表たちがいいならここわよ」

八雲「じゃ、そういうことだ。面接しもつば」「ばい

ということ急遽ファミリーだけではなく  
霧島たちを含めたメンバーで旅行を楽しむことになった

箱根旅行編 ～観きー！～（前書き）

今回はシモネタがあるので苦手な方はバックしてください。  
それでも良い方は楽しんでいくください。

夕食後。至福の温泉タイム。

まさに、覗きが決行されようとしていた。

京「では、男湯を覗きます」

ただし、女湯で。

優子「なんでこんな事になつてるのよー」

翔子「……夫の状態を観察」

京「そういふ」と

一子「やめときなさいよ。つてか大和以外の男が見えたらいどうするの京的に」

京「しまった。その可能性を考慮していなかった」

翔子「・・・失敗」

京「では聞き耳をたてるぐらいで... 京イヤーは地獄耳」

翔子「それなら私も...」

優子「代表まで」

愛子「面白そうだから僕も」

優子「愛子まで!?」

一子「アタシは知らないわよ。どうなつても」

優子「どうこう」と川神さん?」

一子「一子でいいわよ。だつてあつちには」

一方、男湯では

明久「ふう...いい湯だね。温泉はいいね」

雄一「ああ。たまには」つづのものいいな

秀吉「真田寮は温泉じゃから羨ましいのじや」

八雲「でも露天風呂がいいんだよな」

大和「そうだな」

八雲「ん？お前ら少し耳を塞げ」

明久「え？分かつたよ」

皆は俺が言つたように耳を塞いだ。

八雲「真田流『円鳴衝』」

俺は素早く拳を大地にを何度もたたきつけた。

八雲「もういいぞ」

雄一「なにをしたんだ？」

八雲「ちょっと聞き耳立ててるヤツにオシオキをしただけだ」

皆「？」

円鳴衝は大地や水面に拳を高速で叩きつけて  
その時に出る衝撃波で相手の聴覚を狂わす技だ。  
まあ加減したから耳が少し痛いだけですむけどな。  
それに耳を塞げば防げる。

翔子「・・・耳が痛い」

愛子「今の何?」

京「あっちにはハ雲がいるのを忘れてた」

一子「だから言ったのに」

優子「そういうことね」

聞き耳を立てていた3人に罰が下った。

またまた男子風呂

ガクト「見ろ貴様ら!俺様の肉体美!!」

明久「少しばかり隠そよ!グロいんだよガクトのは!」

大和「まだ未発射みたいだがな」

ガクト「うるせえよ!!」

康太「写す力チがない」

明久「ムツツリーーーのは女性専門だもんね」

康太「(フルフル)」

ハ雲「つて秀吉と康太はタオルで体隠すなよ。男同士なんだから隠す必要ないだろ」「

大和「キャップとガクトは堂々としそぎだろ」

秀吉と康太はタオルで体を隠しての入浴。

ハ雲とガクトはマッパで、タオルは肩にかけている。

今、康太が秀吉に反応しないのは  
周りの女子のスペックがいいので秀吉のことにはあまり気が言つてない為だ。

雄二「ガクトはバズーカでハ雲のはマシンガンか」

明久「連射には定評がありそうだね」

大和「ガクトのは暴発しそうだな」

ガクト「そういうテメエラのはどうなんだよ」

大和「俺のはマグナムだな。重い1撃をズドンと」

雄二「俺も同じだな」

明久「僕のはノーマルかな」

康太「…下品」

ハ雲「なあ康太。お前もタオル外せよ。ムツツリの名が泣くぞ」

康太「そんな名はない」

八雲「秀吉もだぞ」

ガクト「案外2人共皮のホルスターに入つてたりしてな」

秀吉「…………ワシだつて好きでそうなつてるわけじゃ……  
・・・」

康太「そんな事実は認められない！！！（フルフルフル）」

明久「ん？つまりそれって・・・」

大和「遠まわしに考えてあげるよ。それが優しさだ」

明久「そうだね」

八雲「むけていないのか」

秀吉「うわああああああ！！！！！」

康太「（フルフルフルフルフル）！！！！！」

2人は恥ずかしくてお湯にもぐつた。

雄二「それ遠まわしじゃなく最短距離だろ」

八雲「頭を撫でるように優しく言つたのに」

ガクト「言葉のチョイスが殺しにいったんとしか思えねー」

八雲「そういうえば2人のまだ見てないなー。俺に見せてみ?」

秀吉「何故そういう展開になるのじゃーー。」

結局2人はタオルを外す事はなかつた。

別に男同士なんだからいいだろ。

ガクト「そういうあつちは女子風呂か」

八雲「そうだな」

ガクト「大和。俺様は明日覗きをしたいぞ!」

康太「（クワッ）ーー！」

大和「やめろよ。そんなんではしゃぐのはお子様だぜ。  
…なんていうのは素人だ！覗きたいなら覗け！」

ガクト「お前のその柔軟な考え方、俺様好きだぜ」

康太も大和に向かつて親指を立てていた。

雄二「おい、いいのか」

大和「それに覗くつていっても百姉たちじゃないんだろ？」

ガクト「無理無理。百姉に察知されて終わる。

山の下のほうにも旅館があつて、頑張ればそここの女湯見れるかもしない」

康太「…調べたら明日女子大学生がくるらしい」

ガクト「さすがムツリーー」

最後は邪念たっぷりの一皿だった。

箱根旅行編 ～2日目、皆で釣りだ～

旅行2日目 爽やかな天氣だつた。

女性陣が着替えている間、男性陣はロビーで遊ぶ。

そこへ

一子「男衆ー！お待たせー！さあ行きまつしょー！」

そこへファミリーの女性陣と昨日着ていた霧島たちがやってきた。

大和「釣りの手続きはしておいた。竿も借りたぞ」

京「本當だ、立派な竿だね。触つてもいい？」

大和「この俺が手に持っている釣竿なら触つていい」

京「チツ」

翔子「…………」

雄二「翔子、同じ事考えるなよ」

翔子「…………わかつた

雄二「なんか間があつたが…………まあいいか」

黛「皆で釣りなんて……素敵です」

百代「一応確認しておくけど釣るのって魚?女?」

明久「一応つつこんでおくけど魚だよ」

質、ウキウキしていぬまつだ。

百代一にじらへんでいいだらう。ナイズ景色だなあ」

優子一本当ね。たまにほんとうのいいわね

愛子「代表と一緒に来てよかつたよ」

八雲「よーし盛大に釣つてやろうぜ！ひやつほう！」

クリス「おい、エサをつけないと」

八雲「現地調達でいいんだよ。岩の下には虫がいる！  
で、この虫を針につけて釣り開始。

「ヤマメだよ！」

明久「全力で満喫してるねー、まるで野生児だよ」

京「次回“アキ覚醒僕だつて釣つてやる”にご期待ください」

明久「そこで期待されても視聴率とれる自信ないよ」

優子「ねえ真田君。隣いいかしら？」

アタシ釣りつて初めてだから教えて欲しいのだけど」

八雲「ん？いいぜ。まずは針に虫を」

俺は優子に釣りを教えながら魚をつる。

ガクト「見てる、俺様がカツコイイ見本示してやる」

明久「あ、まだオチには早いよ」

ガクト「オチねえよ！」

京「ガクトが落とさないと次のシーンに移れないよ？」

雄一「そうだぞ京の言つ通りだぞ」

ガクト「言つてろ。いつもワイルドな俺様に惚れんな」

ガクトは釣り中の百代の隣に陣取った。

ガクト「俺様の釣りテクが素晴らしいから結婚を前提に付き合ってくれモモ姉！」

百代「ほー。動物的面白い求婚だ。見せてもらおうか」

ガクト「うひしゃ。今から釣りゲーになるぜ」

ガクトは意氣揚々と釣り糸を投げ込んだ。

それは百代の糸と絡まってしまった。

百代「邪魔だ！！もつと遠くで釣れ！！」

百代が邪魔なガクトを殴り飛ばす。

ただ殴り飛ばした方向が

優子「え？」

俺と優子がいる方向だつた。

八雲一よつと

俺はすぐさま優子の前に立ち、ガクトを百代のぼうに蹴り飛ばす。

ハ雲 - おい 百代危ないだろか!!

百代一すまなし！」

ハ雲・江にかじやなくあこせは飛立せよ

百代「そうする」

俺がそういうと百代のほうに飛んでいったガクトを今度は誰もいない方へ殴り飛ばした。

百代「わるかつたな」

優子「い、いえ」

秀吉「見事に吹っ飛ばされたのじゃ」

明久「見事にオチつけたね」

康太「…それがガクト」

一子「アタシは釣りの前に修行しようっと!」

百代「ま、時間もたんまりあるしそれでいいだろ。  
弟、私の分も釣れ。3匹以上釣つていないと私刑な」

明久「厳しい法律だね」

百代「京格闘修行だ。妹と一緒に稽古つけてやる」

京「謝々」

大和「最近素手も鍛えるね京」

京「大和を荒波から超守るためです」

大和「荒波なぞ自分で乗り越えてみせる」

京「ならば大和の盾になる」

大和「お前が盾になる状況に持つて行かせない」

京「かつこいいな大和は」

大和「一応、京の彼氏だからな」

百代「いちゃつく前に鍛錬するぞ。来い京」

一子「今日も地道に鍛えて着実に強くなるのよー」

川神姉妹により京が連れて行かれた。

クリス「秀吉悪いな」

秀吉「これくらいお安い御用なのじや」

秀吉がクリスの分のエサを針につけていた。

向ひでは明久がまゆっちの代わりにエサをつけてあげていた。

雄一は翔子と釣りを楽しんでいるようだ。

康太は愛子と何か雑談をしながら釣りをやっていた。

ハ雲は優子と大和と一緒に釣りをしてのんびりすごしていた。  
ちなみにハ雲だけは魚を10匹以上釣つていたが・・・・・

箱根旅行編 ～不穏な気配！～

しばらくして、百代が帰ってきた。

明久「アレ？ ワン子と京は？」

百代「組み手に入った。あれは好きにやらせると

大和「京がどんどん強くなつていくなあ…」

八雲「大和そのうち京に襲われるんじゃないかな？」

大和「それはないと信じたい」

百代「じゃあ私は弟でも襲おうかな」

明久「返り討ちにして逆に姉さんを泣かせてあげるよ

明久は言つた瞬間、思いつきりその場から駆け出した。

百代「んーそういう負けず嫌いのところ好きだぞ。

30秒待つてやるー！ 逃げる逃げるー！」

黛「な、なにやら狩りが始まりそうな雰囲気ですが？」

大和「いいんだよ、姉弟のコノコノケーションだから

優子「随分とまた過激なコノコノケーションね」

クリス「本当だな」

雄二「頑張れよー明久！！」

愛子「一緒にいて飽きないね」

康太「命がけ」

秀吉「アレを見るとワシら姉弟の『ワニケーション』なぞ軽いほう  
じゃな（ボソッ）」

八雲「ん？何か言ったか秀吉？」

秀吉「何も言つてないのじや」

百代が30秒数え明久を追いかけに行つた。

・・・・・・・・

明久&百代SIDE

百代「お、なんだ弟。もつ逃げるのあきらめたのか。つーかまーえ  
いた」

姉さんにガシツと抱きしめられた。

甘い芳香と、しなやかな体に包まれる。

百代「さてさてどう可愛がつてくれよつか。んー？」

普段ならこの後、いじめコンボにつながるが…

百代「姿は見えないが私達以外にも人が多くいるな」

姉さんが抱きつきながら、耳元でささやく。

明久「やつぱり？今、森の奥に人影が見えたんだよ。  
それになにかやばそうな気がしたからこれ以上奥に行くのは  
やめたんだ」

百代「賢明だな（頭なでなで）相手は一般人じゃないな。  
人数もたくさん潜んでるな。30人はいる」

明久「なんだかいきなり不気味な展開だね？  
ハ雲もこの状況に気づいたようだしね」

向こうを見るとハ雲が動きを見せていた。

百代「あつちはハ雲たちがいるから大丈夫だろ。  
面白くなってきたじやないか」

何やら不穏な事態なのに、緊張感がなかつた。

それは姉さんがあまりに圧倒的で強すぎるからだろ？

百代「お前はそこまで待つていろよ」

明久「僕も姉さんについて行くよ。

僕は姉さんのストッパーだからね

百代「ならあまり離れるなよ」

明久と百代の2人は森の奥に入つて行つた。

八雲たちSIDE

雄二「おつ明久が川神に捕まつたな

秀吉「頑張つておつたのじゃがの」

八雲「もう少し鍛錬が ん?」

大和「どうした? 騒しい表情をして」

八雲「雄二! 皆を川辺に集合せろ。ガクトーお前は皆の前に立て!  
!」

雄二「どうしたんだ? いきなり」

八雲「森の奥から不穏な気配を感じた」

雄二「何だと! ?」

八雲「百代と明久もそれに気づいたらしく」

大和「それでか」

八雲「ガクトとまゆっち、クリスがいるからなおそらく大丈夫だろうから

大和たちはワソ子と京たちと合流してくれ

大和「わかつた」

優子「真田君はどうするの？」

八雲「森の中に向かう。百代と明久も中に入つたみたいだしな」

優子「あ、危ないわよ」

愛子「そうだよ危険すぎるよ」

康太「危険」

雄二「ここは川神に任せたほうがいいんじゃないかな」

八雲「大丈夫だ。じゃあ行つてくれる」

そういうと八雲は森の中へと駆け出していった。

秀吉「大丈夫じゃろうか八雲は？」

大和「あーそれは大丈夫だろうな」

ガクト「だな。くやしーがあいつは強いからな」

雄二「ハ雲つて強いのか！？」

大和「ああ、大和はファミリー内では2番目に強いぜ」

康太「2番目！？」

優子「そんなに彼つて強いの！？」

大和「一応道場の次期当主だからな」

雄二たちは驚きながら森に向かっていくハ雲の背中を見ていた。

箱根旅行編 ～挑戦者！～

一子 & 京 SIDE

一子と京は皆から離れた森の中で組み手をしていた。

京「せいっ」

一子「あぶなー、やるわね今、の蹴りは鋭かつたわ！」

京「武器がなくともある程度はやれないとな」

一子「大和のためか。さすが京ね。でもアタシだつて進化してるわ！」

2人がやや一子優勢で攻防を繰り広げていく。

が、同じタイミングで攻撃を中止する。

自分達の組み手を見ている第3者の存在に気づいたからだ。

女軍人「お見事です、サムライガール」

外国人だった。長身に迷彩服姿が決まっている。眼帯が威圧的に感じた。

京「？ こんなところに人が……」

女軍人「ほれぼれするような動きでしたね2人とも」

一子「ちょ、日本語よ！外国人が日本語しゃべつたわ」

京「や、クリスだつてそうでしじょうが」

一子「あ、そつか。あははは」

女軍人「私も武術に心得があります。貴方達のお稽古に私も混ぜなさい」

京「（いきなり何を言つてるんだ）」

一子「へえ、言わば国際試合。なんだか面白いじゃない。やりましょつか！実践訓練大歓迎！」

女軍人「いい返事です。それでは構えなさい」

京「ちょっとそんな安請け合いして…」

一子「！ 来るわよ！」

京と一子が反射的に飛び退く。

今まで2人がいた地点に外国人女性の鋭い飛び蹴りが放たれていた。

一子「京……この外国人！相当鍛錬積んでる！」

京「うん。強い…展開の速さに感つていたらやられるね」

瞬時に相手のおおよその力量を把握する2人。

女軍人「2対1でいいでしょう。かかつてきなさい」

一子「川神院、川神一子行くわよ！」

一子は天真爛漫に相手に襲い掛かる。

一子「せいせいせいせいせい！！！」

気合の入った拳と蹴りの連撃に外国人はじりじり後退していく。

女軍人「なかなかの動き認めてあげても良いでしょう」

一子「まだまだあ！」

一子の連撃は速度を増して繰り出されていく。

女軍人「が、私から見ればまだまだ。野ウサギに等しい」

防戦一方だった相手が反撃に転じてきた。

稻妻が落ちるような蹴りを一子は回避する。

女軍人「ハツ！」

即座に敵が蹴りの連撃を繰り出し攻守が逆転した。

一子「つ……重いつ。ガードの上から削られる！」

一子の攻撃より遅いが威力が段違いだった。

ラッシュを防ぎきって、一子は間合いを取り直す。

と、同時に今度は京が相手に向かっていた。

一子「つーー。腕がしびれるわ……でも燃えてきたー！」

一子がガードで痺れた腕を回復している間に、京と外国人の戦いが始まっていた。

だが、京は一子ほど上手く攻撃をせばき切れず後退していく。

京「やるなあ……」

女軍人「私への賛辞はもつと声高らかに言いなさい」

一子「京、」マジれ稽古といわず真剣で行くわよ

京「ん。本氣出す」

まず一子が相手に突進して行つた

女軍人「そりだ！可能性をすべてちやいけない」

一子は思い切り体勢を低くする。

一子「蛇屠り！」

相手の足下を刈り取るよウつな一撃。

女軍人「おつと危ない、」のまま踏み潰して…」

足下への一撃を跳ねて回避した相手はそのまま空中からしゃがみ状態の一子に蹴りを加えようとした。

一子「鳥落とし！」

俗に言づ、サマーソルトキックが相手を襲つた。

女軍人「対空！？あの体勢から馬鹿な、かはあつ！」

蹴つたのではなく斬つた。

そう形容するに相応しい鋭いサマーソルトが相手の体に直撃していった。

女軍人「馬鹿な……この私が嘘だ！」

体勢を崩しながら着地する相手。

京「次は私！」

女軍人「チイ！」

京が、着地の隙を見逃さずに襲い掛かる。

京「もらつた！」

相手が迫り来る京の顔面に牽制で放つた突き。

その突きを京の腕が弧を描くように打ち上げる。それに向かつて突き出された形となつた相手の腕。

その腕を掴むと京は体を回転させて相手の懷に潜り込んだ。

女軍人「なーーー!?」

全ては相手がそう思つた一瞬の出来事だった。

京「せやつーーー！」

京の背負い投げが綺麗に入つてゐる。

人体が地面に叩きつけられる豪快な音が響いた。

一子「ワオ！ やるわね京、竜巻みたいな背負いよーーー！」

一子「ワン子もナイス連携。飛ばせて落とす！」

イエイと、手を叩き合ひ仲良し二人組。

## 箱根旅行編 ～挑戦者の反撃～

女軍人「…………」

京に投げられた相手がムクリと立ち上がる。

一子「あれ？まだやるわけ。勝負ついたじゃん」

女軍人「…… Hasen [野ウサギ達め]」  
ハーゼン

ドイツ語です。【】は日本語吹き替えです。

女軍人「Ja [ヤークッ]ga【狩つてやる】」

京「……？雰囲気が」

京が違和感を覚えたのと同時に敵は突進してきた。

2人は冷静に左右へと展開し敵を挟む。

京「頭に血が上っているなら」

一子「これで眠りなよ！」

今度は2人同時に容赦なく蹴りを繰り出した。

それを敵は左右の手で同時に受け止めてみせる。

一子「この手応えは……木？」

相手はいつの間にか武具を装備し蹴りをガードしていた。

その2本1組の武具「」そは

京「トンファーか！」

敵はトンファーを皿の手のように自在に操り、まず京に狙いを定めた。

女軍人「Hasen Jagg!-!-」

武器を器用に回転させながら一撃が、防御した京をガード」と吹き飛ばす。

一子「京！」

京「つ、大丈夫！」

京をかばうように一子は敵の懷に飛び込んでいく。相当痛かつたが、回転攻撃は見た目ほど怖くない。それより突きの方が危険そうだ、と京は判断した。

女軍人「ハアッ！-!-」

一子が暴風のような攻撃をかわしていく。

一子「ち、このトンファーの乱撃、スキが無……」

女軍人「トンファーキック！」

一子「ぐつー?」

一子はガラ空きの腹部を蹴り飛ばされた。

一子「…く…はつ、…今のはきいた~」「

振り回すトントンファーニばかり氣をとられ、蹴りの注意をおこたつていた。

女軍人「ハハハ! H a s e n ! J a g g a ! ! !」

一子「けほつ、こりや死合いね…武器が無いのが痛いわ」

京「この手のは遠距離から射るに限るんだけど……」

弓矢が無い上に、素手では危険な相手。

一子はいい蹴りをもらいつつも、闘志たっぷりだ。  
とはいって、彼女も武器がないとやはりきつい。

**箱根旅行編 ～挑戦者の反撃～（後書き）**

女軍人がきれでワンド子と京がピンチになりました。  
さて次回はどうなるのかお楽しみに

京「（…しょーもない…誰にも知られてないけど…）」

京は“切り札”を、服の中から出そうとした。

女軍人「Hasen……」

百代「何してるんだお前。私の可愛い仲間と妹に対しても

女軍人「！？ 私の後ろをどるとは！」

百代「鬪氣を感じて来てみれば面白い展開になつているな」

明久「本當だ。こっちにも軍人がいるよ。ワン子、京大丈夫？」

京「モモ姉、明久」

女軍人「モモ…！？ そうか最強と名高い川神百代だな」

百代「勝負中か？襲われているのか？後者なら譲れ」

姉さんが心底嬉しそうに拳をバキバキと鳴らす。

クリス「何の騒ぎだ？……あ

そこへ雄二やクリスたちがやつてきた。

女軍人「クリスお嬢様」

クリス「マル君」

百代「おーおい、殺氣をおもめるのか」

一子「え? クリ知り合いなの」

クリス父「何やらややこしい事になつてゐるな」

クリス「父様!」

クリス父「クリス、我が娘。今日も美しい……」

紹介しよう。私の部下のマルギッテ少尉だ」

マルギッテ「マルギッテ・エーテルバッハです。覚えてなさい」

クリス父「部下が失礼を働いたようだ」

京「失礼といつレベルじゃなかつたけどね」

クリス父「自尊心が高く、とても優秀な人材だ。

近接戦闘に長けている分、君たちのような手練れを見ると勝負をふつかけるクセがある。  
その若さゆえの無鉄砲さが私は嫌いではない」

京「それで襲われたほうはたまらないけど、もういいや……めんどい」

一子「アタシはよくないわよ。やいマル!」

マルギッテ「野ウサギが私を呼び捨てに！？」

一子「今度はお互ひ武器ありで勝負よー！」

マルギッテ「人を指すのはやめなさい。マルもやめなさい」

クリス父「悪いがクリスと話をさせてくれサムライガール」

クリス「父様。何故このような場所に？」

クリス父「理由は一つに決まっているだらう」

クリス「と言いますと？」

クリス父「お前から連絡が来たからだ、友達同士でなんと

泊まりがけの旅行に行くというではないか……！」

そんな電話を聞いては、父親としていてもたつてもいられない。

心配でかけつけたのだ

クリス「それで…わざわざ。父様。自分は幸せ者です」

ガクト「オイおっさん、そんなに俺様達が信用なら無いか？」

クリス父「信用とかそういう問題ではない。

旅行と聞いてただ心配だっただけだ。

とはいえる、私も子煩惱のバカ軍人ではない。

せいぜい部下30人を率いて様子を見に来た程度だ

秀吉「十分にもほどがあると思うのじや」

優子「それ以前に軍つて何よ?」

クリス父「楽しそうで良かつた、愛しき娘よ」

クリス「はい」

百代「……やれやれ、聞いてられないな」

大和「娘が大好きな父親か。彼氏が出来たらそいつは苦労しそうだな」

クリス父「愛しき娘に彼氏が！？ふざけるなあ！！！！！」

クリスの父親は頭をブンブン振つて銃を取り出す。

クリス父「不穏な発言はやめてもらおう少年。

私が穏和でなかつたら発砲していたぞ」

大和「それは、温和でよかつたです、ええ。

以後、彼氏とかそういう事は口にしません」

クリス父「うむ。もし彼氏など出来たら、その男のために  
第3次世界大戦が起ころう」

マルギッテ「相変わらず中将殿のジョークは機知に富んでいます

皆「（絶対ジョークには聞こえない！）」

一子「話終わつた？いざ尋常に勝負！負けないわ！」

マルギッテ「……次の作戦開始の時間が迫つてゐる」

クリス父「悪いなサムライガール。マルギッテ少尉は優秀な人材だ。  
やるべき仕事が多くてな」

百代「だつたらわざわざ連れてくるなという話だな弟」

明久「ちょ、姉さん楯突くのは良いけど僕に振らないで」

クリス父「だが、君の願いは後日叶うぞサムライガール。  
マルギッテも君達の学び舎に転入予定だ」

ガクト「うおつ！？マジで？……アリだな」

京「どこまで親バカなんだか」

八雲「それ本当か！また面白くなりそうだな」

そこへ茂みから八雲が現れた。

明久「あれ？八雲ドコ行つてたの？」

八雲「ちゃつとな」

雄一「つてか過保護すぎだろ」

クリス父「ふ、私とてクリスと同じクラスにマルギッテを入れるほど過保護じゃないぞ。せいぜい、2・Aだな。優秀なマルギッテに相応しいクラスであるしな」

翔子「……私達と同じクラス」

クリス「おお、やうか。ではマルギッテをよろしく頼む」

雄一「ってかそれでも十分過保護だろー」

百代「そんなことより、森の中にはお前の部下を10人ほど撫でてといた。

ちやんと回収しておけよ

八雲「あつ俺も10数人撫でておいたからよろしくなー」

クリス父「なんだと！？私が誇る精兵達をか？」

マルギッテ！確認しろ

マルギッテ「…………全部隊連絡不能。制圧されていますね」

百代「軽く挑発したら乗ってくれてな。ははは」

八雲「あつちが先に手を出してきたからな正當防衛だな」

八雲と違ひ百代は満足そうに言った。

マルギッテ「貴様、いい気になるのはやめなさい」

百代「お前もやるか？部下達の仇を討つか？」

マルギッテ「…………やめておきましょ。撤収の時間です。

軍人は使命を守らなければ

クリス父「こちらもマルギッテが襲いかかつたようだ。

互いに遺恨ナシとしよう」

百代「ま、こちらもバカנס中だし、いいか」

クリス父「部下は責任持つて回収していく。ではな、クリス」

クリス「はい！」

クリス父「娘を頼む」

優しく言われた。

クリス父「…………頼むぞ？」

2回目は怖く言われた。

ハ雲「任せておけって！それより銃見せてくれない本物を見てみた  
いんだ！」

明久「ちょー八雲失礼だよ！」

八雲「大丈夫だつて。少しだけならいいだろ」

クリス父「機密事項だ」

そういうと2人は悠然と去つていった。

八雲「ダメだつたか」

秀吉「さすがに無理じゃろうよ」

優子「つてあんな事言わないでよ！心臓に悪いわ」

愛子「うん、さすがにアレは心臓に悪いよ」

一子「マルチーズか・・・・・覚えたわ！」

明久「覚えてないからね。マルしか合つてないからね」

## 箱根旅行編 ～大和とクリス～

気を取り直し、皆で釣り再開。

八雲「やつほうまたヒットだぜ。20センチ以上あるな。  
これ川下の釣り人に売りにいったら商売じゃね？」

雄二「確かに。それぐらいの大きさならできるだろうな」

八雲「よーーし。なら行つて来るぜ。ワン子修行がてら一緒に行くぞ」

一子「はーい！」

八雲とワン子は凄い速度で、川下へ駆けていった。  
・・・・・魚を数匹入ったショルダーを担いで。

大和「止めるヒマがねえ」

明久「仕方ないよ八雲だし」

百代「まあ私達は好きに動くさ・・・」

明久「釣りする気、もつない姉さんは」

百代「こつして自然と一体化しているだけでいい」

姉さんは川岸に座り素足を水につけて遊んでいた。

明久「姉さんは足指も綺麗な形してますよね」

康太「……！」

明久がそう発言すると康太は素早くカメラを構え百代を撮影しようとシャッターをきるが

百代「甘いぞムツツリー」

素早くその場から動いてカメラに写らなかつた。

康太  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
また、  
撮れなかつた

明久—ムツシロー—ドンマイヤー

ムツツリーの撮影技術は学園一を誇つていいほど画質が良く量も多い。

明久が康太を励ましていると、

大和「勝負だクリス！俺という人間を認めさせてやるよ！」

クリス「なるほど、力が伴えばさつきの言葉にも説得力が宿るな。

面白い。その勝負受けた」

黨「ああっ！？和やかな流れから急転していきます」

秀吉「落ち着くのじや 2人とも」

黛「ここは穩便に

クリス「お前と決闘することになるつとはな」

黛「ああつー? 聞いていない! ?

話を聞く限り、

クリスが大和のことを口先と小手先だけのタイプの人だと思われたみたいで、大和が自身の事を分からせるために決闘をすることになったみたいだ。

そこへ、下流から食材をたくさん持つて八雲と一子が帰還した。

雄一「ちゅうじこじこに来たな

一子「ん?」

百代「今、面白いことになつてるぞ」

八雲「なにー? よくわからないが俺たちがいない間にずるこそ!」

翔子「・・・面白い?」

そこで八雲と一子に事情を説明する。

八雲「大和とクリスが勝負・・・“決闘”をね・・・フム。

事情は分かった。結局勝負に行き着いたか。まあ仕方がないか

百代「何で勝負するかは平等に私と八雲で決めてやる

八雲「これは川神院と真田の名にかけて平等に行つ」

百代と八雲は先ほどまでとは違ひ眞面目に言つた。  
いくら2人でもこりういう場面ではマジメになる。

クリス「分かりました」

大和「なら、任せます」

雄二「単純な戦闘ならクリスが有利、頭脳なら大和有利だな」

優子「大丈夫なの?」

明久「2人が川神院と真田の名を出した時は眞剣な時だから大丈夫  
だよ」

百代「ただ、それには準備が必要だから明日行つ」

八雲「ま、それまで釣りを楽しもうぜ」

箱根旅行編 ～覗き～

明日に決闘を控えた2日目の夜。  
大和とクリスは喧嘩こそしなかったがお互い闘志をむき出しにして意識していた。

黛「うう・・・・・」

明久「どうしたのまゆっち？」

黛「い、いえ・・・・・あの、すみません、失礼します」

明久「？」

まゆっちは何か言いたそつたが何も言わなかつた。

ガクト「フツフツフツ。俺様出現。右良し左良し」

雄二「安心しろよ。周囲には俺達以外にいないぞ」

今この部屋には秀吉以外の男子が揃つている。

明久「どうしたのガクト？」

ガクト「じゃ早速、下の旅館の覗きに行こうぜ」

大和「何故俺達を誘う?」

ガクト「秀吉はこうい「う」とに興味なしな。  
キヤップはあまり女自体にそこまで興味ないからな」

だがお前達はエロイからな」

大和「そこまで俺はエロくない」

雄二「俺だつてガクト程エロクねえよ！」

康太「…………心外だ」

明久「ムツツリーにはエロイよね」

康太「フルフル」

ガクト「じゃあお前らは行かないのか？」

皆（男）「…………行く！……」

明久「つてアレ？ハ雲も行くんだ。こうこうの興味ないような気がしたけど」

ハ雲「気配消していくんだろそれなら訓練になるしな。

それに仲間はずれは嫌だ！」

大和「キヤップらしいな」

雄二「で、覗きポイントは分かっているんだな？」

康太「…………それはすでに調査ズミ」

明久「さすがムツツリー二だね」

大和「兵は神速を尊ぶ。早く行くぞ」

ガクト「では冒険に出発だ！財宝を求めて！」

俺達は大いなる一歩を踏み出した。

だが、

百代「くくく。キイタゾキイタゾー」

ラスボスが現れた。

ガクト「大変だ！いきなりラスボスだ！」

明久「気配殺していたな姉さん」

雄二「俺達の冒険はここまでなのか」

康太「…………無念」

百代「私も行こう」

八雲「はい？」

百代「私もねーちゃん達の裸を見る」

大和「ラスボスが手を組むと言つてゐるぞ」

ガクト「モモ姉は普通に風呂行けばいいでしょうが」

百代「私は無防備な肢体が見たいんだ。

どつも風呂場では視線が露骨過ぎるらしく  
皆、変に警戒してしまう。視姦が楽しいにな

大和「分かるような……」

百代「で、どつちだ?どこで覗ける?」

ガクト「頼もしい味方ががついたぜ!ムツツリー二案内を」

康太「…………了解!」

俺達は百代を連れて山の中へと入つていった。

百代がピトッと明久にくつづいてくる。

明久「な、なに?」

百代「胸が当たつて気持ちいいか?」

明久「…………やぶさかではないよ

百代「ふふふ、顔真っ赤だな。男の子じゃないか明久

百代は全く怒つていなかつた。

康太「…………ポイント到着。ターゲットはラクロス部女子学

生」

百代「ふりふりのピーチやメロンが並ぶ八百屋を堪能だ」  
やはり、この人はちょっとおかしい。

ガクト「さあ、ここの茂みをかきわけるとエメラルドが・・・・」  
ガクトが茂みをかき分けて進もうとすると

突如、警報装置が鳴り響いた。

装置「フシンシャハッケン フシンシャハッケン」

ガクト「な、なんだ！？」

康太「・・・・こんな装置昨日の昼間には無かった」

雄二「チツ、夜の間の警報装置か。敵も考えるな」

畠を調べる。カメラはない。姿は映っていない。

百代「む。早い。6人ほどの人間がこっちにくる」

大和「警備員の動きめっちゃ迅速だな」

百代「私やハ雲ならいくらでも切り抜けられるが、

お前達と一緒にでは姿を見られかねん」

ハ雲「だな。全員切り抜ける方法は」

大和「任せひ、女性の百姉がいる」と言い訳できる」

百代「いちいち言い訳などめんどいな」

ハ雲「だな」

百代は大和と明久を、

ハ雲は康太と雄二をそれぞれ片手で持ち上げた。

ガクトは百代の足に踏まれている。

百代「お前達は下の川まで逃げる、私とハ雲は走って逃げる」

ガクト「おいおいー下の川まで高セスゲーあるぞ」

雄二「ま、まさか」

大和「まさか落としたりしませんよね。ハハは」

明久「ま、まさか、そんなことしないよね」

康太「…………そ、そんな事するわけがないはず」

百代「問答無用。無事戻つて来いよ」

ハ雲「後で様子を見に行くから」

ガクト「うおおおおおおおおおー！」

大和「バカなああああああー！？」

雄二「嘘だろおおおおおお！」

明久たちは5人は5月のまだ冷たい川に放り込まれた。

百代「さて私も走つて逃げるか」と

ハ雲「さて、俺も逃げるかな」

百代とハ雲は、警備員達の間を堂々と走つてすり抜けた。

警備員男「突風？今、何か通つたか？」

警備員女「氣のせいでしょ？それより覗き捕まえないと

常人の目には何も映らなかつた。

大和「はづくしょーい！」

秀吉「しかし覗きとは馬鹿な真似をしたものじやな

ガクト「けつ、男として正常なのは俺様たちだぜ」

明久たちは全身濡れながら旅館にたどり着いた。  
もちろん百代とハ雲は濡れてはいない。

濡れて帰つてきたので温泉であつたまらないと、5月の川は冷たい。

大和「はつくしょーい！」

明久「大和大丈夫？」

大和「ヌウ・・・・・・オレサマ、サムケ、トレナイゾ？」

雄二「もしかしたら風邪でも引いたかも知れないな」

康太「・・・・・・早く休んだほうがいい」

大和「そうする」

寝るときはさすがに男女混合はマズイので  
霧島たちの部屋にウチの女子達が泊まる事になつていて。

もし男子が女子の部屋に寝ている間に侵入したら  
捕虜としてあらゆる尋問を受けるらしい。

正直そんな真似誰もしないのでどうでもよかつたが・・・。

ある男子達曰く

『女子側にも何かペナルティを作つて欲しかった』と

翔子「・・・・草木の眠るつつしみ時。今宵こそラブゲット」

雄一は貞操を狙っていた。

雄一「翔子！布団に入つてくるな！」

翔子「…………遅い。もう侵入した。

下手に騒いだら一緒に布団にいる事がバレる。  
そしたらアラ不思議、既成事実が

雄一「免罪だ！つてか誰の入れ知恵だ！」

それはもちろん京の入れ知恵に決まっています。

翔子「…………それに私だけじゃない」

雄一「なに？」

翔子が指差したほうに雄一は顔を傾けると

大和「た、助けてくれ雄一」

京「大和！」

雄一と同じ状況の大和がいた。

雄一「ひ、ヒデエ」

翔子「…………だから雄一」

雄一「や、やめるんだ翔子！」

眠りたいのに眠れない2人であった。

大和にいたつては明日クリスとの勝負なのに . . . . .

箱根旅行編

箱根旅行 3 日目

旅館の朝食はバイキング形式だつた。

一子の前には大量の皿が置かれていた。

—子ぐまぐま。お、このハム美味し。魚もグン

「一ワン子、」の牛乳とれたてでイケルらしそ!!

「清くていいわ」

百代は指でふき取りそれを舐める。

優子「本当に凄い食欲ね」

クリス「ああ、本当だな。改めて見ると凄まじい食欲だな」

愛子一 見てるだけでお腹いってほしいとなるよ」

黒一  
私はご飯おかわり程度です

翔子一・・・・・由紀江も凄い

百代「強さと食欲、そしや比例するものや」

一子「夜明けぐらいに起きてハ雲と一緒に修行してきたもん」

クリス「まあ自分も朝練はしているが」

一子「アタシから言わせればクリが少ないって」

クリス「自分はそこまで腹にはいりん」

京「ワン子、次何おかわり?」

一子「あ、野菜でお願い。肉系いきすぎたわ」

京「ん。まあタマゴでも食べてて」

一子「よつはつ、ひとつ（卵を次々と割る）

「いくさん・・・・・・（そして飲み込む）」

優子「それにバランスのいい食べ方をしてるわね」

クリス「お前はこの先も病氣とは縁がなさそうだな」

一子「うんーそう思い込んでるし」

京「毎日激しい鍛錬・たつぱり食事・寝たいだけ寝る。

ワン子に病魔入り込む隙、一切ナシ」

黛「もぐもぐ」

一子「そんなもん入つてきたら斬つてやるわ」

クリス「まゆつちは食べ方が綺麗だな」

翔子「…………育ちの良さが出てる」

愛子「本当に見事なものだよ」

黛「や、そんなものでじょうか?」

京「まあここに露骨な比較対象がいるし」

一子「がつがつがつがつがつ……」

百代「ウチは食事作法は奔放な方だからなあ」

京「クリスや翔子、優子は箸の持ち方完璧だね」

優子「そつかしら?」

翔子「ウチそつかつたから」

クリス「ああ、ドイツの時に友達の叔母さんに教わった。つて犬。しあわせも頭も食べるのか?」

一子「食べるわよ。全てエネルギーにしてあげるわ」

百代「クリ、お前の鯵の開き食べるといっかく残つているや」

クリス「そ、そつか…………」

優子「黛さんのを見ると綺麗で食べっこるわね」

クリス「本郷だ。比べると随分と自分のは雑だな」

黛「日本に来てちゃんと自分で馴染んでるなんて  
私には遠すぎると思こますよ」

百代「ああ。気にするな。少ししづつ覚えればいいさ」

黛「もう二度、大和さんまだ寝てるんですね?」

一舟「やつらと一緒に起きて朝ごはん食べれば良いのにね」

百代「ま、他の男達が起きて連れてくるだら」

黛「私、ちょっと様子を見てきますわ」

「うつこいつとまゆつは男子部屋へと足を運んでいった。

## 箱根旅行編 ～負けず嫌いな大和～

・・・・・ 部屋では

大和「はっくよーい！……お、検温終了」

明久「えつと8度1分もあるよ！大和完全に風邪だね」

康太「……川にダイブが原因」

ガクト「だつたら俺様だつて風邪ひいてるはず（元気）」

明久「ガクトは参考にならないよね」

雄二「だな。バカだからな」

八雲「で、どうするんだ。今日クリスと勝負だろ」

秀吉「熱出ててたら無理じゃ。やめたほうがよからう」

大和「やめた方がいいというかバレたら勝負してもらえないだろう。  
そして体調管理も勝負のうちだ。不戦敗になる」

八雲「だな。風邪でリタイヤでもお前の負けだ大和」

大和「それは嫌だ。勝負を挑んだ以上必ず勝つ」

明久「決闘の延期をお願いしたら？」

ガクトが原因なんだから責任とつてもらおうよ

ガクト「どーとるんだYO」

明久「実は昨晩ガクトがガイアに自分を捧げるとか言つて裸になつて庭に飛び出したから全力で止めたせいで風邪をひいた、とかどうかな?」

雄二「確かにそれなら女子達は信じるだろうな」

ガクト「やめる俺様がただの変態だと思われるだろ」

明久「あ、もう十分に変態だと思われているから大丈夫だよ」

ガクト「おいおい、真の変態つていうのは  
俺様じゃなくムツツリー二だろうが」

康太「…………失礼な」

大和「ともかくガクトの嘘は本人からボロが出るから駄目」

秀吉「ではどうするのじゃ?」

大和「誤魔化すしかないだろ。体は普通に動くしな」

雄二「宿の人に熱止めをもらつてくる。少しは効くかも知れないしな」

大和「すまない」

ガクト「なんか大変そうだな大和…………」

大和「お前のせいだろうが！！！」

ガクト「うむ。吠える元氣があれば大丈夫だ。心配したぜ」

大和「！ ガクトお前・・・・」

ガクト「ふつ」

大和「何まとめようとしてんだ、ふざけるな（蹴り）」

ガクト「ぐはあつ 結構・・・鋭い蹴り放つな お前・・・」

大和「明久、俺一目見て風邪だと分かるか？」

明久「分からぬ。でもバレるよ。付き合い長いし」

大和「少しだけ真実を言う。風邪気味で薬を飲んだ」  
だが体を動かすには支障がないってな

秀吉「やめておくのじゃ。そこまでして戦う問題じゃないじゃろ」

大和「俺はクリスに軽く見られてるんだ。そうはさせん」

ガクト「男の意地だな。分かるぜ」

明久「まあ大和は負けず嫌いだからなあ。

でも本当にやっぱそつだつたら止めるよ」

八雲「話はすんだな。

大和とクリスの決闘は続行でヤバくなつたらとめるだな

大和「ああ」

八雲「で、そこで話を聞いてるまゆっち入つて来い」

明久「え?」

黛「……………はい」

八雲がそういうとまゆっちが部屋に入つてきた。

黛「皆さんを呼ばうと部屋に来て……そしたら」

大和「うん。聞いたつて事だね。お願いがあるんだけど」

黛「お願いですか」

大和「俺が熱出している事、秘密にして欲しいんだ」

黛「で、でででも、そんな状態で勝負なんて」

大和「うん。ムチャは分かつてるんだけど負けたくない」

黛「で、でも……………」

結局まゆっちは大和に負けて秘密という事になつた。

## 箱根旅行編 ～大和VSクリス 前哨戦～

午前9時。大和とクリスは河原で対峙していた。  
観客は他の仲間達や霧島たち。

八雲「これよりクリス対大和のタイムンを行つ」

百代「ジャッジ兼司会進行は私とキャップだ。夜露死苦」

クリス「やや風邪氣味とのことだが？」

大和「なあに問題ないさ。さあやるうぜ」

京「昨晚、少し調子悪そつだつたもんね」

まあ京のせいもあつて大和の風邪まで進化したけどな。

黛「……うう」

一子「どうしたのよ？お腹痛いとか？」

黛「そういうわけではないのですが…心配です」

一子「別にガチで喧嘩するわけじゃないわよ。競うだけ」

黛「（大和さん…解熱剤は効いたみたいですが）」

百代「私は3分ほど考えた。公平な決闘方を」

八雲「まあ結局の所、川神戦役の収縮版をやろうがと」

黛「川神戦役？何かとてもつもない戦いの予感が」

京「これは中国でいうところの“童貫遊戯”」

黛「知っているのですか京さん？」

京「南宋の時代、童貫という元帥がいて彼が敵国の遼との間でやっていたものなんだけど。

兵力を失わず戦の優劣を決められる優れたシステムとして…」

八雲「まあこれは主に学園でクラス同士がやりあう時に使われる決闘法で、くじを用意するんだ」

クリス「くじ箱……その中に戦う種目が入つてると…」

八雲「その通り。くじで引いた種目で戦つてもいい。勝負を繰り返して先に5回勝つたほうが勝ちだ」

クリス「中に入っている勝負はどのような…？」

八雲「知力重視、体力重視、感性重視：色々な勝負が存在している。つまり勝つには様々な力が問われるわけだ」

クリス「なるほど」

八雲「本来は出た勝負に対して強いヤツが行く団体戦だけだ。それをタイムマンでやってもらひ」

クリス「5回続けて自分に不利な勝負が出来てしまったら？」

百代「平等にくじは入れた。普通そこまで偏らないぞ」

八雲「それに偏ったとしても“運も実力”のウチだろ。

俺はカリカリ君が5回連續で当たつた事あるしな」

雄一「それは凄いな」

明久「でも、それを全部食べてお腹壊したとこまで言おうよ」

八雲「あの時俺はバスの中で地獄の腹痛を戦った。

何度も隣の席にいたワン子にもうダメだと訴えた事か」

優子「それは一子さんも災難ね」

愛子「大丈夫だったの？」

一子「うん。アタシが隣でどれだけ必死に励ましたか」

八雲「お前あの時は涙目だつたからな」

一子「隣でお腹痛いって人間が“もうゴールしていいよね”とか言えば涙目にもなるわ！」

秀吉「それはとんだ災難じやのつ」

八雲「話が逸れたが運も実力。いいな」

クリス「ああ、複数回戦えるならクジでも問題ない」

大和「同じく」

八雲「じゃんけんでクジを引く番を決める」

クリス「では、はじめよう大和。じゃーんけーん」

大和「クリス。俺はチョキを出す」

クリス「（何ーこ）いつ自ら出す手を教えるとは・・・・・分からん。

そんな事をして何の得になる？……！？ そとかこいつ嘘を突く気だな。

という事は自分にグーを出せば大和はパーを。  
こしゃくな。ならばチョキを出してくれる（）」

クリス「じゃんけーんつぱいっ！――！」

クリス チョキ LOSE  
大和 グー WIN

クリス「ナニッ！？」

大和「は～（ため息）やれやれ予想通り過ぎる……  
やりやすいなあクリスは（上から目線）」

クリス「む……むむむむむーつ！――！」

腹立つ！大和腹立つ――――――！」

クリスは地団駄を踏んでいた。



箱根旅行編 ～大和VSクリス 1戦目～

雄一「ま。前哨戦は大和の勝ちだな」

京「こういう風に思考が読みやすい相手だから、  
勝負しても勝てるとふんだんだね大和は」

明久「（風邪さえひいてなければなあ）」

黛「（やはり……とめるべきだと思います。  
でもそんな差し出がましい事は、あう）」

百代「さあ第1試合の種目を決めるクジを引けい大和」

俺はクジ穴に腕を入れた。

京「あんつーそ、そこは」

大和「今日の運気を試してみるか（ゴソゴソ）」

京「な、中をかきまわすなんてえ」

大和「誰かそいつのイマジネーションプレイをとめろ」

八雲「了解。百代頼む」

百代「京。おあづけ」

京「チツ」

百代「あれ舌打ち？何その態度。あれー？」

大和「さあて……俺はこの赤の紙を選ぶぜ！」

百代「どれどれ。おー大和よ。お前凄いクジ運してるな」

ハ雲「ん？どれどれ。おー大和凄いなお前」

ハ雲も大和が引いたクジを見てみる。

大和「どんなもんよ。クイズ勝負とか頭脳系でさ！」

百代「じゃーん。

Chain Death Match」

大和「ははは殺せよ」

大和は笑うしかなかつた。

明久「……よりによつて肉弾系ひいてどうするのさ」

クリス「ふふふ。これは面白いなあ大和？ははは」

百代「ギブアップかライン外に出るかで負けとなる」

大和「特殊ルールとか何もないチエーンデスマッチ？」

百代「寝技ありだ。良かつたな。試合にかこつけて襲え」

クリス「な、ふ、不埒な！大和め！」

大和「俺は何も言つてねーだろ？が……う？（いかん、頭がボーッとする）」

クリス「姑息な手段を使うから運に見放されるのだ」

八雲「ほら大和、腕出せ腕。 チューンでつないでやるから」

鎖で腕と腕をつながれる大和とクリス。

百代「それじゃ第1試合。 いざ尋常に勝負！」

大和「ふ……クリスよ俺はたとえ勝負でも……  
女の子を素手で殴るような真似できない」

クリス「なに？ それは自分を戦士と見ていいない愚弄だぞ大和。  
これは誇りをかけた勝負。 遠慮は無用。 来い」

大和「勝手な自己満足は覚悟の上だが、もう一度言つ。  
俺は女の子をブン殴るなんて、できないのさ……  
だから次の勝負で頑張る事にするぜ。 ギブ……アップ」

八雲「第1試合勝者クリス！」

クリス「な、釈然としないぞ！」

優子「え？どういうこと？」

大和「他にいくらでも競うようがある。 他は負けん。」

納得してないなら、次で俺の戦いぶりを見ろ」

クリス「……」

明久「はい。解説の京さん。今の攻防を説明してください」

京「えー、第1試合の大和の狙いはこんな感じでしょう。  
肉弾系では勝てっこないので余計なダメージを受ける前に  
ギブアップすべき。だが、ただマイツタをするだけでは  
相手が納得しないので理由をこじつけ」

秀吉「なるほどのう」

クリス「ええい、それでは次だ次！」

雄一「クリスも勝ちを拾つたようでいい気分じゃないな」

雄一の言つたクリスは腹を立てていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6030v/>

---

バカと武術と召喚獣

2011年11月27日12時47分発行